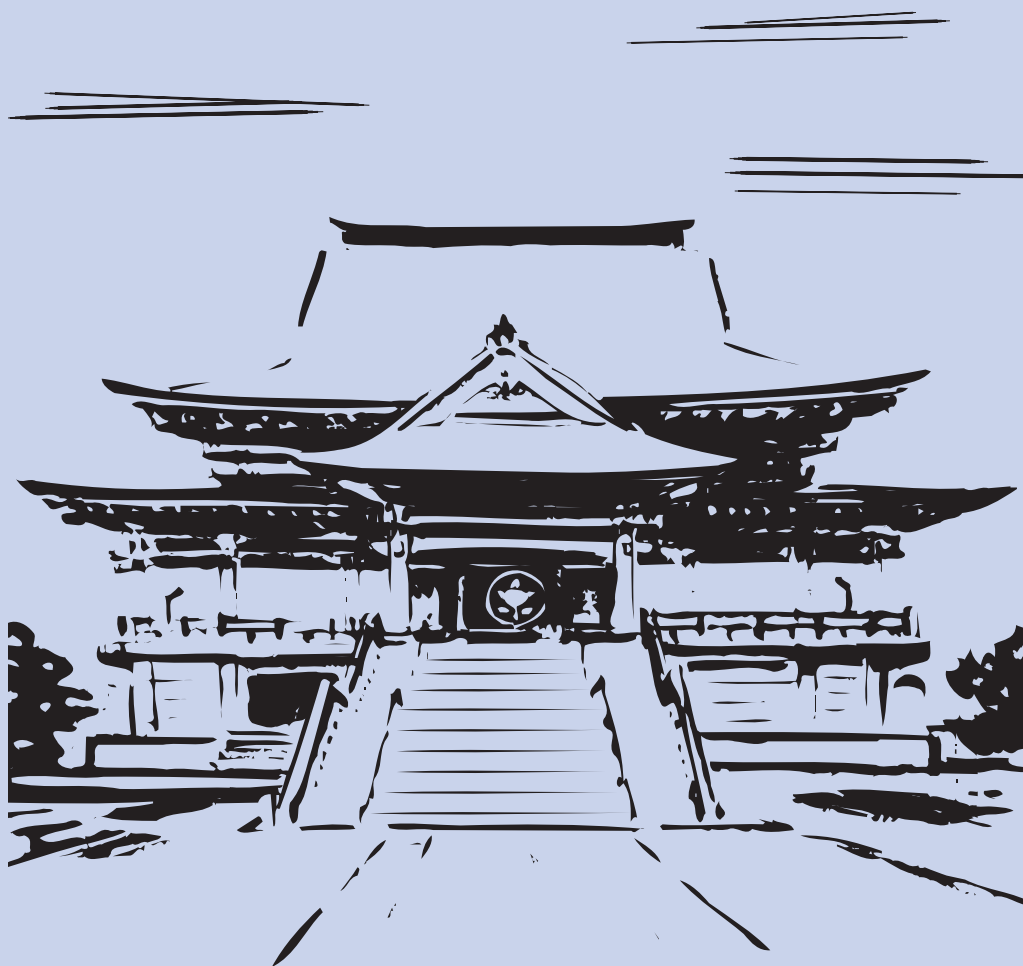


法音

平成25年2月号 (NO.520)

《山首上人さま 御葬送》



山首上人さま御葬送

法音寺第二世 顕修院日達上人

本通夜奉行

本葬儀・告別式奉行

歎 徳 日蓮宗宗務総長 渡邊照敏 貌下

弔 辞 日蓮宗名古屋宗務所所長 山川潮映 僧正

法音寺内局委員 葬儀委員長 寺田正義 氏

日本福祉大学 加藤幸雄 学長

ごあいさつ 法音寺副山首 鈴木正修

山首上人さま、法灯を絶やすことなく三徳を実行してゆきます

山首上人さまは亡くならない方だと思っていたのに……

■連載まんが・ひまわり・2 マーヤのぼうげん

■編集後記

表紙題字・山首上人さま

表紙絵・法音寺大本堂

みほとけよ

わがたましいを

とこしえに

みのりのために

つかいまさなむ

日達 四

ごかいさんしうにんぎょえい
御開山上人御詠

諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後に誰か能く斯の経を護持し、
読誦せん。今仏前に於て自ら誓言を説け。

〔見宝塔品第十二〕

願わくは世尊、以て慮いたしたもうべからず……諸の聚落・城
邑に、其れ法を求むる者あらば、我皆其の所に到つて、仏の
所囑の法を説かん。我は是れ世尊の使なり。衆に処するに畏
るる所なし。我当に善く法を説くべし。願わくは仏、安穩に
住したまえ。我世尊の前、諸の来りたまえる十方の仏に於て
是の如き誓言を発す。仏自ら我が心を知しめせ。

〔勸持品第十三〕



山首上人さま、私共会員一同必ず

異体同心し、慈悲・至誠・堪忍を

持ち続けることをお誓い致します



平成二十四年十二月二十日 午後七時

法音寺第二世 顕修院日達上人 本通夜奉行



式次第

第一鐘 十八時三十分 警装
第二鐘 十八時四十分 会衆昇堂
太鼓 十九時 師衆昇堂

先、開式

次、道場偈

次、勸請

次、開經偈

次、誦經

方便品

如来寿量品

如来神力品別付屬

次、祖訓

次、唱題



所作次第

次、宝塔偈
 次、回向
 次、四誓
 次、遺弟挨拶
 次、奉送
 次、閉式
 結、師衆退堂

大導師 栄立寺院主 光岡潮遠僧正
 副導師 聖運寺院主 伊藤友雅僧正
 副導師 休玄寺住職 近藤潮昭僧正
 首座 栄立寺住職 光岡潮慶上人
 知堂 善進寺中 中尾潮強上人
 知堂 重正寺住職 大金潮玄上人
 知堂 日行寺中 伊藤友範上人
 知堂 本覚寺中 伊藤秀温上人
 会行事 大法寺住職 佐治博英上人
 司会 妙泉寺住職 石黒泰良上人

平成二十四年十二月二十一日 午後一時

法音寺第二世 顕修院日達上人 本葬儀・告別式奉行



式次第

- 第一鐘 十二時三十分 警装
- 第二鐘 十二時四十分 会衆昇堂
- 太鼓 十三時 師衆昇堂
- 先、開 式
- 次、若親近法師、速得菩薩道、
隨順是師学、得見恒沙佛（三回）
- 次、勸 請
- 次、開 經 偈
- 次、誦 經 方便品
- 次、咒 讚
- 次、鏡 鉢 二、四、四、三、三、一



所作次第

大導師 日蓮宗宗務総長 渡邊照敏 猊下

次、献 茶
 次、献 供
 次、歎 徳
 次、弔 辞
 次、弔 電
 次、誦 經
 次、唱 題
 次、宝 偈
 次、回 向
 次、四 誓
 次、遺 摺
 次、奉 送
 次、閉 式
 結、師衆退堂

如来寿量品



日蓮宗宗務総長 渡邊照敏 猊下
歎徳



謹み敬つて勸請し奉る南無輪円具足未曾有大曼
 茶羅御本尊 南無久遠実成 大恩教主本師 釈迦牟尼
 世尊 南無證明法華多宝大善逝 南無平等大慧一
 乘妙法蓮華經 南無上行無逆行淨行安立行等本化
 地涌の諸大薩埵 別しては末法有縁の大導師高祖
 南無日蓮大菩薩 殊には当山始祖広宣院殿安立大
 法尼 二祖弘教院殿宗玄大徳 御開山泰山院日進
 上人等 悉皆慈悲影現道場證知照鑑の御前に於て
 一会の清衆と俱に恭しく一乘円頓の法筵を張り
 醍醐一実の妙経を誦し 以て日蓮宗大乘山法音
 寺第二世 社会福祉法人昭徳会名誉理事長 学校
 法人日本福祉大学学園長 顕修院日達上人葬送の
 儀を修し奉る
 謹んで状を案ずるに 上人姓は鈴木 字は宗音

諱は日達 顯修院と号す 昭和五年三月三十一

日 鈴木修学上人の長男として生を受け 長ずる

に及び昭和二十三年十二月十二日 師父修学上人

第一番の弟子として得度す 昭和三十四年三月

早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程

を修了 直ちに師父上人開学の日本福祉大学教育

学専任講師に就任す

昭和三十四年八月 身延山信行道場課程を修了

俗名忠臣を宗音と改名す

昭和三十七年六月 師父上人遷化を受け同年七

月 法音寺住職に就任 併せて社会福祉法人昭徳

会理事長 学校法人法音寺学園理事長 日本福祉

大学学長に就任 十一月一日 祈祷修法を發願し

大荒行第初行に入行 一百日の苦修練行を果し二

月十日成満 帰山す

爾後 大乘山法音寺山首として法華經・日蓮教

学の流布・宣布に挺身し 成仏への機縁を檀徒に

加被す その法徳に浴する信徒は幾十万なり

昭和四十三年 師父上人の夢実らずして思いを

残せし法音寺大本堂を建立 同四十八年 落慶法

要を厳修す この法功を以て宗門は上人を僧正に

叙す 加えて上人 全国に点在する師父上人開設

の寺院・教会・結社を大乘山の支院と為し 法音

寺門流の礎を盤石となす この間 上人の許に出

家・得度を志す有為の人士各所に輩出し 八十有

余名の法弟を数う これ偏に上人の為宗為法の念

篤き所以と言わずんば非ざるなし 現今法音寺支

院は全国に四十余を数え 始祖 御開山上人伝承

の菩薩道 慈悲・至誠・堪忍の三徳実践を以て衆人を無上道へ導かんとす

他方 社会福祉法人理事長として 旧来の児童

福祉のみならず時代の趨勢を推し図り新たに老人

福祉・障害者福祉にも着手 特別養護老人ホーム

安立荘 知的障害者援護施設泰山寮開設など 国

家の福祉政策に寄与する功大なり 今や社会福祉

法人は十五の施設に於て三十一の事業を運営し

千五百有余名の利用者が現世安穩の樂を受く 愛

知県下有数の法人に発展せり

学校法人理事長としては社会福祉学部のみなら

ず経済学部・情報社会科学部等を開設 その総勢

は六学部 大学院 福祉専門学校 付属高等学校

を運営し 学生総数一万二千余名 卒業生は七万

余名を超える中部地区有数の学園に成長せり 殊に社会福祉教育の水準の高きこと 江湖の知れ渡る所なり

上人 人となり温順 而も豁達明朗にして 人に接してよく語り よく聴き 懇切なること類を

みず 衆目の称嘆する所なり

偶々昨秋四大不調の兆しあり 名古屋市八事日

赤病院に入院・加療に務めらるるも徐々に病勢亢

進し 令夫人はじめ法嗣上人ら近縁の切なる治癒

の願いも虚しく 薬石の効遂に尽きて本月十八日

安祥として唱題涕泣のうちに化を遷さる 法音

寺全信徒 関係各法人の人々の悲愁 何物にか譬

えけんや

世寿八十有三歳 法蘭六十四年なり その法功

を称え宗門は平成十五年権大僧正に叙し 本年

一級法功章を授与す

嗚呼上人 則ち今や亡し 警咳再び接する能わ

ず 今霊前に至つて影像を拜せば 莞爾として將

に語らんとするが如し 而も又 声なし 哀惜言

う所を知らざるなり 乃ち葬送の儀を営み 諷經

唱玄拈香歎徳以て尊霊を寂光の宝刹に送り奉る

尊霊願わくば浄仏国土の化用を施し給わんことを

増圓妙道 位隣大覚

南無妙法蓮華經

維持 平成二十四年壬辰十二月二十一日

日蓮宗宗務総長 祥光院 日成

敬白



日蓮宗名古屋宗務所所長 山川潮暎僧正

弔辞



本日、大乗山法音寺第二世「顕修院日達上人」鈴木宗音権大僧正の本葬儀にあたり日蓮宗名古屋管内寺院・教会・結社を代表し謹んで弔辞を捧げ、哀悼の意を表します。

上人は先代・泰山院日進上人が礎を築かれた御当山を昭和三十七年七月法燈を継承され、以来本年迄五十年の住職歴を重ねられました。

その間、御当山の伽藍堂塔の建立、整備をはじめ、全国に各支院・布教所の設立を推進し教線の拡大、宗門興隆に御尽力されました。

また元より御当山は、法華経の菩薩道による救済活動を掲げ、全国に先駆けて福祉による社会貢献を実践し、社会福祉法人昭徳会による福祉活動、更に学校法人日本福祉大学を核としての教育活動

は全国的にも周知され、上人の多年に亘る法功に
対し国より紺綬褒章を、又、宗門より本年七月一
級法功章を顕彰されました。その比類無き活動は
名古屋管内においての誇りであり、心より敬意を
表させていただきます。

更に管内においても副山首・鈴木正修上人の深
い御理解を頂戴し山務員各聖の御協力の元、宗務
所行事をはじめ修法師会、布教師会、声明師会、
社教会、青年会等各会の布教活動に多岐にわたり
御賛助賜り、衷心より御礼申し上げます。

また、私事ではありますが自坊が近寺というこ
ともあり度々お会いする機会にも恵まれ、特に昭
和区仏教会では上人は会長、私は副会長を務め、
親しくお話をさせていただきました。その際、上

人はいつも優しい口調の中にも揺るぎない信念を
語る、誠実で博識なるお元気なお姿で接してい
た
いただきました。

今一度、そのお姿を拝したいと願っていまし
たところ、去る十二月十八日突然化を他界に遷され
たとの訃報に接し、誠に痛惜の情に堪えないとこ
ろであります。

ここに名古屋宗務所管内教師一同及びその檀信
徒と共に、上人の御遺徳を偲び深甚の謝意を表し、
衷心より増圓妙道をお祈り申し上げます。

南無妙法蓮華經

維時平成二十四年十二月二十一日

日蓮宗 名古屋宗務所長 山川 潮暎

法音寺内局委員・葬儀委員長 寺田正義氏

弔辞



山首上人さまご遷化。十八日早朝本山よりの連絡を受け我が耳を疑いました。

そんな……。

昨年10月9日ご在位50周年記念祝賀会を開催してから体調を崩されましたが、まさかこんなに早くご遷化されるとは……未だに信ずることはできません。

「一人から始まる」。安立大法尼の、明治42年名古屋市清水町仏教感化救済会での三徳開教宣言からちょうど百年に当ります。その間三先師のご在位が50年、決して順風満帆ではありませんでした。昭和37年6月7日御開山上人のご遷化により法灯を継承され今日に至っております。その間50年であります。三先師が積み置かれた膨大なお徳を開花させる大きな事業に尽力されました。

昭和22年頃から全国各地に支院が設立され、現

在支院30余、布教所11余となり、その殆どは建て替え、改築、移転等を果たし、檀信徒も増加し、支院・布教所は充実発展を続けております。昭和52年には支院の法人統一を果たされ、法音寺教団の礎を確立されました。又、御開山上人大慈悲による、社会福祉法人昭徳会の事業も現在、施設15、31の事業を営む全国有数の社会福祉法人となりました。

一方、福祉事業に従事する人材の育成、養成の為に、御開山上人が設立された教育機関・日本福祉大学は、昭和28年杵中キャンパスから始まり昭和58年に、開学当初の杵中キャンパスのほぼ10倍の広さを持つ美浜キャンパスに総合移転。平成7年には情報社会科学部半田キャンパスを開設されました。しかも現在通信学科を含め学生数一万余千人を超える現況で、大きく発展させられました。

このように宗教法人法音寺を中心に、社会福祉法人、学校法人共々の大きな発展に尽力されました。その50年でありました。

お疲れさまでした。

山首上人さまご遷化は事実ではありますが、山首上人さまは私たち檀信徒の胸の内、心の中に連綿と生き続けておられます。

今日からは、自分の立場、持ち場に於て、心新たに、精進に励むと共に、山首さまのご遺志のもと、僧俗一体となつて、信者を増やし、法音寺教団の発展に努めることを、お誓い申し上げます。どうぞ未熟者の私たちを霊山浄土よりお守り下さい。

平成二十四年十二月二十一日

寺田 正義

日本福祉大学 加藤幸雄学長

弔辞



宗音先生、山首上人さま。

こんなに早くお別れのときが来ることを思ってもみませんでした。いつも柔和な笑みをたたえて温かく私どもを包み込んでくださいました先生、そのお姿とご慈愛を私たち一同、終生忘れることはありません。

山首上人さまのご講演を法音「今月のご法話」でいつも読ませていただいております。最新号のご法話は「極楽と仏」でした。題字の「わが家が極楽にして仏さまになりましょう」という言葉は心にしました。「大事なことは、あたりまえのことをあたりまえにすることです。それをしてゆけば自然に家中がニコニコの生活となり、極楽になるに違いありません。極楽を『極く楽しい所』と書く意味もそこにあります」と書かれていて、なるほどと感心いたしました。

ご訃報に接し山首上人さまに「極楽と仏」を重ねて合掌いたしました。

山首上人さま在位五十年のお言葉では「大慈悲の實行」「力づくの時代は過ぎた」「トゲトゲし

い心をぬぐいさりたいたいものです」とありました。

御父上である修学先生が日本福祉大学を創設されたときの「建学の精神」には「大慈悲心、大友愛心を身に負うて」「自己保身榮達のみに汲々たる気風ではなく、人類愛の精神に燃えて立ち上がる学風」とあります。山首上人さまのお言葉は、いまの時代にそれを具体的に実行する道しるべを示されたものと受け止めました。

宗音先生のお言葉でとりわけ印象に残るのが昭和六十年一月二十八日の犀川バス事故の記念碑に刻まれた直筆のお言葉です。

「湖底に沈める若き命たちの尊さを思い、悲しみを二度とあらしめぬために」

短いお言葉の中に惻隱の情があふれます。まさに大慈悲心です。

宗音先生は昭和三十七年六月七日に遷化された修学先生の後を継がれて日本福祉大学理事長・学長に就任されました。大学が最も苦難に立ち向かわなければならなかった時代に宗徒のみなさまとともに今の大学の礎を築く先頭に立たれたのが宗

音先生です。ご在任中には大学院社会福祉学研究所、経済学部の開設、そして知多郡美浜町への総合移転という大事業がありました。

理事長・学長を退任なされてからは学園長として学園建学の精神を継承発展させるためにご尽力くださいました。大学の今があるのは修学先生のお導きに加えて宗音先生が「慈悲・至誠・堪忍」の三徳の教えを誠実に実行されて来られたからだと思います。

一つだけ残念なことがございます。それは来年に控えた大学創立六十周年と、その二年後の東海キャンパスの開設をご覧いただけないことです。私たちが残されし者は宗音先生、山首上人さまの徳をたたえつつ大学を一層発展させる所存でございます。

宗音先生、山首上人さま、なにとぞいまは安らかに眠りください。

衷心よりご冥福を祈って弔辞いたします。

平成二十四年十二月二十一日

日本福祉大学学長 加藤 幸雄

大乗山法音寺副山首 鈴木正修



皆さま、当山第二世・顕修院日達上人の葬儀に際しましては、格別なるご厚情を賜りましたこと衷心より御礼申し上げます。

日達上人は、昭和三十七年三十二歳で御開山上人御遷化の後を受けて当山の法灯を継承され、同時に社会福祉法人昭徳会の理事長、学校法人法音寺学園の理事長、また、日本福祉大学の学長、立花高校の校長等に就任されました。

当時の関係者や檀信徒の方々は、御開山上人という大黒柱を失い、また法音寺学園創立に伴う多額の借入金もあり、「この先、一体どうなるのだろう」という恐れや不安を抱かれたと言います。しかし、それはまったくの杞憂に過ぎませんでした。日達上人の五十年の在位の間に、法音寺も昭徳会も学園も大発展を遂げました。

それは日達上人の御努力、三先師が残された多大な功德、また関係者や檀信徒の方々の並々ならぬ御支援、御協力の賜であったことは間違いありません。加えて発展の理由として私がいいますのは、功德や支援、協力を集め、花開かせ、実を結ばせた日達上人のその御心と御性質です。

御心とは、いつどんなときでも、人を喜ばせよう、人に喜んで頂こうとされた、細やかな心遣いです。「お寺はサービス業でもある」とよく言っておられました。

実は本年の祝禱会を行なうかどうか、思案を致しました。そこで考えたのが「日達上人だったらどちらを選ばれるだろうか」。因習にとらわれず、人の喜びを第一に思われた日達上人なら、行なう方を選ばれたのではないかと判断し、挙行した次第です。

御性質とは、底抜けの明るさです。それによって日達上人は、どんな困難もむやみに深刻に受けとめることなく、超然として乗り越えてこられたと思います。

この御性質は御開山上人から受け継がれたものではないでしょう。昭和二十八年に日本福祉大学の前身である中部社会事業短期大学が開学しました。開学から四年目の昭和三十一年の暮れの忘年会のことです。法音寺の本堂に教職員が集まりました。この時、それまでの財政難はまったく解消されず、教職員の顔は不安でいっぱいでした。その冒頭、挨拶に立たれた御開山上人は言われました。

「大学の財政はいまや火の車であります。しかし、火の車は回るところが妙であります」

そのお言葉に、一同大爆笑となったと言います。

私が若い頃、大変感銘を受けた「夜と霧」という本があります。著者のV・E・フランクルが、ナチスドイツの作ったアウシュヴィッツ強制収容所での、筆舌に尽くしがたい過酷な体験をつづったものです。

この中でフランクルは、極限状態の中で生き残るのは、強い願望、強い使命感、そしてユーモアのセンスを持つている人だと言い、「ユーモアは生きるための闘いにおける、心の武器である」とも言っています。

平成二十五年の御法推進目標は「受勝妙楽」です。これは提婆達多品の一節です。「勝妙の楽」とは、法華経の教えにより、道を修め、人を喜ばしめ、それを自らの無上の喜びとすることです。

ぜひ今年は例年以上に、喜びを集めて徳の人となって頂きたいと思えます。さらに、縁ある人を徳の人に導いて下さい。それが、無上道にお見えになる日達上人が一番喜ばれることだからです。どうぞよろしくお願い致します。

これからも僧俗一丸となって日達上人の御恩に報いるべく、より一層精進してまいる所存であります。どうか変わらぬ御教示、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成二十五年一月一日

◎ 山首上人さま、法灯を絶やすことなく三徳を実行してゆきます

一人でも出来ることを実行しましょう

法音寺・鈴木修徳

今日、平成25年の元旦を迎えました。昨年末に『今年亡くなった方2』といった特集をテレビで何度か見ました。

「あの人も今年亡くなったのか。この人も今年亡くなったのか」と思いながら、山首上人さまもそういった有名人の方々と同じ一人なんだと思うように努力しましたが、なかなかそういう訳にはいきませんでした。

今でも、山首上人さまの思い出は、引いては返す波のように懐かしい思い出が浮かんで消え、再び思い出されるということが繰り返され、時には涙が溢れてきます。

私が病院へ会いに行くと、病院内の喫茶店へ行き、大好きなコーヒを飲みながら「修徳、今はどんな法話をしてるんだ？」と質問されたり、「支院へ行かせて頂いた」と話すと、「参詣者の数は昔と比べてどうだったのか」と聞かれたり、山首上人さまが留守にしている法音寺のことを心配されているご様子でした。

そして、山首上人さまは再び法務に復帰する日が来ることを信じて、リハビリも意欲的にされています。しかし、平成24年の11月から12月にかけて、風邪をひかれ、体調も下降線をたどる一方で、12月18日早朝、お別れは突然やってきました。

山首上人さまのご遺骨は、喉のところが薄いピンク色をしていました。それは、山首上人さまが50年間、法音寺の山首として法華経を唱え、絶えることなくご法話をされ、東奔西走された証であると思いました。

無上道へと旅立たれた山首上人さまは、いつまでも無上道から、私たちを見守り、守護して下さっていると思います。そのためには、山首上人さまの意志を継いで、法灯を絶やすことなく、慈悲・至誠・堪忍の法音寺三徳を実行していくことだと思えます。

「一人から始まる。今日一日から始まる」という標語のように、たった一人でも出来ることを実行して、今日という一日のために生きる精神が、今こそ必要な時だと感じています。



如来の所遣として如来の事を……

関支院主管・吉橋宗敬

去る12月18日、法音寺山首・顕修院日達上人さまが御遷化されました。謹んで増圓妙道をお祈り申し上げます。

昭和22年、二祖・宗玄大徳が御遷化され、その年、法灯を継承された泰山院日進上人さまが昭徳教会を設立されました。現在の庫裡厨房の辺りの建物の1階に小部屋があり、西向きに押し入れを改造したご宝前がありました。講日の日にはガラス戸や襖を外して開講されていました。山首上人さまはご宝前の裏の部屋で生活されていました。弟の宗ちゃん、犬飼の健ちゃん、伊藤実さん達が兄弟のようにされていました。時にはキャッチボールもされていました。23年には兄弟そろって出家得度をなさいました。ご宝前には御名披露の紙が張り出されていました。可愛い僧侶の誕生でした。

高校通学の時、一時大曾根の春日井氏宅に下宿されることになり、私は自転車でお布団を運んだこともございました。高熱が続き今の名市大の病院へ入院なされた時は、お庫裡さまが大変ご心配なされておられました。大学生の頃は東京下落合の旧家を御開山上人さまがご購入になり、布教の拠点とされました。猪原様がお住まいになり、そこか

ら通学されました。その頃は大野様や高木様が兄弟のよう
にされていたようです。

本部の方には鶏や豚も飼育されていて、休日が続く時な
どお帰りになっていました。「明日、兄ちゃんが帰って来
るから卵を取っておかない」と若き頃の山首上人さまに
召し上がって頂くために、卵も大切にされていました。

昭和25年、大乗山法音寺と寺号公称されて間もない頃、
御開山上人さまのお供をして、九州へ布教の旅に参りまし
た。当時は市電に乗ることもございましたが、時には自転
車に乗って名古屋駅近くの、森川氏宅に自転車を預けて行
きました。午後4時過ぎの汽車に乗っても超満員で、下関
か門司あたりで夜明けとなります。この間、下車される方
がいるとしばらく腰掛けることができました。午前9時、
博多着でした。在家の方のお世話になり、時にはお寺をお
借りしてご法座や講演会をされていきました。

会場移動の途中で新婚早々赴任され、ご苦労なされた生
の松原「ライ病療養所」の跡地に立ち寄ったことがありま
した。「この松の木は玄関の近くにあった松だ。あそこに
移築され会社の寮になっているのが当時の建物の一部だよ」
と、松林の中を歩いて海岸まで行くことになりました。

「この通りはどの松も枝が横に延びているだろう。紐一本
あれば首吊りも簡単だ……」。下は海岸特有の砂地でした。

進んで行きますとレールを取り除いた廢線の跡がありまし
た。「このレールを枕に死んだら、どんなに楽になるだ
ろう……そんなことも思ったんだよ」

やがて海岸に出ました。「本当に死にたいような気持ち
になって、夜、海岸まで来て岩の上に立って海を眺めてい
たら、向こうの方に人が立っていた。何かしら女房によく
似ているなあと気になっていたら、向こうも気になったよう
で、少しずつ近づくと女房だったな。『お前も来ていたの
か……』同じような思いだったなあ……」

月の明るい晩にお二人は話し合いながら療養所へお帰り
になられたそうです。その時、妊娠をされていたのです。
もし身を授けておられたら、山首上人さまはお生まれなさ
らなかつたのです。

法華経法師品に「当に知るべし、是の人は即ち如来の使
なり、如来の所遣として如来の事を行ずるなり」とあり、
また、「是の人は、自ら清浄の業報を捨てて、我が滅度の
後に於て、衆生を憐むが故に悪世に生れて、広く此の経を
演ぶるなり」とあります。是の人とは正に山首上人さまだ
と、私は確信致します。どんなところにも生まれようと
思えば生まれられたでしょうが、末法の私達を哀れに思わ
れて、清浄の境界を捨てて大勢の凡夫を救い助けるために
お生まれなさって、教化善導下さったのが山首上人さまで

法華經信仰の世界は、教える人は教える人、教えられる人は教えられる人という、一方的なものではありません。教える人が教えられる人であり、教えられる人が教える人であるのです。私も今、こうしてお話をしております。しかし私自身、皆さんに教えられることがいっぱいあります。また、今日聞いてくださったている方も、今度は誰かにこのお話をしてくださいませよう。そして教化されませう。そうすることが一番大事なことであり、それがまた、法華經の心に叶うことであるのです。

〔大白牛車(1)〕

あり、その山首上人さまのご教導をお受けできた私共は本当に幸せ者でございます。

昭和28年、中部社会事業短期大学が開設されました。先生方は超一流の先生で国立大学並のお給料。学生は国立大学なみの月謝。その上、定員80名。「研究費だ。図書だ。建物が欲しい」と要求も多く、資金繰りに困られました。寺から大学の方へ「どんどんとお金が出て行きました。

「借金もなあ、一億に手が届くほどになれば、銀行もよう潰さないと思うがなあ……」と、学長でもあられた御開山上人さまが私に漏らされたお言葉です。

昭和37年、御開山上人さまは御遷化され、山首上人さまが法灯を継承なさいました。その頃まだ3千万円以上の借金が残っていました。以後50年間の山首上人さまのご活躍は、誰一人真似のできない、大きな大きなご功績となって残りました。感謝の心でいっぱいです。

♪ 髪おろし弟子となりて数十年髪の毛ほども報いできず
にッ

法華經色説、三徳の実行は成仏の直道です。山首上人さまは久遠の仏の世界の中で生き続けられ、御開山上人さま共々魂は法音寺に留まって、日夜、私達をご守護下さっておられます。お姿は変えられなくても、衆生を度せんが為の故に、方便して涅槃を現せられたのであります。今こそ

心ある人々が協力し、新山首上人さま中心の信仰を堅持し、法音寺門流一丸となつて、総願達成に精進しなければなりません。その為の精進こそ大恩に報いる道であります。

皆さんと共に苦難を乗り越えて、前進して参りますことをお誓い致します。

我も致し、人をも教化致します

佐屋支院主管・村上宗顕

いつもにこやかで、明るく、優しく、慈眼視衆生というが如く私達に接して下さるお姿は、正に仏さまの如く頭の下がる山首上人さまでした。

当支院は港教会から始まり、足かけ58年になります。この佐屋の地に移る事になった理由は、港支院の老朽化と駐車場が無く、檀信徒の皆さんに迷惑をかけるという事に加えて、現佐屋支院の附近は温泉が湧くという事が魅力のひとつでした。山首上人さまに移転のお願いをさせて頂き、支院を建立して頂きました。

山首上人さまが常にお考えになられていた事、檀信徒の皆さんに喜んで頂けるようなお寺にしなければならぬという事を考えると、港の頃とは違いバザーを催す事ができるようになり、支院名物の串カツをはじめ微量ではあります、少しずつでもお考えに近付けたかもしれません。

4年前には、屋根・山門が整い、念願の落慶法要が山首上人さま大導師の許に厳修され、檀信徒一同、感激したことが昨日のことのように思い出されます。

このようにお寺も立派にして頂いたのですから、これから先は、器だけ立派でも中身が無いようなお寺では駄目なので、山首上人さまのみ教えを命ある限り「我も致し人をも教化候え」が如く精進し、一人でも多くの人に法華経、法音寺三徳を流布してゆく事を改めてお誓い致します。

信行を増進し、三徳流布に精進致します

安城支院主管・島田行学

御開山上人が御遷化の前、祖父江妙綱法尼に「しばらく旅に出ようと思うが、忠臣（山首上人）もお釈迦さまとお話ができるようになったので、私が旅に出ても心配ないだろう。安心して行ける」と語られたということです（樹徳 妙綱法尼とその時代）

このように素晴らしい高徳なる山首上人さまの隨身として10年間お仕えできたこと、また今日までご指導を頂きましたことは私の無上の喜びです。

昭和37年6月、法灯を継承され、全国の支院に御親教が決まりました。7月から9月の真夏の御親教です。当時と現在では鉄道、道路状況が違い大変なご苦勞があられた事



と思います。御親教には総代の鈴木鉦太郎様（御開山上人令弟）と、私が隨身として随行させて頂きました。関西方面は自動車で、九州、広島は夜行列車での御親教でした。

上野支院御親教の帰り、民家もなく、うす暗い山道を通つての帰路、順調に走っていたのですが対向車のトラックと出会いました。道が狭く左に寄せようとしたところ左前輪が側溝に脱輪し、大変なことになってしまいました。山首上人さまに大変なご心配とご迷惑をお掛けしてしまいました。その時、山首上人さまは「三人で車を持ち上げよう」と言われ持ち上げたのですが無理でした。民家もなく、車の通行も少なく思案していますと、後方から大型バスが来て止まり、建設作業員の方が5、6人降りてきて、側溝から出してくれました。お陰で無事、法音寺に帰ることができ、大変ありがたいことでした。

その後、度々鈴木鉦太郎様が「あの人達は変化の人だね。法華経には『変化の人を遣わして、之が為に衛護と作さん』と示されているが、正しくその通りですね。山首上人さまの大きなお徳のお陰です。山首上人さまは仏さまです」と話されました。

9月に全支院の御親教も終わり、山首上人さまは連日の御親教と夏の暑さで大変お疲れだったと思います。しかし「暑い」とか「疲れた」とのお言葉は一度もお聞きしたこ

とはありませんでした。

各支院では、初めてお目にかかる山首上人さまのお姿を拝し、感激と喜びでお迎えされていました。その人々についても優しく笑顔でお応えになっておられました。常に檀信徒の皆さんに喜んで頂ける事をお考えであった山首上人さまでした。真に仏さまです。

今後一層、山首上人さまにご指導頂きましたみ教えを實踐し、広宣流布に励むことが、山首上人さまの御恩にお報いする道と確信します。

益々信行を増進し、三徳流布に精進することをお誓いするものであります。

顕修院日達上人の増圓妙道を心よりご祈念申し上げます。

異体同心、広宣流布に努めます

京都支院主管・安藤順冠

山首上人さまがこんなに早く御遷化されるとは思いもありませんでした。今でも心が動転している次第であります。「法音寺には溢れるほどのお徳がありますから皆さん、このお徳をたくさんお持ち帰り下さい」とよくお話しされていました。

山首上人さまは83歳でご遷化されました。法音誌のご法話の中で山首上人さまは、お釈迦さまの生・老・病・死の

教えを分りやすく説かれていきます。いつも柔和なお顔で檀信徒に接しておられたお姿は今も頭に浮かび、とてもご遷化されたようには思えません。常に寛大なお心で私達を見守って頂いておりました。

法音寺支院のすべてを山首上人さまのお力で建て替えられました功績は、偉大なご努力の賜物であります。異体同心、広宣流布に努め、慈悲・至誠・堪忍を守り、行学二道に励むことをお誓い致します。増圓妙道をお祈り申し上げます。

永遠に生き続けて頂くために……

静岡支院主管・新庄義真

私は2度本堂落慶法要を行なうという僥倖に恵まれました。むろん山首上人さまの御徳によるものです。

昭和44年にこの地に赴任した時は袋井教会といっておりましたが、駐車場がないこともあり、すぐ移転して本堂を建てることを誓願いたしました。名称も静岡法音教会とあらため、早速土地探しとなりました。1年後には土地も決まり昭和47年、現在の所に新本堂建設となりました。その折、是非寺号を頂きたいと山首上人さまにお願いしました。まだ法人統一する以前のことですのですぐ許可され「どういう名前がいいのか」とたずねられました。即座に「山首

人間は何のために働くのでしょうか。自分のためであることは間違いないかもしれませんが、しかし、自分の利益だけを考える人たちの集まりの中におりましたら、気の休まるひまがないでしょう。毎日毎日神経がすりへって、そのうちに体をこわしてしまふと思うのです。そうではなく、自分のために働くそのことが同時に人のためにもなるような、そういう働きをして頂きたいのです。自分の利益が、また人の利益になるような働きをしてゆくのです。それが人間本来の生き方でありま

す。

〔大白牛車(1)〕

上人さまのご法号を頂けましたら」と申しました。「顕修寺か。いいだろう。顕修というのは、修養を積んで、その徳を世に顕わすということだよ」とお言葉を頂きました。その後法人統一され、寺号はなくなりましたが呼称ならいいということ、地元では今でも顕修寺と称させて頂いております。私のこだわりでしょうか、私の代は顕修寺という呼称をなくしたくないと思っております。

8年ほど前私は、大腸ガンという病をやみました。その時医師から、このままでは余命3カ月と宣告されましたが、お陰を以って山首上人さまの御徳をいただき、50日の入院で無事生還いたしました。退院の10日ほど前に、山首上人さまがお庫裡さまと修徳上人をとまなつてお見舞いに来てくださった。その時、私の顔をご覧になって「あんた、日蓮聖人のご臨終の場をやるというね。今ならそのかつこうでちようどいいんじゃないの」といつてお笑いになりました。一瞬なんのことかともどつておりましたがすぐわかり、大笑いとなりました。山首上人さまは座談の名手とつねづね感服しておりましたが、その時も私を励ましてやろうと、私共には思いもつかないようなことを言われ、その場を明るくなさったのです。私が長年日蓮聖人の役をやっていたことをご存知とは意外なことでした。

〔大白牛車〕や毎月の「法音」誌上のご法話をはじめ、私



達信者に説かれる膨大なご法話は、すばらしいの一語につきまます。まさに『今法華経』です。どんなご法話をされても最後は必ず「ありがたいと思うこと」で結ばれます。

「ありがたいことがあるからありがたいのではない。日常生活の中に些細なことを見つけてありがたいと思う。いつなんどきでもありがたいと思える人が仏である」

このことを徹底的に説かれました。私達信者はこの教えを肝に銘じて精進したいと思います。そのことによつて山首上人さまは私達信者の心に永遠に生き続けられるのです。

なにごともしなせばなる

和泉支院主管・上田智淳

昭和32年、16歳の春、御開山上人に拾つて頂いた私は、その後、昭和37年より山首上人さまの下で今日までに育てて頂きました。改めて衷心より感謝致しますと共に、心より深く御礼を申し上げねばなりません。本当にありがとうございました。

山首上人さまより受けしご薫陶は数知れずであります。事の由は、日々のご法話『法音』誌上のご講演はもとより、

慈悲 思いやる心がありますか？

あなたは何を与えることができますか？

至誠 持ち続けることができますか？

堪忍 自分が決めたことを守ることができませんか？
流すことができますか？

ゆずり合うことができますか？

精進 前向きに考えることができますか？

(徳を積むための努力を教えてください)

禅定 無心ですか？

(どこに意思をしっかりと定めておくかが大切ですよ)

仏智 大切なことを忘れていませんか？

(仏智とはほめることです)

苦 苦とは不満足という言葉におきかえて受けとめる

とよく分かるでしょう。

このように、法華経を単純な言葉に置き換えて語りかけて頂くことで、どれほど心が軽く、理解が進んだことであ
りましょう。

昭和55年に当地に赴任し、先輩諸師から山首上人さまの
ご経歴に汚点を残さないようにとの励ましを頂いたことが
ありました。当時、当支院の土地は公道に面しない袋小路
の状態でありました。私自身も如何ともなしえず、徳を積
んで時の来るのをただ待つばかりの有様でした。と同時に、
かつて山首上人さまが身延の大荒行ご成満後、日本福祉大
学の教壇での第一声に「人間の可能性の追求を再認識しま

した」と語られたお言葉が、今なお強く心に残っています。
昔の道歌に「なせばなる、なかねばならぬなにごと」と
ありますが、平成18年に支院新本堂が竣工、平成23年10月
30日に落慶法要を厳修し終えましたのも、正に山首上人さ
まの大荒行で得られました「可能性の追求」のご一念と、
ご生涯のご偉業の功徳を頂いての賜物であると一途に感謝
し、確信している次第であります。

重ねて述べれば、支院新本堂竣工・落慶の喜びは山首上
人さまのご偉業の結実でもあり、時同じくしてその務めの
一端をお手伝いできましたこと、この上なき誉であり果報
者であります。今後共、師の御恩に報いるべく法華経、法
音寺三徳の宣布に微力ながら勤めて参ります。

南無妙法蓮華経

医学・法律・経済・政治・芸術のすべてOKでした

大垣支院主管・香村浄音

〓世は無常であり、常に移り変わって行く〓

言葉の上では分かっていますが、今これほど実感として感
じたことはありません。まさかこんなに早く逝かれるとは思
いもありませんでした。

昭和38年に山首上人さまより得度を受け、法音寺の僧侶
の一員にさせて頂きました。新本堂建立が決まった頃でし

ようか、本山講日の時は山首上人さまのお傍で相談に見えた方の消滅等々、42年間にわたり未熟な私をお傍に置いて使つて頂けたことは、こんな幸せなことではないと思います。特にこの間、私の一番の宝と思つたことは、山首上人さまのところへ大勢の方が相談に来られ、適切なご教化をされるのをお傍で見聞きできたことです。山首上人さまは医学・病氣のこと、法律のこと、経済や政治のこと、あらゆることに深い知識を持たれ、どんな相談事にも応えられました。そのご教化も、時には厳しく、時には冗談を交えてその場を和ませていらつしやいました。長い間お傍にお仕えさせて頂いて感じたことは、ご教化をされる時、冗談交じりに言われたことにも必ず教えがあるということです。だから、笑つて軽く受け流してしまつてはいけないと思ひました。

ある時、40代半ばのご婦人が山首上人さまの所へ来られ、「この年になつてどうしても車の免許を取らねばならなくなつて自動車学校へ入つたのですが、仮免許の試験が5度受けても受からず、費用がかさんで家計に響き、時間も取られて大変です。早く合格できるようにお徳をお願いします」とのことでした。それに対して山首上人さまは「もう慌てずボチボチとやりなさい」と言われました。周りにいた人たちからドツと笑い声が上りましたが、山首上人さま

まは「早く合格してしまふとあなたは事故を起こしたりして、精神的な苦痛や大きな出費になつて大変なことになるから、もつと技術的なことを学びなさいという、仏さまの計らいなのですよ」と言われました。

山首上人さまは美術・音楽にも深い造詣をお持ちでした。時々、美術展のチケツトを頂いて見に行つたことがあります。お座敷の床の間には著名な画家・絵師の軸が掛けてあり、今日は何が掛けてあるのかなあ、と楽しみにしていたことも思い出の一つであります。

こんなこともありました。親子連れで胎教に来られた時、山首上人さまは腹帯を書かれましたが「あつ、間違えた」と言われ、新しい腹帯を出されました。するとまた書き間違えられ、計3枚も腹帯を書かれたことがありました。その時、親子連れのお母さんの方がこのご様子を見て、「ああ、これは三人分の胎教のお誓いをしないといけないことだなあ」と思われ、そのお誓いを山首上人さまにされました。法音寺の古き信者さんはこのようなよき悟りをされるものだな、と感心致しました。

またある講日の折り、珍しく相談に来られる方がごなともいない時があり、山首上人さまと私の二人だけの時がありました。その時に山首上人さまが誰に言うともなく、独り言のようにポツリと「信者さんを喜ばせんといかん」

自分が楽しいと感ずれば、人に分けてあげましょう。お寺で法華経のお話を聞いて感じたことがあれば、それを人に話してあげましょう。いいことは自分一人だけのものにしておかない、ということ。そうすることによって人の苦しみに・悲しみをいたり、悩みを取り除いてあげるのです。誰しも、苦しみに・悩みを持つております。法華経を実行して得られた体験を生かし、人を善に導いてゆくことが、法音寺に縁を結び、法華経を聞く人の務めであります。 (大白牛車(一))

とおっしゃいました。この言葉は今も深く深く心に残っています。これは私に優しく教えておっしゃって下さったのだと受け止めました。「信者の方が喜んで来て下さるお寺にしなさいよ」という教えだと思えます。

山首上人さまから学ばせて頂いたご教化の数々、語り尽くすことができません。たくさんのご教化本来にありがとうございました。少しでも山首上人さまのお心にそうようなお寺にしていきたいと思っております。どうか私たちを暖かくお守り下さい。増圓妙道……。

私にできることをさせて下さいませ

東京支院主管・猪原妙政

山首上人さま、顕修院日達上人、御在位50年の記念行事式典が盛大裡に終わりました。1年が経ちました。もう1年でも5年でも生きていて下さることを念願としておりましたのに、もう、せんすべもなく逝ってしまったのですね。病院にお見舞いにも行かなかったことを後悔をしても、もう間に合いません。唯々涙にくれるのみです。

私共夫婦と5歳下の日達上人は、仏さまの長子としてお生まれ合わせて、亡き御父上の泰山院日達上人さまをお敬い申し上げられ、御母上の光子様に孝行を尽くされました。弟君の宗保上人様の兄上として、こよなく弟君を愛され、

また、妹君のゆきゑ様のよき兄君として義を尽くされました。また、娶られたお庫裡様のよき夫君として、御心の豊かさは、いくら讃えても枚挙のいとま無きほどでした。もちろん、ご法嗣の正修上人様、修徳上人様への慈愛溢れる御教訓は申すまでもありません。また、私共弟子・檀那の方々への慈悲・至誠・堪忍のみ教えの先に、目にも口にも譬えようもない大きな施しが込められておりました。

万分の一のお返しも出来ずに申し訳なく、お詫び申し上げます。でも生命あらば、この御恩、殊に自分の出来る事をさせて下さいませ。法音寺のご発展のために微力ながらお尽くししようございます。

信者さんのサービス係に徹します

岐阜支院主管・前原智明

永い間お仕えさせて頂いてなかなか解けない疑問は、常に感じる威厳が何からくるのだろうという事と、お話しさせて頂いた時に感じるなんともいえない安心感です。一言というなら「お徳のなせるわざ」ということになるのではないかと。

最初にお目にかかったのは東京法音教会（現・東京支院）だったと思います。

運転席の下にあいた穴から地面が見えるスバル360の

助手席に猪原先生、後の席に山首上人さまに乗って頂いて、東京駅から当時目白にあった教会の往復を何度かさせて頂きました。そのお姿を懐かしく思い出します。

「運転の天才だね」という嬉しいお言葉は、くわえタバコで乱暴な運転に対する山首上人さま流のお優しい注意と、今になって反省する始末で、恥ずかしい限りです。

山首上人さまの学生時代、目白の教会にお見えになられた頃には大きな声を出されることもなく、たくさんみえた子ども達にも非常にお優しく接しておられ、また、いつもご本を読んで見えて、時には電話帳や辞書をもごらんになつておられた時もありました、と猪原先生は感心しておられました。風のように爽やかなお人柄はその当時から、周りの人々を明るく、清々しく、穏やかにされておられたのだと思います。爽やかさだけが格別ではなく、人が喜ぶか、そして徳になるかどうか物が物事の決定基準であったことが、凡智で考える私には理解出来ずに疑問ともなることが多々あり、今となつては慙愧に堪えません。

私の本山での最初の大事事は、大本堂の落慶大法要でした。緊張のあまりに頭から汗だくで随身を務めさせて頂いた頃、毎日がありがたく、好き嫌いもなく、嬉しい毎日の連続でした。

法音寺の僧侶にして頂けて、山首上人さまのような生き



仏さまに巡り会えた不思議な因縁に感謝せざるを得ません。
あるお上人が教えて下さいました。

「山首上人さまがご宝前で勧請されると諸仏善神がお出ましになって、ご宝前が金ピカの仏さまでいっぱいになりますよ」

いくら念じても私には拝めませんでした。あたりまえのこととは分かりつつ、そのようなことを体験出来る時も夢見ています。

思い出すことや、無知ゆえの恥ずかしい行ないなどいろいろありますが、今はこれからの行動によって反省懺悔させて頂きたく思います。

「人の喜ぶことなら何をしてもいいよ」という精神が大切だと思えます。岐阜に赴任させて頂いた時の心「信者さんへのサービス係に徹したい」に立ち返り、再びその心によって行くことで山首上人さまのご恩に報い、副山首上人の力になれないまでも尽力させて頂いて、次の生を期したいと思います。

来世もお弟子にして下さい

養老布教所主管・小森妙覚

山首上人さま、ありがとうございました。永い間ご守護して頂き、感謝しております。昭和38年に改宗して頂き、

一家内中御守護ありがとうございました。また、昭和50年に得度、お弟子に加えて頂き、とてもありがたく感謝しています。

顧みますれば昭和55年、お勝手に入れて頂き、毎日お姿を拝める事を嬉しく思っていました。平成元年に養老へ行く時もお心遣い、ありがとうございました。以来、今日に至るまでご守護、ありがとうございました。また、気分がすげない時もありの時に、お神通掛けて「山首上人さま、お徳をお願いします」と、無理を申し上げた事を本当にすみませんでしたと反省しています。お許し下さいませ。何一つ御恩返しもせぬ内の御遷化お許し下さいませ。不肖の弟子ですが、来世もまたお弟子にして頂けるよう精進致します。お師匠さま第一の不孝者です。お許し下さいませ。お世話になりました。ありがとうございました。

思い出を永遠に語り継ぎます

一宮支院主管・伊藤妙清

山首上人さまが御遷化されました私始め信徒一同、筆舌には言い表わせぬ哀しみでございます。

私は得度をさせて頂きまして30余年経ちます。山首上人さまのお慈悲にてこんな日がございました。御報恩の念を込めまして感謝の書と致します。

私こと昭和33年に母を亡くしました。その折り、御開山上人の大慈悲と信徒一同の御尽力によりまして22歳の未熟者が支院(当時の名称は尾西教会)に居させて頂けることになりました。御開山上人ご夫妻にも、娘同様のお心にてお目に掛けて頂いておりました。併せて御開山上人の叔父・泰岳院日芳上人にも大貢献して頂きまして、私は孫同様のお慈悲で包まれて来ました。終生感謝のみでございます。

昭和37年、御開山上人が御遷化されまして、一同の哀しみもひとしおでございます。山首上人さまがご継承されました翌年38年4月8日、日芳上人の一人途なお心にて今は亡き主人と結ばれました。主人は39年3月4日に得度をさせて頂きました。この折り私は妊娠中で、同月29日に男児が授かり二重の喜びでした。山首上人さま、日芳上人が祝福して下さいまして、山首上人さまより「篤志」と命名して頂きました。幸せいっぱい、感謝感謝でした。しかしこの幸せも束の間で、40年3月10日、日芳上人の御遷化で私と信徒は杖を無くした心地にて哀しいっぱいでした。そして41年12月14日に、主人に先立たれました。この時、篤志は満2年8か月でした。

16日の葬儀は山首上人さま大導師にてしめやかに営まれました。式の後、私が山首上人さまに御礼のご挨拶を申しました時「何も心配せんないよ。これからは何でも相談

世の中で誰が偉いといつて、堪忍をしたことがない人ほど偉い人はないでしょう。腹が立つから堪忍しようと思うのですが、腹の立つことがなければ、堪忍も何もありません。家庭の中でも社会に於いても、本当に柔和な心、感謝の心を持って「オレガ」という自我をなくしてゆるくすれば、堪忍などしなくてすむことばかりです。

自分のいる立場、住む家、周りの人々との間を自分が喜んで働くことによつてよくしてゆきましよう。それが信仰をする人の務めであります。

〔大白牛車(一)〕

に乗るでな」とおっしゃって下さいました。この時のお顔は慈しみに満ち溢れておみえでした。山首上人さまは既に主人の短命をお見通しであったのでしよう。もつたいなきお言葉を頂きまして、幸せ者でございました。

昭和42年3月頃、山首上人さまが私に「得度しないか」とのお言葉を下さいましたが、突然のことで、未熟な私だと思います。5月に入り講日の日、山首上人さまのお部屋へ伺いますと、私の顔を見るなり「大垣の息子が手伝いに行くでな」とのお言葉を下さり、同行者の方々と喜び合いましたことも忘れ得ません。これも支院の信徒の事を思われてのご配慮でしよう。

以来、大垣支院の先代・香村浩学上人の御子息・浄音上人にお世話になり、僧侶の役をお務め頂きました。今年で46年間、真心込めてのお働きに感謝のみでございます。今では信徒一同すつかり甘えてしまっています。これも山首上人さまのご配慮に感謝でございいます。

年が経ち54年の秋「もうそろそろ得度せねば」とのお言葉に「ハイ」の二つ返事で11月24日に得度式がありました、法縁のお仲間に入れて頂きました。厳肅な儀式に感無量でございました。

27日の講日に道服姿で山首上人さまのお部屋へ参りまし



て御礼を申し上げました時「貴女はその姿が一番良く似合うよ」と、しみじみとおっしゃいました。このお言葉を終生忘れることはございません。亡き母（妙操）と主人（宗善）もどれほど喜んでくれていることでしょう。思い起こせば、12年前に言われました折りに正しき返事もせず、今では反省と懺悔のみでございます。

昭和63年3月19日、篤志が得度をさせて頂きまして「行善」と名前を頂きました。山首上人さまのお慈悲で本山のお膝元に居させて貰い、皆さん方にお世話になり、幸せ者でございます。行善の思い出の一つとして、行善が小学校へ入学する折りに山首上人さまにランドセルを買って頂きましたことが思い出されます。行善のお父さんの役目までして頂きました。ご慈愛、行善ともども終生忘れません。

平成元年には支院の隣の家が他に移転されることになり、都合よく購入して貰えました。その後、山首上人さまのお声が掛かり、信徒一同の大協力も賜わりまして、2年から3年に渡り新本堂を建立して頂きまして、喜びも一入でした。私始め役員方も、今迄より一層御法精進を堅くすることを誓い合いました。

支院の門前は大江用水で、兩岸に春は満開の桜並木となります。花まつりにはちょうど見頃となつて楽しんで貰え、釈尊降誕会の法要には山首上人さまも毎年のように御親修

下さいました。参詣者も喜びいっぱい、このありがたい思い出は永遠に語り継がれてゆくことでしょう。そして山首上人さまが置いて行つて下さいましたお徳を基に、三徳の実行の大切さを皆さんにお話ししてゆくことをお誓い申し上げます。

私始め信徒一同、スツポリご慈悲に包まれて参りました。これからは、山首上人さまのご教化の数々と、最後になりました「生きている間しかお徳を積むことはできません。生きている間に出来る限りの徳を積んで罪障の消滅に努めましょう」のお言葉と併せて、一つ一つ実行に移して行くことが御報恩感謝になりますことを、皆さん方に話させて貰っている次第です。

今後の抱負と申しましたが、出来ませんが、信徒の皆さまに少しでも喜んで頂けます様、些細な心使いから実行させて貰うことの大切さを思わせて頂いておりません。

山首上人さま誠にありがとうございます。

信者さんに喜んで頂きます

福山支院主管・宮崎良祐

衝撃の日より2週間余りが経ちました。一文をどのこと
で筆を執ります。

得度を受けた師の御遷化は一生に一度のことですので、何と言葉に出していいのかわかりません。

一時代前、塩谷妙圓法尼という方がおられました。その頃、当然私は在家で、若い頃でした。その先生が言われたことを思い出します。

「本山のトップ、以前では会長先生、天の勅任官（祖父江先生がよく使われたお言葉）の代が変わり、継がれる時は、そのすべての力と徳の一切を次の方に渡される。我々の想像つかない世界がある」

先師の方から聞かれたのか、そう語り継がれたことを何か、はつきり覚えています。今がその時であるに違いないりません。

私達は、今までより一層精進をしてまいらなければなりません。

12月18日が御遷化の日でありましたが、その御遷化され逝かれる山首上人さまにお誓いをさせて頂いた言葉があります。

一、信者さんを喜ばす

一、因縁あるうちの子、晴久を救う、美栄を救う

一、堪忍をし、広い心となる

おこがましい個人的なことも入っていますが、お許し下さい。

うちの子が小さい頃病気で困り、家内とともに、「どのようにすると良いでしょうか」と、山首上人さまにお尋ねしますと、「信者さんを喜ばしなさい」と教えられましたことを、今も鮮明に思い出します。

まだ甘えさせて頂けますか？

福岡支院主管・大庭圓昭

「山首上人さまが御遷化されました」

朝勤を終えてご宝前から寺務所を下りてきた私の耳に、宿直当番の人の話す、聞こえるか聞こえないかの小さな声が届きました。「えっ、何て？」と思わず問い返しました。来て欲しくない日の訪れでした。

昭和54年12月1日、事務職として法音寺に勤務。昭和55年5月24日、得度式。お弟子の一人に加えて頂きました。

2回目の浄心道場を終えた月でした。以来33年余りを、お傍で過ごさせて頂いてきました。御遷化されて、悲しみと共に山首上人さまに甘えさせて頂いた多くのことが、次々と思い出されました。本当にありがとうございました。

覚えて下さっているでしょうか？私が初めて山首上人さまにご相談事したのは18歳でした。進学する大学を決めるためでした。地元の大学に進学し、卒業した後、父の勧める立正大学に進みたいと考えていました。山首上人さま

は「思うようにしてみたらいい」とおっしゃって下さると期待しての相談でした。ところがお答えは「遠回りしない方がいいね」でした。それで、お言葉の通りしようかと決めたのは、はつきりとは自覚していなかった、説明のできない山首上人さまへの信頼があったからでした。38年を過ぎた今も、あの時おっしゃる通りにしてよかったと感謝しております。

得度した後は周りの人に「よくそんなにご相談に行くことがあるね」と言われるほど、信者さんのこと、家族のこと、自分のことを1000回以上はお尋ねしたと思います。何か起こると「なぜなんだろう？どうしたらいいんだろう？」と考えることが先になつてしまう理屈屋の私に、「まず、徳を積みなさい。理屈は後から考えればいい」と、徳を積みれば今以上に状況が悪くならないこと、良い答えが見つかることをお教え下さいました。

「相談に来る人は、荷物を一つ持って来る。帰る時には、少しでも明るく、安心できるように、たとえ半分でも荷物が減るようにお話ししなさい」ともお教え下さいました。

結婚後、4人の子どもの1人が、おたふく風邪にかかった時のこと。周りの人からは、ご自身の体験から「夜中泣いていた」「水も飲めなかった」と大変だった話ばかり聞かされました。早速、山首上人さまにお徳をお願いに行き

人に信仰を勧めるには、自分がまず実行して、それから勧めるというのでなければ効果はありません。「法華経はこのように立派な教えです。信仰すればきつといいことがありますよ」といくら言っても、「ではあなたはどうかですか」と言われるようでは元も子もないでしょう。「私はこういう修養をして、こういう経験をしました。そして、このようにありたい功德を頂きました。ですからあなたも是非……」というように、相手が納得できるように、お話をして頂きたいのであります。

〔大白牛車(一)〕

ますと「順番に罹るといいね」とおっしゃいました。改めて3人のお徳をお願いに伺った結果、1週間毎に3人全員が順番に罹りました。夫婦で「山首上人さまのおっしゃったとおりになったね。不思議だね」と話すと共に、信じられないほど楽に済ませて頂いたことに、大きなご守護を感じました。

書き始めると、あんなことこんなことと、様々な記憶が甦るたびに感謝の足りなかつた自分を恥じ入っております。最後になりましたが、昨年6月28日、長男が得度させて頂きました。ご報告とお礼のお手紙を差し上げたいと思いつながら、そのままになってしまいました。一緒に得度した岩田孝学上人、後藤亮学上人と3人が、山首上人さまの最後のお弟子となりました。

ご遷化の知らせに大きなショックを受け涙しておりましたが、副山首上人から「若いお坊さんで葬儀まで交代でお経を上げるように」というご指示があり、長男もその一人に加えて頂け「僧侶としてお会いできなかつたけれども、一心に読経する声を山首上人さまが聞いて下さっている」と、親として嬉しく思いました。

御遷化されてから2週間余り、今年も3日間の新年祝禱会が無事に終わりました。副山首上人は行なうかどうかお考えになられたとのことですが、「山首上人さまなら行な

われたと思います」と、例年通り行なわれました。私には「それでいいよ」とおっしゃっていらっしゃる山首上人さまの笑顔が浮かび、まだご静養中のような錯覚に陥りました。

今は、三先師、先代・お庫裡様、宗保上人と、いろいろなお話をなさってお出でだと思います。勝手な想像ですが、御開山上人は「私よりも20年以上生きて、がんばってくれたね」と、嬉しそうにおっしゃっておられるように思います。

決して報い切ることのできない御恩ですが、これからは副山首上人・修徳上人の教えを請いながら、縁ある人に、法華経・法音寺三徳のみ教えを伝え、安心と喜びを届けることで御恩の一分に報いて参ります。ありがとうございます。

「まだ甘えるつもりかね」と、おっしゃるかもしれません。が、夢の中にも善きことをお教え下さいますように。

山首上人さまは「常住」です

豊川支院主管・三宅善祐

山首上人さまのご遷化に接し、大きな太陽がお隠れになったような、何とも言えない気持ちになり、悲しみに耐えられません。山首上人さまは、太陽のように暖かい、大慈悲に溢れたお人柄で、いつも我々を救って下さいました。

私は昭和61年12月より約10年間、本山より淡路支院に毎月1週間滞在させて頂いておりました。その縁を頂いて、淡路支院の開堂45周年に巡り合うことが出来、その記念として『わたしはたいよう／＼すぎやまたつこものがたり』の絵本を発刊させて頂くことになりました。絵は淡路支院の檀信徒の娘さんと、絵本作家の幸野由利子氏にお願いし、文章は広報委員会に依頼をし、無事完成することができました。山首上人さまにお見せする前に二、三の方にご意見を伺ってみました。すると「絵本か……」とそっけないご返事でした。それでも発刊する為には山首上人さまのご許可が必要となります。意を決して山首上人さまにお見せすると、その場で絵本に目を通して下さり、「これは良い本だね。短い文章の中に、杉山先生の一生が網羅されている。みんな良い本だと誉めてくれるだろう」と、私の心を分かってみえたのか、心を救って下さるお言葉を下さいました。そしてタイトルの「わたしはたいよう」はどんな意味なのかと質問されました。「杉山先生の三大誓願の『我、閻浮提の太陽とならん』から取らせて頂きました」と申し上げると「そうか」と言ってお領いて下さいました。

その後、講日や研修会に「わたしはたいよう」の絵本を使ってご法話をして下さいました。すぐに絵本の知名度が上がり、皆さんが「良い本だね」と言ってお下さるようにな



りました。同じ本でも、お徳のある山首上人さまがお墨つきを下されると、こんなにも価値が変わるものだと、お徳の大きさと大切さを感じました。

山首上人さまはご法話で「人間は二度亡くなる」と仰せになりました。一度目は命が終わるとき、二度目の死は、亡くなった方が皆さんの心から忘れ去られた時です。山首上人さまは50年間、法音寺を背負って来られました。その説法は、毎月『法音』の山首上人さまご講演に載って残されております。如来寿量品第十六の中に「常住此説法」（常に此に住して法を説く）とあります。山首上人さまはご遷化されても、いつも我々の心の中に生き続けてお見えます。

山首上人さま、ありがとうございました。

信者さんと共に励みます

安芸津支院主管・湯本妙順

病院で療養をしておられてもお元氣だと伺っていました。突然の御遷化の報に驚き、足が震えました。またお元氣になられ、支院にお出で下さることを願っております。願ひも虚しくなりました。

いろいろ長い間お徳を頂き、ありがとうございました。お通夜、葬儀・告別式に参列させて頂き、式の荘厳さに、

お徳の高さを目の当たりにさせて頂きました。その時私は、
「これよりは副山首上人に微力ですがお尽くししなければ
と心に誓いました。」

「徳を積むことが出来るのは生きている今、今世しかあり
ませんよ」

と教えて頂いたお言葉を信者一同と共に守り、三徳実行に
励んで参ります。

いつもお声を掛けて頂きました

西春支院主管・渡辺英寛

山首上人さまの御遷化に際し、心より哀悼の意を表しま
す。

私が法音寺事務所の電話番をやっておりました頃、「遅
くまでご苦労さん」と、いつも帰り際に声を掛けて頂きま
した。毎晩9時頃に山首上人さまは事務所に来られ、12時
時には1時頃まで執務されました。全国各支院から届け、
先祖供養や消滅・写経用紙にご祈念をされるのです。その
数や膨大なものがありました。

山首上人さまが執務室に入られると必ず、ほうじ茶をお
出しします。余談ですが、お湯で湯呑を温め、丁寧にお入
れします。だから今でも、お茶を入れるのは上手ですよ。

それ以前に執務室に私たちが入ることはないのですが、

お帰りの時は必ず「遅くまでご苦労さん」と声を掛けられ、
ご自宅に戻られました。日が替わるまで執務をされている
のは山首上人さまの方でしたが、電話番をしている私たちが
に声を掛けて下さったのです。嬉しいことでした。

翌朝6時頃、執務室の掃除をするのですが、先祖供養や
消滅・写経用紙等が山のようになっておりました。今改め
てその光景が想い出されます。

いつも檀信徒の皆さんの幸せを願っておられました。私
にとつて、とても大きな教化を頂いたと思います。山首上
人さまの御心を我が心として、精進させて頂く所存です。
誠にありがとうございます。

妙法を、我が行ないに致します

平賀支院主管・後藤善晃

平成24年のこの年は、私どもにとりましては生涯忘れる
ことのできない年になりました。4月に嫡男・光生が法音
寺に入山し、6月に出家得度させて頂き、山首上人さまの
徒弟としてご奉公させて頂けるようになって喜んでいまし
ましたが、12月に入り18日の朝、思いもかけない山首上人さま
ご遷化の報を聞きました時は、すぐには信じることができ
ませんでした。間違いであってほしいと思いました。今で
も、優しく微笑んでおられるお姿を思い出します。

「主人に話を聞かせたいのですが、どうしたらいいでしょう」と言う人がよくあります。身近な人を教化するには、言葉で「こうしなさい」という方法もありますが、それで信仰してみようという人は余程因縁の深い人です。しかし、そのような人は少ないものです。ですから、行ないによって感化するしかありません。怒りっぽい人が全然怒らなくなり、温和な人になれば効果はてきめんです。また、そうならなければ本当ではありませんし、周りの人を教化することはできないのであります。

〔大白牛車(1)〕

昭和43年18歳の頃、自動車免許を取得してから、毎講日母親と山首上人さまの教化室に伺うようになりました。ある時母親に、「今日は法音寺に行けないから、お前一人で山首さまのところへ供養金もって行ってくれんか」と言われ、ビクビクしながら山首上人さまの教化室に入ると、お庫裡さまも一緒に私の行くのを待っていて下さり「よう来た、よう来た。入りなさい」と言ってお下さりました。信者さんの供養金をお渡しし、相談事をお聞きし、忘れないようメモをしていると「仕事はどうかね。あんたはいくつになったの」といろいろな事を聞かれました。

それから得度させて頂くまでの15年間、母と法音寺の講日にお参りさせて頂きました。その間、山首上人さまが「この子はこんな髪(長髪)しとるけど、いざれ坊さんにさせるから……」と突発的に言われ、驚いたことがあります。

山首上人さまは初めの頃は優しく言葉を掛けて下さいましたが、法音寺浄心道場(信教師)を出る頃になると口調が厳しくなりました。今思うと、温かく見守っていて下さったのだと思います。

昭和43年、法音寺平賀布教所開設。

昭和58年、秋に現在地に本堂を建立して頂きました。本堂建立中、お忙しい中、足を運んで頂きました。また、土

地の無い信者さんに土地を購入し、御法の団地・信者さん宅16軒を建設した時も土地のご祈祷に来て下さり、支院墓地開設にもご祈念下さいました。

私は昭和59年4月に得度させて頂き、今年で約30年になりますが、家内と一緒にいる時です。家内は昭徳会の駒方保育園に勤めていました。その私が本山にいました時、山首上人さまが「ちよつとあなた、コーヒーでも飲みに行くか……」と声を掛けて下さり、私はビツクリして横にみえた副山首上人に、一緒に行って下さいとお願いしました。車の後部座席に乗せてもらい、山首上人さまに運転して頂いたのは後にも先にもこの一回きりです。喫茶店に入り、何も言うことができなくて下ばかり見ていました。山首上人さまは煙草を吸われながら「あの子（結婚相手）はなあ、身体も大きいが、いざとなると子どもを2〜3人抱えて走っていく子だ。あなたが心配しているのは、御法を行なってくれるだろうか、信者さんとうまくやれるかということだろう。わからんことはあなたが少しずつ教えてあげればいい」とご教化下さいました。私は「はい……はい……」と下を向いたままだったと思います。

— 今思うと妻・美恵子のことをも保育園でよく見ていて下さったのだと思います。山首上人さまの大慈悲、御高徳で、支院も、今の私もあります。山首上人さまに設立して頂い

た当支院です。

平成20年11月、三徳開教百年並びに支院本堂落慶法要に御親修下さったのが最後になりました。この時、子どもたちに対して「こうして二人ともがお寺のお手伝いをするということは、あんたらの育て方が良かったんだよ」とおっしゃって頂き、親としてこの上ない喜びでした。

法音寺新年祝祷会、御開山会に家族で参詣し、山首上人さまにご挨拶に行くのと、いつも子どもたちに声を掛けて下さったのが忘れられない思い出になりました。

〃妙法の道をきいても唱えても我が行ないにせずばかいなし〃（山首上人さま色紙）

御法を実践し、功徳を積みなさいというお言葉を教訓に、法音寺三徳のみ教えに邁進して参ります。

生かして頂ける限り頑張ります

高槻支院主管・関哉妙綾

突然の訃報に接し、一時は今後の心配をしましたが気を持ち直し、しつかりと今までにご指導頂いたこと、法音寺のみ教えを皆さまに伝えていかなければ山首上人さまに對して申し訳がない、と気を引き締めました。

山首上人さまが御開山上人さまから法音寺の法灯を引き継がれた時、「一緒にお寺の仕事を手伝ってほしい」とお



つしやつて頂き50年余り、元氣でお手伝いが出来ましたことを感謝しております。

今後、生かして頂ける限り、しっかりと頑張つてゆかなければ、と心にお誓いを致しました。よろしくお願い致します。

〳〵少しはできる〳〵ように励みます

明川支院主管・毛利行徳

いつか来る日と覚悟はしてはいたはずですが、いざやってくる夢の中のことのように、あまり実感がないうまま年を越したような気が致します。

願みれば大学入学後、半年ほど経つてお寺に下宿させて頂いた頃から数えると、四半世紀の間お膝元に置いて頂き、おりにふれ、たくさんのご教化を頂いたことになりました。

その中のひとつにこういうことがありました。

ある日、山首上人さまの執務室にお茶を出しに入った時、「あなた、この電波時計というものを知っているか？この時計は電波を受けて自分で時間を合わせるんだ。大したもんだわ、いつも正確だ。でもな、こつちの時計は放つておくと少しずつズレてくるから、ときどき調整をしなければならん。でもな、こつちの時計の方は可愛げがあるな」

と、何気なく語りかけて下さいました。

そのとき私はハツとしました、これは私に対するご教化だ。私は他の人に対しては、まるで電波時計に対するように正確さを求め（自分は大きっぱいでいて）、他人も自分も苦しくさせている。「求めすぎではいけないよ。心を広くしなさい。もつと寛容になりなさい」と教えて下さったのだと思いました。今でもついつい狭い心に傾き、窮屈になると『電波時計のたとえ』を思い出します。

山首上人さまのご教化はさり気なく、そしていつも絶妙でした。ただ私が「教え」とは気づかず、過ぎてしまつたことも多々あるように思います。今となつては勿体ないことだと痛切に感じます。

こんなこともありました。季節変わりの頃、山首上人さまがいつになく鼻声で、少しお風邪を召されたご様子でした。

常日頃、執務室からお菓子など頂かれたものを寺務所にいる私たちに「ほら、みんな食べんかね」と配つて下さるのですが、その日はいつも以上に積極的に、何かを心に決めて配つて下さっているように感じました。

法音寺で伝えられていることに「風邪を引くのは慈悲が欠けたから」という教えがあります。つまり、風邪を治したければ慈悲を施すといい、ということ。まさか山首

上人さまの慈悲が欠けたということではないと思うのですが、先頭に立たれて御自ら、実直に教えを行なつて私たちに示して下さいたのだと思います。

このお姿を見せて頂いて、お釈迦さまの話の思い出しました。

盲目の阿那律尊者が「誰か、この針に糸を通して下さいませんか」と道行く人に呼びかけました。衣の綻びを繕いたいのですが、目が見えないため助けを求めていたのです。「どなたか、善を求めようと思う人は、この針に糸を通して下さい」。すると、どこからか懐かしい声が聞こえてきます。「せひ、私がさせてもらいましょう」。そばで答えられたのは他ならぬお釈迦さまでした。「お釈迦さまはすべての善と徳を兼ね備えられたお方です。そんなことをして頂くわけにはいきません」とかしこまつて辞退しようとする阿那律にお釈迦さまは「よいか阿那律、仏とて、小さな善をおろそかにしてよい道理はないのだよ。この世の中で善を求めること、私にすぐる者はない」とおっしゃって、阿那律の手から針と糸を取られた、というお話です。

お釈迦さまの話と山首上人さまのお姿が、寸分狂うことなく重なりました。

良医治子の譬えの如く、ご存命中は「困った時はいつでも助けを求めれば応えて頂ける」という甘えがあったよう

何事でも許してあげることが慈悲と思
っているとしたら間違いです。本当の慈
悲は、誤ちを正して正しい道に導いてゆ
くことです。子どもが、あれを欲しい、
これも欲しいとねだっても、何でも言う
まま与えるのは慈悲になりません。仏さ
まの教えは、すべての人を結果としてい
い方^{ほう}に導く^{じょうぶつ}ことが本筋^{ほんすじ}であります。
ですから、物^{もの}を与える^{あた}ることによって子^こど
もの心^{こころ}がゆがんでしまったり、許すこと
によって罪^{つみ}を重ねる^{かさ}ようでは絶対^{ぜったい}にいけ
ないのであります。
〔大白牛車(一)〕

に思います。これからは、残されたみ教えを、そして、示
して頂いたお姿を良業として、しっかりと飲み続けていかな
ければならないと思います。

山首上人さまがおっしゃられた「善い行ないができたこ
とをありがたいと喜ぶ」菩薩行を自分も実行し、人にも伝
えて、いずれの日かお目にかかれた時には、「あなたも少
しはできるようなったな」と言って頂けるように努めて
まいりたいと思っています。

『得度させてよかつた』と言って頂けるように…

岡山支院主管・梅田浄顕

山首上人さまご遷化の報を頂き、何をするでも無く呆然
とした時が過ぎました。入院しておられると聞いていまし
たが、時候がもう少し温かくなれば、またお会い出来る
と思つていましたのに、もうお会いする事が叶わないのだと
思うと、心が重く沈んでゆきました。

本山より二報三報と入り、急に慌しく各方面に連絡をし
たりしていましたが、何時も以上に気が抜けていて不安が
ありました。

大阪青年会の頃、講日を終えられた山首上人さまを新大
阪駅まで車でお送りさせて頂いていた頃がありました。あ
る時、「今日は梅田君の車に乗る」と言われました。私の



車はホンダクーペ2ドアで「乗り降りもしにくいし、後部も狭いです」と申し上げたたら「いい」と言われ、さつさと乗られました。私は嬉しくて、舞い上がって、今思うと、とても窮屈な思いを30分間されたのだと思います。

ある講日の後、運転中に山首上人さまと長谷川瑞昌上人がお徳について、ありがたいお話をされていました。実は私にも不思議な事が2回ありました。免許証を忘れ、一斉検問で止められた時、もう一つは赤信号に気が付くのが遅れて交差点に入り、警察官に制止させられた時です。不思議とどちらも罰金無しで許してもらえました。「お寺の用事の時は不思議です」と言い、「罰金がもうかりました」とお話ししましたら、後ろから山首上人さまが「そんな処で徳を使ったらだめだよ！」と強くお叱りのお言葉を下さり、びっくりしました。現世利益で得を求める信仰を戒められたのです。気を付けて走っていれば徳を使わないで済むわけです。山首上人さまに「もっと大切な処で徳を使いなさい」とご教化頂きました事は、40年以上経った今もありがたく感謝しています。以後、得をした時には徳を減らしたと自分を戒めています。

山首上人さまの徒弟として得度させて頂いた事は思ってもいかなかった事で、ありがたく感謝しています。身延山信行道場入行中、朝勤の登詣中に山首上人さまとお庫裡さま

のお姿を見た時びっくりし、どうしようかと心が動転しました。ただ頭を下げることしか出来なかつたのを覚えています。その日、副主任のお上人から「今日、松司軒で法音寺の山首さまとお会いしましたよ。大変良い師匠に出会われましたね」と褒めて頂いて、嬉しくて少し鼻高になつたように思います。

山首上人さまは出来の悪い私の将来に期待して、得度をさせて下さつたのだと思います。未だ期待外れであることを申し訳なく思っています。

山首上人さま在位50年、『法音』の山首上人さまご法話は何百回になりましたでしょうか、直接お教え頂くことは叶わなくなりましたが、説かれた教えはたくさん残して頂きました。私はこれを法音寺の教えの大辞典として活用しています。

御法推進全国大会で副山首上人より、山首上人さまのお言葉をお伝え頂きました。「生きている時しか徳は積めないから。罪は取れないから」。お通夜のご挨拶で「このお言葉が最後のお言葉となりました」とお聞きしました。このお言葉を噛み締めて、三徳の実行、広宣流布を更にお誓いして実行してゆきます。

恩師・山首上人さまに「梅田を得度させて良かった」と早く思つて頂けるように勤めて参ります。

気合いを入れ直します

三原支院主管・森野智広

入職した年の年末を控え、来年の節分会の案内文を作成、連絡をさせて頂いた時の事です。例年の通り過去の通信文を参考にして下書きを作り、起案して提出させて頂きました。が、否決で返されました。「あれ、何でだろう」と思いつながらも再度文章を練り直し提出しました。また、否決です。そうしてかれこれ、6度提出し直しました。我ながら悲しい思いをしていた時、執務室から出てみえて、皆の前で起案文をヒラヒラさせながら、「こんな案内文で分かるのか。何の役にも立たない」と言われ、全員が啞然としている中、部屋へ入られ戸が閉められました。皆凍りつき、当事者の私といえば頭の中は真っ白、どんな顔をしていたか、未だに想像できないような出来事でした。

皆居づらくなり、事務所から徐々になくなってしまいました。頭が回りだすようになって、本当にいろいろと考えました。皆の前で言われなくてもいいものを、とか、注意をして下さるとか、他に方法があるだろうと。気持ちの上で「優しい方」というイメージがあっただけに、そのシヨックたるや本当に強烈でした。それからは山首上人さまが怖くて怖くて、お顔を合わせることも出来なくなりました。

た。書類もお留守の時にさして頂いたり、引取りに行かせて頂くという有様でした。そうして一方では、この文章のどこがいけないんだろうと、ひたすら考えました。どのくらい日が経ったか記憶にはありませんが、はっどある事に気がつきました。それは、この案内文を出させて頂く当のこの私が、節分会の本当の意味も、当日までの準備、当日のすべて、後片付け含めて何も知らないということでした。文章だけにこだわっていて、中身はまるで分かっていなかったのですから、正に「何の役にも立たない」ということでした。「人を育てる」。ある意味一人前にしてやろうという大慈悲だったのですが、きつい荒療治でした。それがわかった後は、何もおっしゃらず起案文はそのままパスしました。「何という方だろう」と正直呆れました。これが仏さまという、次元の違いなのか、とつくづく感じました。

その頃の法音寺（昭和52年頃）は大変おらかで、バザー券が何枚出たかとか、どのくらい残ったか等は全然把握されていなくて、殆ど井勘定でした。また、過去の資料も何もなく、去年幾つだったかな、という有様でした。

そうして迎えた節分会でしたが、また、肝の凍るような出来事が起こりました。その頃はバザー券が5500枚くらい出ていたと記憶しておりますが、当日、品目の中のパ

ンが中々届かなかったのです。どうしてか調べると、誰もパンを注文していなかったと判明しました。他のバザー品目は、それぞれの係の人が準備をされますから、長年の経験で妥当な数字を読んで用意されました。事務所が注文するパンだけが抜け落ちていたのです。事務所中真つ青になりました。推進会の会長さんを始め、主だった人達が集まり対策を練りました。パンを手分けして買いに走ろうという意見が出されました。ですが1000や2000とは桁が違います。思いついたのが、大手のパン屋さん当たることでした。1軒だけ、数を揃えられるということが分かり早速注文しました。時間が遅れているので、会場へは、渋滞に巻き込まれて少し遅れているということにして何とか事態を凌ぎました。午後になつて、山首上人さまが「パンを注文していなかったそうだな」と、ニコつとして言われました。ご存知にもかかわらず、現場の間には一切何も言われなかったのです。器の大きさ、慈悲の深さ、優しさ。思わず頭が下がりました。

その時に、今後はお寺の行事について、事務方のことはすべて自分が責任を持つと決心しました。その後は、また山首上人さまのお顔も普通に見られるようになりました。それでもその後2〜3度大きな失敗をし、その度にきつい荒療治を受けたものです。

法華經を聞き、信仰をしてゆこうとする以上、自分の願い事を満足させるだけではいけません。そこに留まってしまつては取引と少しも変わりないのです。もちろん願い事が叶えられること自体は結構であります。もっと大事なことは、その事を通して少しでも人間が向上するように、仏性が磨かれてゆくよう修養を続けてゆくことです。得られた喜びを自分だけにしまっておかないで、周りの人縁ある人すべてに平等に施してこそ初めて、信仰をしていると言えるのであります。

〔大白牛車(1)〕

辛い思いをするのですが、鈍い私にはそれが大変大きな教化だと分かるには時間がかかりました。分かったあととは、とても大きな感謝に変わるのですが、その時に思ったものです、「到らない私でご苦労をおかけしまして、申し訳ありません」と。それ以降今日に至るまでたくさんご迷惑を掛けたり喜んで頂いたり30数年でしたが、それもすべて山首上人さまの大慈悲の下でのことでした。

御遷化の報を聞いた日には、腑抜けのようになってしまいました。現実には葬儀が済んだからには、また気合を入れ替えて檀信徒の皆さまと共に、一から報恩の道を歩みたいと念じております。

哀しみの連鎖を止め、喜びを際立たせます

郡上八幡支院主管・渡辺義彰

移ろい易く、確かなものが見えないこの世に於て「何を支えとし、心の拠り所として行けばよいのか」を掴むことができた人は、幸せな人と言えらると思えます。少なくとも、その人のその後の人生に於て、大きな節目となるに違いありません。

人は何の為に生きるのか……。

小生意気にも、そんな事を大真面目に考え、悶々とした日々を過ごしていた私は、縁あつて法音寺の門をくぐり、

そこで初めて山首上人さまから法華經・三徳の教えを聞かせて頂きました。

山首上人さまは、人生の生き方の基本となる三徳の教えを、噛んで含めるかのように分かり易く話され「このお坊さんは、私の事を私の為^にに話して下さっている不思議な人だ……」と思つたことが、40年余り前の事ながら、まるで昨日の事のように思い起こされます。

その山首上人さまがご遷化されたのです。「そこに居て下さる」だけで、そのことが支えとなり、心の拠り所となりました。

しかし、大切な家の真の柱が音もなく「スツ」と外されたのです。恰も無重力の世界にでもいるかのような気がしてなりません。それはまた、日を追うごとに現実のものとなり、翻つて、箸は膳に着けどもその味を知らずの譬え通り、これまで自分は、いかにその大きな支えに依ごと寄り掛かつていたかを思い知らされ、徳の無さを痛感しております。

山首上人さまの御遷化は、私にとりましては深い哀しみではあります、今、数多くの思い出が脳裏を駆け巡っております。

私が郡上に赴任させて頂いて数年が経つたある日の事「法話が皆さんのように上手に出来なくて困っております」

と愚痴めいた事を言いますと、山首上人さまは、「御法の話はむつかしく考えなくても、分かり易ければいいんだよ」と言われました。またある時は、「私は頭が悪く、能力もありませんので、何もできなくて」と悲嘆を訴えますと、「人は、一つの事ができればいい」と諭されました。私は目の前の霧が晴れたように、小躍りしながら郡上に帰つたことでした。

振り返つて「分かり易い話」ほどむつかしい事は無く、「善い事を一つを続ける事」ほど大変な事ありません。しかしその時は、心の霧が晴れ、闇に火が灯り、立ち直る事が出来ました。

ここに、山首上人さまの無量の御徳に謹んで感謝を申し上げる次第であります。

哀しみや辛さには、二つの役割があると思います。一つは、文字通りその連鎖です。そしてもう一つは、喜びを際立たせる役割です。その人自身を成長させる糧としての役割です。

法華經に「常に悲観を懐いて、心遂に醒悟す」と説かれ「是の好き良薬を今留めて此に在く。汝取つて服すべし。差えじと憂うることなかれ」と説かれます。

正に、その醒悟する心の中に御法があり、それを実践する意味もあると思います。



山首上人さまが残された「法華経・三徳のみ教えの誠」を心とし、慈悲・至誠・堪忍の実行に精進し、一人でも多くの人にこの教えを伝えてゆくことをお誓い致します。頭修院日達上人さま、ここに謹んで増圓妙道をご祈念申し上げます。

命ある限り精進を重ねます

四日市支院主管・祖父江瑞法

平成24年12月18日は忘れられない日となりました。山首上人さまにはいつまでも健やかにおいで頂けるものと思ひ、安心し、半ば甘えた気持ちもございました。そんな中で迎えた12月18日の朝、本山での朝勤を終え、寺務所にて御遷化の知らせを受けて頭が真っ白になり、ただ茫然と立ち尽くすのみでした。

ご葬儀が執り行なわれ、年が明けた今でもぼつかりと胸に穴の空いてしまったような、そんな気持ちでいっぱいです。

ふと我に返ると、在りし日の山首上人さまのお姿を思い出し、そのお言葉を反芻致します。今でも胸に甦るのは10年前、先代・祖父江瑞厚上人が病床にある時、四日市の病院までお見舞いに来て下さったことでした。まさかお出で頂けるなどと思ってもおらず、突然のご来訪で病室には暗

がりに明かりが差すようでした。山首上人さまは穏やかに微笑みを湛え、「どうだね、調子は」と病状について尋ねられました。しばらく父と話して「一日でも長くおられないかんよ」と励まして下さり、お神通まで掛けて下さいました。父と妹の2人のみでしたが、驚きのあまり、ただただお礼を申し上げることしかできませんでした。

山首上人さまがお帰りになった後、父はじつと天井を見つめ、しばらく考えたのち「ああ、そうか」とつぶやき、何か悟ったようでした。目にはしつかりと強い力がありました。

それから2週間後、父は穏やかに最期を迎えました。今にして思うと、父の体調も寿命のこともすべてお分かりになった上で、私達家族のためにそれぞれの心構えを授けて下さったのだと思います。仏さまの深遠なる世界と大慈悲の心をまのあたりに拝して、畏敬と感動の思いを新たにしたい体験でした。

以来10年間、本山の末席にて少しでも御恩を報じることが出来ればと参りましたが未だ至らず、未熟で薄徳な自分を恥じるばかりでございます。

山首上人さまは最後まで檀上にお立ちになり、ご講演をなさいました。酸素ボンベを傍らに置き、杖をつかれ、法華經・三徳のみ教えをお話しするお姿に、命ある限り徳を

積み重ね、妙法を弘めるために働くことを身をもってお示し頂きました。健康に気を付け、一日でも長く生きられるよう心掛け、仏さまのみ心に叶うよう精進して参ります。

半世紀の間、法音寺教団を支えられた大きな柱、私達を包む大きな傘を失い、今はただ茫然自失の状態でありますが、山首上人さまの遺されたみ教えを道標べとし、尊い御姿を胸に副山首上人・修徳上人の下、力を合わせて御法のために働かせて頂きます。

最後に、主管者を拝命してからも10年間、本山で山首上人さまのお傍に置いて頂けたのは望外の喜びであり、掛け替えのない幸せな時間でした。本当にありがとうございます。

三徳実践の徳が光り輝く喜び

神戸支院主管・田中常行

山首上人さまが御遷化され、呆然としています。しかし、一方では、今までありがたかったこと、喜ばせて頂いたこと、助けて頂いたこと等々、私の心の真ん中に常に居て下さり、感謝でいっぱいです。これは皆さま同じだと思います。私が小学校低学年の頃、御開山上人（御前様）が御遷化された時、両親や周囲の方々が衝撃を受けられ、呆然と不安に陥ったことがあります。子ども心に私も、これから

法華經には隨所に「法華經を持つことは難しい」と説かれますが、これは、私共凡夫では法華經を持つことは不可能だということでしょう。もしそうであるなら、私共にとって法華經は無縁のものと言わなければなりません。そうではない筈です。

法華經は、法華經を信仰する者に不退転の決意を厳しく要求しているのです。法華經を実行して仏に成ろうとするならば、暇ができたらか、片手間にという、あやふやな心ではならないのであります。

〔大白牛車(1)〕

どうなるのだろうかと思っていました。そんな時、目の前に、頭髪・髭茫々、白い透けた衣を着たスラツと背の高い修行僧が、御前様のようにお加持をして下さいました。山首上人さまに初めてお会いした時の喜びの衝撃は、今も鮮明に残っています。あの時の神々しく頼もしい、清々しく優しいお姿は、子どもの私でさえ嬉しくて、不安や絶望が一気に吹っ飛んだ瞬間でした。

私がつと小さかった幼稚園児の頃、母が近所の奥さんに、「うちのお寺は成仏できるお寺なのよ。福祉の大学を創ったのよ」と言っているのを聞いていました。何を言っているのか分かりませんでした。子どもながら「成仏なんて、どうなるの」と不思議でした。不思議な話がいっぱいでした。学生になって、自分の意志でご法話を聞くようになって、山首上人さまは一つ一つ分かるように、納得できるように教えて下さいました。「どんな時でも、何があってもありがたいなと思える心があれば、それは仏さまの属性をもっているということ」と成仏を具体的に示して下さいました。

得度させて頂き、本山に居させて頂いている時は、勝手に「お父さん」という想いで近くにいて頂いている安心感と、充実感で一番気持ちの良い日々でした。

支院に赴任させて頂いてすぐ、自分の不徳で大変な窮地



に陥って苦しんだことがありました。どうしたらよいのか分からず、山首上人さまのところに行きました。「罪障消滅をお願い致します」という私の顔を見るなり「はいはい」と言っただけで下さいました。その瞬間から、苦しかった気持ちが一掃になり、帰ってから事態が好転し、解決しました。

山首上人さまが御遷化され、50年前の御前様の時のように、大きな衝撃であるのは確かです。しかし今は、副山首上人がおられます。山首上人さまが療養されていた時から法音寺の主の役をされてきました。副山首上人がおられるお陰で不安なく、落ち着いた心で山首上人さまを大恩感謝の思いでお送りすることができました。

法音寺100年の三徳布教と実践の積徳が、副山首上人の下に集まり、広く光り輝いていくことが、私たちの喜びです。

手抜き無しで一生懸命生きていきます

大阪支院主管・古山昭顕

山首上人さまが御遷化されたと聞いた時は、本当に驚きました。長い間、本当にお世話になりました。

私もまだ若く、山首上人さまがお元気な頃は、月に一度は大阪支院の講日にお出で頂き、お会いするだけでありが

たく楽しい心になり、講日に行くのが嬉しかったのを覚えて
います。

平成14年に得度させて頂き、本当にありがたく感謝して
おります。その年に、開基堂へ夫婦で赴任して下さい、と
声を掛けて頂きましたが、ちょうど大阪に住んでいる妻が
骨折入院をしていたので、山首上人さまに完治してからで
よろしいでしょうかと申しましたら、「良い病院は名古屋
にもあるから心配しないで、すぐに夫婦で任に当たって下
さい」と言ってもらいました。

開基堂は、御開山上人のご生誕地に建立された、ご宝前
の飾りが美しく、天井には花の絵が飾られた立派なお寺で
す。全国の支院・布教所からの参詣があり、皆さんに喜ん
で頂けるのだろうかといういろいろな心配がありました。しか
し、西春支院の渡边上人を始め、多くの方にお世話を頂き、
ありがたいかぎりでした。

そのうち、近所の信者の方々が行事あるごとに一生懸命
お手伝いして下さいようになり、感謝しております。山首
上人さまに「心配しないで」と言われたことは、本当にそ
の通りなのだと思わせて頂きました。

開基堂の研修棟に御開山上人のお写真を展示する事が決
まり、山首上人さまに「どのような写真を展示させて頂い
たらよろしいでしょうか」とお聞きすると、「大勢の方が

写っている写真がいいよ。皆がよく見ると思うので、おじ
いちゃん、おばあちゃん、知っている人を見つけて喜ばれ
る写真がいいね。御開山上人が一人で写っている写真は、
一度見ただけで見て頂けないからね。ハハハ」と、山首上
人さまは写真一つにしても、信者さんが喜ばれる事を考え
ておられるのだと感じました。

ある時、本山の境内にカリンの木があり、大きな実が非
常にたくさん実っていました。私はその木を見て、自身の
実で枝が折れるのではないかと思い、身の程知らずな木
だなど思っていましたら、ちょうどそんな時、山首さまが
講日のご法話で「境内のカリンの木を見ると、実をいっば
いつけて……一生懸命に実をつけたのでしよう。手抜き無
しでつけたんだね。私はそれを見て恥ずかしくなります」
とお話されたのです。これが仏さまの見方なのだ、と素
晴らしく感動致しました。一方で自分の見方を考えると恥
ずかしく思い、「手抜き無しで、一生懸命」という言葉を
私に言ってもらったように感じ、今でも胸に強く残っていま
す。

大阪支院に赴任してから1年が過ぎました。以前に頂い
た山首上人さまからの「心配しないで」とのお言葉を胸に、
大阪でもたくさんのご協力を受けてこれまで無事に務めて
こられました。これも山首上人さまのお徳によって導き頂

いた事と思ひ、ありがたく感謝しております。

これからも信者の皆さま一人一人に喜んで頂けるように、山首上人さまのみ教えをしつかり心に留めて慈悲・至誠・堪忍の三徳を実行し、広宣流布に邁進して参ります。

山首上人さま、本当にありがとうございました。

仏さまの誓願のお手伝いを……

田川支院主管・手嶋敬徳

平成24年12月18日、大導師・顕修院日達上人様御遷化の訃報に際し、まさか!!と言葉を失い、暫くはただ啞然とするばかりでした。

私は平成16年に山首上人さまを戒師として得度させて頂き、ありがたい現在に至っております。

子どもの頃から、本山には山首上人さまという仏さまがおられるとよく聞かされ、私自身もそう思っております。本山に行き、今まで遠くにおられた仏さまが毎日のように目の前に現われられて下さり、何とありがたいことになったんだろう。どうしてこんなありがたいことになったんだ。ありがたい、ありがたいと毎日手を合わせておりました。

この頃は本山寺務所裏の四季桜が少し元気が無いように見えて、何となく心配しておりましたが、まさか!!然し山

首上人さまの50年間の仏さまのお徳、ご守護に、ただただ感謝をし、心より御報恩謝徳させて頂き、原点に立ち帰り、法音寺三徳のみ教えを持つて凡夫を仏にする、仏さまの誓願のお手伝いをさせて頂く事を誓願致します。

一つでも多く実行してゆきます

上野支院主管・橋本妙富

山首上人さまには先師・真行院日浄上人・瑞光院妙淳法尼・顕行院日鍵上人共々に大変お世話になりました。支院行事、支院落慶法要、殊には三徳開教百年記念法要にとお越し頂きました、支院檀信徒一同共々ありがたく感謝しております。

個人的な事になりますが、私も至らぬところが多々あり、その度にご教化をして頂きました。特に脳内出血で一度だけでなく二度も病床に伏せましたが、その度にお徳を頂き、命を授かりました。何事でも山首上人さまに頼りきりになつてしまい、申し訳ない思いでいっぱいです。

最後に直接お目にかかれました時、本山行事に行かせて頂いた時でしたが、山首上人さまから「今、会つて話しておかないと、この後会えないかもしれない」というお言葉頂きました。「命ある限り出会ういろいろな事に対して一生懸命三徳の行ないに努力し、周りの皆さまに喜んで頂



ける事、役に立てる事を一つでも多く実行しなさい。そして三徳の御教えを伝えていきなさい」と教えて下さったのだと思います。「生きていく時しかお徳が積めない」とよくお聞かせ頂いていたことを思い出させて下さいました。

今の体の状態でも、自分が周りの人に対して出来る事、喜んで頂く事でお徳を積んでいかなければと思っております。この御恩に報いる為に、支院に於ても、また、どこにいても法音寺三徳のみ教えを伝え、実行していく事が一番大切なことだと改めて肝に銘じ、一つでも多く実行していく事をお誓い致します。

主管者の皆様の稿は、得度順に掲載させて頂きました。

山首上人さまの隨身として

東京支院中・猪原善昭

平成24年12月18日、午前八時ごろに本山の方から電話がありました。

「山首上人さまが今朝、御遷化されました」

「…そうですか…」

「ご連絡まで」

「ありがとうございます」

双方共に、言葉少なに、電話は切られました。

いつかこの日が来る事は、頭の中ではわかっていましたが、それにしても「早過ぎるな」という思いが強く湧きま

す。

思い返しますと、本山に山務員として、勤めさせて頂いた頃、昭和59年の11月から平成10年の3月までの間、山首上人さまの隨身をさせて頂きました。あまり機転が利く方ではないので、たくさんのご迷惑をおかけしたと思います。が、思い出の一つを記させて頂き、御報恩謝徳とさせて頂けたら、と思います。

何年前の事は忘れてしまいましたが、ある支院の主管者の方から連絡がありました。「御本尊と祖师像を一体ずつ持って来て欲しい」という事でした。隣家よりの類焼で、

夜中の火事という事もあり、着のみ着のまま、御婦人子どもさん三人(女二人、男一人)の五人は助かったけれど家は全焼してしまつたので、仮住まいの家に、御本尊と祖師像をお祀りしたい、という事でした。

支院での法要、御法話、特別加持が終わつてから、山首上人さまの所へその五人の家族が来られました。

まず、山首上人さまが、
「大変だったね」

とおっしゃられました。すると、ご主人が、

「大事な御本尊やお祖師様を燃やしてしまい申し訳ありませんでした」と答えられました。その後で山首上人さまがおっしゃられた一言に、横に控えていた私も驚きました。

「でも、みんな新しくなつて良かったよね」

しばらくの間、沈黙が続きました。その沈黙を破つたのは、下の娘さんの言葉でした。

「そういえばそうですね。私は姉と年も離れていないので、いつも姉のお下がりがかりでしたが、今回は何も無くなつてしまつたので、みんな新品です。こんな事は初めてですね」

その言葉に続いて、奥さんが、

「私共の家では、十年位前から家を建て替へようかという話がありました。しかし、なかなか踏ん切りがつかずにお

りましたが、今回の火事で否応なしに『みんな頑張つて家を建てようね』という話になりました」

とおっしゃられました。

山首上人さまのお言葉の斬新さと、お徳の力をつくづく感じさせて頂きました。

「みんな新しくなつて良かったね」のお言葉は、火元の方への恨みを抱かず、家族が結束して今後の暮らしに対処して行こうという、とても大きな力になったと思います。

今年の1月2日に、本山へ団参させて頂き、法要の後に副山首上人さまからのお言葉で「山首上人は明るい方だった」という事で、大荒行から帰られた時のお話とか、ご家族で食事をされた時に出て来たお食事についてのコメントとかを、ありがたく、楽しくお聞きしました。

山首上人さまは、確かに、いつも明るい受け止め方と、万事にスマートな方だったな、という事を改めて深く深く思います。

たくさんのお思い出がありますが、一生懸命やった事の失敗は「気にしなくていいよ」と言つて頂きましたが、手を抜いた失敗は「そんな事ではだめだよ」と教えて頂いた事が多々ありました。

自分のできる事で、まわりの方に喜んで頂けるよう徳を積ませて頂こうと思ひます。

山首上人さまの隨身として

法音寺中・島田知教

平成10年4月より今日までの14年間、山首上人さまの隨身としてお任せさせて頂きました。この間、三徳開教90周年、御開山上人御生誕百年、開基堂建立、開教百周年、在位50年、また宗門では、権大僧正に昇叙の際の東京日蓮宗宗務院への随行と、全山あげての大行事に常にお側でお任せさせて頂いた事は無常の喜びであります。

以前、総本山身延山久遠寺の法主猊下にお任せする身延山大奥隨身の方とお話する機会があり「隨身はお任せする方に、安心して無事に御公務を終えていただけよう先の先まで気を遣うのが使命であり、逆に気を遣って頂くようではいけないよ」と伺ったことがあります。

さて自分はどうかと言うと、支院に御親教の際、山首上人さまの必要品を準備して出かけるのですが、御法話でお使いになられる本を間違えて違う本を持って行ってしまい、大変ご迷惑をおかけしてしまったことがあります。しかしその時、山首上人さまは「その本を持ってきたのかね。次回にその本の話しようと思っていたから、いいよいいよ」と言ってくれました。その温かいお言葉に、動揺している私の心は落ち着きに満たされ、どんなにありがた

かったかしれません。またある時は、東名阪沿いのサーキット会場で大会があり、お帰りの際大渋滞に巻き込まれてしまいました。日程調整の段階で、イベント情報の確認不足だった事をお詫びしましたら「今日はこの後予定はない。明日の朝になってもいいからゆっくり帰ろうか。昔は遠方に行くのは大変だったけど、今は高速道路があつて便利でありがたいね」とおっしゃってくださいました。しばんだ心を大慈悲で包んで頂き、涙の出る思いと同時に、身延山大奥隨身の方の言葉が思い出され、山首上人さまに逆に気を遣って頂いたことに対して申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

信者さん方に対しても常に大慈悲心で接しておられました。悩みを抱えてご相談にみえる方に神通掛をされながら「徳を積んでいけば大丈夫だよ。後は仏様にまかせればいからね。よくお祈りして徳を送るから、心配しなくていいからね」と、大変優しく語られ、安心を与えておられました。14年間の中で教化して頂いた事、学んだ事は今後皆様にお伝えし、三徳の教えを広めていく事が御報恩謝徳であり、私の使命であると思っております。

最後に私事ではありますが、父・島田行学上人が最初の隨身で、私が最後の隨身と、親子二代にわたって山首上人さまにお任せさせて頂いた事は私の一生の宝であります。

山首上人さまは亡くならない方だと思っていたのに……

信教師一丸となって

広宣流布に邁進します

信教師会幹事長 河村佐一郎

平成24年12月18日、山首上人さま、ご遷化の知らせを頂きました。しばらくは信じられない気持ちでした。

平成24年11月3日の御法推進全国大会の副山首上人ご挨拶で、山首上人さまのお言葉をお伝え下さいました。

「生きている間しか徳を積むことはできません。生きている間に出来る限り徳を積んで、罪障を消滅して下さい」
このお言葉が今世での最後のご教化になりました。

私は信教師会幹事長を平成16年に拝命しました。毎年2月に開催されています全国信教師代議員総会の冒頭に、山首上人さまから励ましのお言葉を頂戴して参りました。平成16年2月29日には、「昨年までの御開山上人御生誕百年の行

事では、皆様方のお陰をもちまして、盛大に終えることができました。感謝致します。次の大きな行事は、4年先の三徳開教百年です。これに向けてより多くの方にご参詣頂くことが課題であります。

信教師、信者の方、それぞれ皆さんが布教師でありますので、教えを人に伝えてください。悪い事をして作る罪障はもちろんですが、するべき事をしないで作る罪障もあります。それぞれの立場で、自分のできることを行なって頂き、努力して頂きたいと思えます。よろしくお願ひします」〔法音〕414号〕と頂きました。

平成17年2月20日には、「あと3年で法音寺三徳開教100年を迎えます。これまでいろいろと紆余曲折を経てきました。これから三徳開教100年を迎えるにあたって、より多くの人に教えを実行して頂けるよう盛り上げてゆきたいと思えます。法音寺の強みは、すべての人が教えを説く人であるという

ことです。お寺のただで話しているのでは、教えが『寺泊まり』になってしまいます。外に向かって話し、教えを外に伝えていくことが大切です」〔法音〕426号〕と頂きました。

平成18年2月19日には、「法音寺は一人一人が布教師であるということが大きな力の基です。一人一人が、言葉でできる人は言葉で、行ないでできる人は行ないで、いつの時代も変わらず実行して頂きたいと思えます」〔法音〕438号〕と頂きました。

平成19年2月25日には、「いよいよ来年は三徳開教百年の年です。ありますが、私たちは新しい年を迎えるような気持ちで次の百年を迎えなければいけません。法音寺の力は、信者の方皆さんがそれぞれ布教師であるということにあります。こうした皆さんの力を活かして広宣流布に励んで頂きたいと思えます」

〔法音〕450号と頂きました。

平成20年2月24日には、
「杉山先生は百年前、一人から始められ



ました。少子化の中の布教は厳しいものがありますが、この教えをきちんと心に持つてゆくことが大切ですので、よろしくお願いします」〔法音〕462号と頂きました。

平成21年2月22日には、

「三徳の教えは、これからもずっと永遠に続きます。教えの内容を更に深めた実行をして頂いて、一歩ずつ着実に進んでいくことが良いと思います」〔法音〕474号と頂きました。

平成22年2月21日には、

「今年は3年間にわたって行なわれた三徳開教百年の最終の年を迎えます。こうして百年の節目に巡り合わせ、そして3年間にわたり開教百年の記念行事を行なわせて頂いたことは大変ありがたいことであります。これまでの百年を振り返り、更にこれからの百年に向けて布教活動に邁進していかねければなりません。これまでの百年は大変な時代でありました。また、これからの百年も大変な時代であると思いますが、この百年間を思えば何があっても耐えていくことができます。元氣

を出して広宣流布に励んで頂きたいと思えます」〔法音〕486号と頂きました。

このように山首上人さまは、私達信教師それぞれに大切な役目である「広宣流布」について、それぞれの時に合わせて懇切ていねいにご教示下さいました。振り返って、私達信教師一人一人はどれだけ山首上人さまの御導きにお答え出来るか、恥じ入るばかりです。

この機会に山首上人さまからご教示頂きましたことをよく噛み締めて菩薩道に励み、信教師一丸となって広宣流布により一層、邁進させて頂く事をお誓い致します。

御法仲間のお力を頂いて 三徳宣布に邁進します

檀信徒代表者会会長 上坂久生

山首上人さまの御遷化は思いもよらぬ出来事で、強い衝撃を受けています。今さらながら、もう少し御恩に報いられるよう、三徳の実行をしておけばと、ただ恥じ入るばかりです。

改めて山首上人さまがよくお話しされ

ていた、誰でも仏になることができるという、「我一人のみよく救護を為す」の意を強く持つて、家族や縁のある方々を喜ばせ、力となれるよう、御法を伝えて行きたいと思います。

先に、私の体験を述べさせて頂きます。学生時代、先輩（＝現三原支院主管・森野智広上人）から「大学の授業よりこっち（法音寺の講日）の方が（自分の）為になるよ」と勧められお参りさせて頂きました。その日は、鈴木宗保上人と山首上人さまのご話があり、宗保上人は、日本映画によく見られるような笑いがふんだんに盛り込まれ、対して山首上人さまの方は、外国映画のようなジョークを交え、ユーモアとウィットに富んでおり、まさに授業よりはるかに面白く、来て良かったと思えました。その後は毎月7の付く日（＝講日）には、授業をサボり、お寺に参ることを楽しみにさせて頂きました。

た途端、仏教専門書・学術本はもちろんですが、いろいろな本や雑誌、新聞、それも日本語だけではなく、英語で書かれたものや、さらには料理の本まで積み上げられており、その夥しい数と中身の凄さに圧倒されたことを思い出します。あの幅広いご話、ご教化の秘密の一端を目のあたりにさせて頂いた思いがして、今も忘れられません。見習うなどとはとても口はばつたくて申せませんが、一人でも多くの御法の仲間、山首上人さまのご努力を伝え、頂いた御恩に少しでも報いて参るよう、全身全霊、三徳の実践・流布を心からお誓いするものです。こんな私にはとても、檀信徒代表者会長などという重責が務まるとは思いませんが、山首上人さまのご守護を頂いて、何とか頑張つてゆく所存でおります。どうかお見守りくださいませ。

事務長としてお仕え させて頂いて20年

大野達男

平成5年から法音寺の事務長として山首上人さまにお仕えさせて頂いて、約20

年になります。この間、特に感銘を受けたのは、各支院の建設工事の打ち合わせです。山首上人さまの御指示は常に、檀信徒の方々が集まり易い建物にする事を第一に考えられ、殊に平成8年以降、支院の建物にはエレベーターを設置されました。

又、昭徳会の建物についても入居される老人の方、児童の事を考え、安全第一の設備にする様に、そして職員が常に入居者の出入、活動状況がわかる位置に事務所を配置する様に指示されました。

この様に法音寺の建物、昭徳会の建物には、山首上人さまの優しいお気持ちがかもつています。心から感謝して使いたいものです。

法音寺に入職して驚いた事は山首上人さま、お庫裡さま共々、公私をきちんとわきまえられ、ボールペン一本でも事務所へ支払いをされた事です。

私に対して常に言われたのは「広い心を持つて仕事にあたる様に。あまり将来の事を心配するより、一日一日を無事に乗り越える事が大事ですよ」ということです。この教えを守つて、今少しの日時を精進させて頂きたいと思つております。

兄・山首上人さま

大野ゆきる

昭和20年3月、寄木の実家で戦死された御前様の弟様お二人の慰霊祭が行なわ



れる為、山首上人さまと私と二人で出席しました。その日ちようど「名古屋大空襲」になり、翌日帰りでしたが、名古屋市内は一面焼野原となっていました。仕方なく二人で矢場町迄歩き、榎町で自転車を借りて山首上人さまが自転車をこぎ、後ろに乗せて頂いて駒方町の家迄帰りました。途中、名古屋大学病院のあたりで死体を乗せたトラックが次から次と追いついて行き、恐ろしい思いをしましたが、二人が帰った道は、八事の火葬場へ行くのと一緒の道だったと後で分かりました。本部の建物には縄が張られ、立ち入り禁止の札が立てられていました。7歳の私でも、大変な事になったと胸がしめつけられる様な思いをしました。

中学生の頃、広小路にあったヤマハ楽器店へレコードを買いに兄妹三人でよく行きました。チャイコフスキーの「イタリア奇想曲」「千八百十二年」等よく聴きました。S盤、LP盤の頃です。山首上人さまは私に、音楽が好きになるきっかけを作ってくださいました。

高校生の時、山首上人さまから「7月21日から大学で夏期講習があつて帰らないので遊びに来てください」とはがきが

来ました。私も夏休みに入るの、目白の東京支部へ行きました。山首上人さま、宗保上人が東京駅迄迎えに来てくださり、銀座でコーヒーを飲み、新宿に「チキンバスケット」を食べに連れて行ってくださいました。

山首上人さま、宗保上人が大学の試験を終えて帰省されると私の定期試験が始まる時期なので、社会は山首上人さまに、国語は宗保上人、理科、数学は伊賀上野の犬飼さん（名古屋工業大学の秀才・故上野支院主管・犬飼上人）に教科書とノートを渡し「大事な所に線を引いてください」とお願いして勉強していました。

山首上人さまから「大学院の卒業論文を清書してほしい」と言われた時には、夜書かれた原稿を昼間清書しました。その時は二、三週間、東京支部の猪原先生に大変お世話になりました。

何の取得もないこんな私を可愛がってください、その思い出は宝物です。

両親、兄の七光以上の恩恵を受け、何の恩返しもしないままお別れとなつてしまいました。もっと感謝の気持ち伝えておけば良かったと、大変反省しています。

溢れる涙と嗚咽の中でお見送り

東京支院

「山首上人さまが御遷化されました」との一報が我々に届いたのは、暮れも押し迫った12月18日の午後からその晩にかけてのことでした。

その時、何をしていましたか？と問われても記憶が飛んでしまっている方、逆にこれ以上ないほどはっきりと記憶されている方、どちらもおられるのではないのでしょうか？連絡が取れず、後から耳にすることに、呆然とされた方もおられたかもしれません。

お通夜は20日午後7時、名古屋・栄立寺の光岡上人大導師の許、執り行なわれました。総出仕の進師法縁の僧侶方は皆様、道服に裸足というお姿です。花祭壇があたかもお釈迦さまの涅槃像のように見えてきて、ちょうどこちらに顔を向けて横たわられているかのようにも見受けられました。

こみ上げる涙を押さえながら一心に誦経される参列者。本堂を響くその声に和しつつ、一方では様々な光景が臉の奥に漂います。

地下鉄・川名駅からお寺へ向かう道すがら、突然目に飛び込んできた外堀のご供花の列。足取り重く、やっとの思いで登りきった階段の上で目にしたご尊影。いずれも「山首さまがお亡くなりになったのは本当のことなんだ」と思い知らされた瞬間でした。

堂内いっぱいの人の頭越しに、棺の前に並べられたご愛用の拂子、経本・御書などが覗け、それがまた、冷酷な現実を思い起こさせてくれました。

暗く冷たい風の吹く中、訃報を聞いた人々が続々と集まって来ます。祭壇のご尊影から目が離せない人、必死にお題目を唱える人、様々にご生前の山首上人さまのご遺徳を偲ばれていました。

明けて12月21日告別式。

11時頃到着すると、既にお題目と木鉦の音が鳴り響いていました。実は、お亡くなりになられてからずっと法縁僧侶の方々が1時間毎に交代でされていると聞きしました。

午後1時、雅楽の奏でられる中、ご葬

儀が始まりました。大導師は身延山久遠寺の内野法主猊下に次ぐ日蓮宗宗務総長の渡邊猊下です。朗々とした誦経は本堂に響き渡ってゆきました。

方便品が終わり、大導師が歎徳文を奏上されます。日蓮宗名古屋宗務所山川所長、葬儀委員長の寺田正義法音寺内局委員、そして日本福祉大学加藤幸雄学長の弔辞がそれに続きました。

弔電が披露された後には、如来寿量品が静かに流れて焼香が始まり、副山首上人、修徳上人、お庫裡さま、ご親族の皆さま、進師法縁幹事長の島田上人、新庄上人、吉橋上人の各お上人方と続きます。境内では本堂に入りきれない大勢の皆さんが、特設されたテレビ画面に向かって合掌、誦経し、すすり泣きながらお題目を唱えていました。

「我々の昭和は終わってしまった」。後日になってもこのように慨嘆されている方がありました。今年、昭和の元号で数えれば87年。御開山上人との縁を受け、山首上人さまにも教えを受けられたというお年の方々にとっては、正に自分の昭和、自分の時代、自分の血肉との別れと感じられたのも当然かもしれません。

生きてゐる以上、たと

え病気で寝ていても人を

喜ばすことはできます。

徳を積むこともできます。

言葉の施し、笑顔の施し、

方法はいくらでもありま

す。

〔大白牛車(二)〕

ご焼香を待つ長蛇の列は、延々と続いていきます。

午後3時、愛弟子の僧侶の手に支えられた棺が本堂正面から出て来られました。参道両脇を埋めた信徒の間からいつせいに御題目があります。溢れ出る涙と嗚咽の中での御見送りです。

「留守になった修学、

魂は、永く法音寺に留まって檀信徒を守護します。(略)

法華経を流布して、徳を積んで下さい。心ある人々、力を協せてお願いします」……こう書き残された御開山上人の心を心として50年の長きに亘り教え、導いて

大声で叫びたい衝動にかられました

静岡支院

12月19日早朝、運営委員長より山首上人さまの御遷化のお電話がありました。「えー、ウソでしょ」と言葉になりました。

御開山会の法要にお出ましにならないので、少し体調が悪いかなど思っておりましたが、まさかこんな突然にお別れが来ようとは思ってもみませんでした。葬儀・告別式には支院よりバス1台

下さった山首上人さま。今、そのお勤めを果たされ、御開山上人に我々のことをご報告に出掛けようとされています。

その最後のメッセージは、何度も何度もお聞きしたあのお言葉でした。副山首上人がご挨拶の中で、再度伝えて下さいました。

「山首上人の最後のご教導は、生きてい

る時しか罪障消滅できないから、徳を積むように」
我々が山首上人さま、御開山上人にお目にかかる時、三徳の実行に努めました。と言えるようにと、誓いを新たに致しました。
(通信員 川合和美)

(45名)で列席させて頂き、境内テント内でお参りさせて頂きました。

山首さまのあのニコやかな優しい笑顔に二度とお目にかかることはないんだと思つと、とめどなく涙が溢れ出ました。弔辞の中で、大学、そして数多くの施設を作られたことは、大変なご苦労があったとお聞きし、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。私は事ある毎に「山

首さま、お徳を下さい」「山首さま、助けて下さい」と、何度お願いしたことでしよう。私のことばかりで、本当に申し訳ございませんでした。

最後のお別れのご出棺の時には「山首

ご法話をもつと聞きたかったです

豊川支院

さま、ありがとうございます」と大声で叫びたい衝動にかられました。
山首さまに「よく頑張ったね」と言つて頂けるように残りの人生、精進して参ります。
(通信員 大里訓子)

御遷化の訃報に言葉を失い、何処で何がどのように進んでいるのかも判別できぬまま、呆然と山首上人さまの処へ、山首上人さまのおそばにといい思いのみで、

通夜・葬儀に参列しておりました。五導六役の大葬儀での御尊影を仰ぎ見て唇を真一文字に結び、山首上人さまからのみ教えを、何一つ実行できていない自分に、悔恨ばかりが渦巻きました。支院の皆さまの声を頂きました。

○「支院から訃報のお電話を頂き、驚きと悲しみが込み上げて来ました。子どもころ母親から『病氣や怪我をした時、早く治るように山首上人さまにお願いするんだよ』と教えられ、消滅を致しました。私たちの願いを山首上人さまは何でも叶えて下さる生き仏さまなのだ、子ども心に思っていました。偉大なお師匠

さまの御遷化に涙が止まりません。山首上人さま、本当にありがとうございます」
三徳の実行に励んで参ります」
(岩田好夫)

○「通夜。本堂へ行き御尊影を拝見して涙が止まりませんでした。故・大高法尼の運転手として月3回、本山の講日に参詣させて頂いた頃、大雨が降れば「今日、車は大丈夫でしたか?」、雪が降れば「東名で来られましたか?それとも1号線ですか?」と、気さくにお声を掛けて下さいました。また、30年前(昭和53年)の胎教児証書授与式の一コマ、山首上人さまが長男と私にお話して下さいている写真が『法音』に掲載され、3年前、その長男の子どもに命名をして頂く為にお伺いした折、その『法音』をお見せしたら『ほー、私も若かったね』とおっしゃりな

がら、ずっとご覧になって見えました。主人・息子・孫3代が胎教児である我が家は幸せそのものです。山首上人さま、ありがとうございます」(岩田文子)
○「山首上人さまが亡くなられたとお聞きし、何と言ったら良いのか言葉になりません。息子も娘も胎教児としてお名前を付けて頂き、娘は生まれつき身体が弱かったのですが、山首上人さまに命を救って頂きました。その娘も、今では二人の子どもを授かりました。ありがとうございます。涙が止まりません。ゆっくりお休み下さい」(小野一二三)

○「御前様から山首上人さまに代わった時、ご法話で『堪忍は堪忍することが無い状態が良いんです』とお聞きしましたが、初めのころは何のことか分かりませんでした。何回となくご法話をお聞きしているうちに、少し理解が深まり、実行をしている自分に気づき感謝の気持ちが増えました。もっと多くのご法話を聞きたい」と法音寺に参詣したり、支院に来て頂くために昼間の講日にするように提案したりしましたが、実現しないうちに御遷化され、残念でたまりませんが、慈悲・至誠・堪忍の教えを守り、次



世代に伝えていきたいと改めて思いました」

(加藤哲男)

○「訃報の電話にしばらくは信じられませんでした。間違いであってほしいと何度も思いました。本堂のお写真に、本堂に亡くなられてしまったのだと悲しく寂しくなりました。私たち夫婦は二人とも働いているので、本山の講日には日曜日にしか行くことが出来ず、行けた日は一番前に座らせて頂き、ご法話を拝聴しました。平成15年に信教師の辞令を山首上人さまから頂き、お弟子になれたことがとても嬉しく、ありがたいことと思っております。山首上人さま、ありがとうございます」

(加藤幸子)

○「祭壇のご遺影が今にも優しく語り掛けて下さりそうで涙が止まりません。山首上人さまのみ教えを思い起こし、改めてお誓い致しました。最後となりましたみ教え、『命ある限り、お徳を重ねていきましょう』を心に刻み、精進に努力致します」

(河合カナエ)

○「私は山首上人さまに直接お会いして悩みの相談はしていませんが、心に残る思い出やお言葉があります。御法のことは何も知らず、報恩講習会で因果の二法

の教えをお聴きした時、また、ご法話で『本山には極楽行きの列車があります。それに乗るには切符が必要ですが、それは積んだ徳だけです』等、今でも忘れられません。最後のお言葉『生きてる間に徳を重ねて行きましょう』のお言葉に、一層人々の為に精進できるよう努めたいと思います」

(小林雅嗣)

○「山首上人さまのお部屋にお伺い致しますといつも『今日は何だった?』と笑顔で気さくにお声を掛けて下さいました。人生の岐路に立ち迷った時、また困ることが起きるとご相談に伺ってはご教示頂き、今日まで歩んで参りました。以前、

本山のお上人から、ご自宅の山首上人さまのお部屋には、いつも深夜2時頃まで明かりが灯っているとお聞きしたことがあります。山首上人さまの御一代は、我々凡夫には量り知ることの出来ないご苦労があまりに多かったと思います。そのご苦労を少しもお見せにならず、私たちにいつも楽しくご法話をして下さいました。まるで大学で授業を受けているようで、毎回とても楽しみでした。『どんな時にも、ありがたい』という心を持つ』というお言葉を肝に銘じ、私の出来ることで

皆さんにお役に立てる人間となるよう努力して参ります」
(鈴木晴江)

○「新年祝祷会で山首上人さまのお言葉をお聞きしてその年の方針を決め、実行しようと励みにして参りました。しかし、もうあのにこやかなお顔を拝見できないのかと思うと、残念でたまりません。これからはご教示頂いた慈悲・至誠・堪忍を心の柱として精進して参りたいと思います」
(福尾多枝子)

○「山首上人さまのお写真を拝見するだけで涙が止まりません。孫の病気の時、息子の病気の時、すぐ山首上人さまのお部屋へ伺い教えを請いました。あのお優しい笑顔とお言葉で生きる力を頂きました。御開山上人亡き後50年もの長い間、私たちのためにご指導下さいまして、本当にありがとうございます」
(宮川成子)

○「ご尊影を拝見した時、11月3日の御法推進全国大会で山首上人さまの最後のメッセージ『生きているうちにしか罪障を消滅することは出来ません。徳を積み重ねていきましょう』のお言葉が思い出され、改めて心に深く浸み込ませました。山首上人さまとはあまりお目にかかるこ

ともできませんでしたが、お言葉やみ教えは毎月の月刊誌『法音』を読み、お導き頂いております。山首さまの温かい心やありがたい言葉が溢れています」
(古橋八恵子)

○「16年前、韓国出向に際し、山首上人さまからの伝言は『何も心配することはないから、安心して行つてらっしゃい』とのお言葉でした。即決心し、出向生活がスタートしました。異国の地は、さっぱり意味のわからないハンゲル語。風習違いのトラブル、辛い辛い食事。景気後退で私の代で倒産かと思うと夜も眠れなくなりしました。帰国の度に山首上人さまにお神通掛をして頂き『社会人大学だと思つてやりなさい』と励まされ、身も心もスッキリして任務を全うできました。

み教えを実行する限りお会いできます

安城支院

婦国報告では『よく戻ってきたね』と労つて頂きました。すべて山首上人さまのお陰です」
(若松清一)

○「8年前、婦人病で手術を受けることになりました。山首上人さまのところに伺い、功德を積増させて頂くと『ああ、大丈夫だよ。心配ないから』と言つて下さり安心しました。奇跡が起こり、見つかるとは思いません。初期癌が発見されました。医師から『こんなことは今までになかった。何と運の良い方だ』と言われました。そのことを山首上人さまにお礼申し上げると『あんたは長生きできるわ』と言われたことが、今も鮮明に思い出されます。今私があるのは、すべて山首上人さまのお陰です」
(若松蘭子)

(通信員 鈴木康昭)

12月18日、当支院の定例講日です。島田上人のお姿がありません。参詣者の不安げな眼差しの中、午後2時、島田妙善法尼を導師に、信教師出仕で講日法要が執り行なわれました。その後、妙善法尼より、「大変悲しいお知らせがあります。

今朝7時44分、山首上人さまが御遷化になられました。お上人も朝からご本山に駆けつけて不在です。お通夜、お葬儀についてはバスを用意しますので、どなたでもご参列下さい」とお話しになられました。堂内は一瞬のうちに衝撃が走り、

どのように世の中が変わり、生活が変わっても絶対変わらないもの、変えてはいけないものがあります。それは法華經に對する信心であります。法華經信仰に對する根本的価値観は、どの時代、どんなことになっても変わらないものであります。

〔大白牛車(二)〕

驚きと悲しみに埋め尽くされてしまいました。生きた仏さま、山首上人さまをこの上なくお慕いし、たくさんのお徳を頂いて参りました檀信徒の皆さんの動揺は隠しきれません。人と人がぶつかりそうになったり、思わぬところに力が入り、手足を物にぶついたりという光景が目に入りました。しかし皆さん間もなく平常心を取り戻されて、日頃、山首上人さまから頂戴してきたみ教えの実行に心を移されました。

寺務所受付の、顕修院日達上人御報恩謝徳のご供養に列を作つて並ばれていました。

20日午後5時、お通夜参列に支院を出発しました。仕事の都合がつかない人もありましたが、「大切な方のお通夜です」と職場にお願いしてきた人も何人かおられました。

本堂に入りますと、今までに見たこともない莊嚴に飾られたお花に囲まれた山首上人さまの、ご慈悲に満ちた御尊影がお祀りされていました。やはり御遷化は現実なのだ、各々が自分自身に言い聞かせて一心に御経・お題目をお唱えして、お焼香をさせて頂きました。

翌21日午前11時、葬儀参列の皆さんを乗せたバスは本山に向かいました。

ありがたいことに本堂に入れて頂き、このような立派なご葬儀はかつてないのではないかと思われる、山首上人さまのお徳に満ちたお葬儀に会わせて頂きました。

日蓮宗宗務総長大導師により、多くの宗門お上人方列席の許、生演奏の雅楽も声明も心の底からの悲しみに震えて聞こえました。

副山首上人始め50余名のお弟子のお上人方は純白の衣に素足でのお見送りです。大導師の歎徳文も、弔辞を読まれた方々のお言葉も、決して美辞麗句ではなく、山首上人さまのあの時、その時のお姿そのものでした。私も檀信徒が日頃目にしている、心からお慕い申し上げてきたあの場面、この場面そのものが語られました。

焼香の後、境内いっぱい立ち並ぶ弔問者と入れ替り外に出ました。

納棺のお見送りの時は大階段下から開山堂入口まで人で埋まり、身動きが出来ませんでした。

最後のお別れの時がきました。先導のお上人に続き、若いお上人方に抱かれた

山首上人さまの棺が通ります。お上人方の素足が一層悲しみを深くしました。皆さん自然に涙が溢れ出し、泣きながら後を追いました。

クラクシオンが鳴り、ご出発の後、悲しみの人々の上を不思議な暖かい余韻が漂いました。残された私共は山首上人さまの偉大なお徳、ご慈悲に覆われていた

毎年料理をほめて頂きました

明川支院

当支院は、すぐ隣が長野県との県境と

いった山奥の小さな支院であり、紅葉で有名な香嵐溪のすぐ近くの所です。秋から初冬にかけて毎年、山首上人さまに御親教頂きました。自然薯でのおもてなし「とろろの会」を催すと、信者一同との会食を大変喜んで下さり、最後には「今年の自然薯はとても美味しい」と毎年言

って頂きました。「とろろの会」の始まりは、故・松井茂一先生が、山奥では大したご馳走もないが、ここならではの自然薯がある。これを召し上って頂くのと、地元の方々を専門にとろろを作ってもらっておりまし

たのです。

「お姿が見えなくてもみ教えを実行する限り、山首上人さまとお会いできる。山首上人さまのご守護が頂け、仏さまの世界と繋がっている」

法音寺信徒である大きな安心と、真の信仰の喜びを身体中に頂きました。

(通信員 位田久子)

ありましたが、毎年毎年「今年の芋はと

節目節目にご教化頂きました

一宮支院

山首上人さまが御遷化されましたことは、信者一同にとって大きな悲しい出来事であります。

支院ではこの秋から冬に掛けて、信者の方が三人続けて亡くなりました。亡くなられた方は、支院のご奉仕等で活躍された方で、また、家族にとっては大黒柱の方ばかりです。

その家族の方の悲しみを共にしていた私たち法友は、更に山首上人さま、法音寺の大黒柱の御遷化という知らせに、悲

でも美味しかった」とおっしゃって頂き、私たちを喜ばせて下さいました。

また、ある記念法要後の祝賀会での和太鼓の大音量は「明川の事は空前絶後であった」と言われました。小さな支院なのに毎年来て下さり、慈愛に満ちた笑顔、お言葉、お心遣いを頂き、本当に嬉しく幸福でした。

これからも自分のできることで他人様に喜んでもらえるよう菩薩行に励み、三徳の実行精進を信者一同お誓い致します。

(通信員 鈴木初枝)

しみに更に追い打ちをかけられました。

18日、お通夜は20日午後7時から、葬儀・告別式は21日午後1時からとのお知らせを支院から受けました。

私は早速、会社に20日午後休暇を頂きたいと届け出て、午後から喪服に着替えて午後5時に支院を出発、午後7時からの通夜に参列させて頂きました。

本堂いっぱい大勢の人が集まれ、内陣正面の中央に山首上人さまのお写真が掲げられ、周りには白い菊の花が、柔



らかに波打った見事な曲線を作り、その美しさに心奪われました。

受付で頂いた『顕修院日達上人経歴』を拝見していると、これまでお寺以外にいくつもの責任ある理事長の仕事にご尽力されたことに感銘しました。資料を拝見しているとご参詣の皆さまの中には、資料の取りまとめ、たくさんの部数の印刷が早くされたことに感心されていた方もみえました。

暫くして、山首上人さまと大荒行をご一緒されたという、栄立寺様御院首、光岡上人大導師による読経が始まり、その後、私たちも山首上人さまに感謝の気持ちを込めて焼香させて頂きました。

その後、副山首上人がご挨拶に立たれ、山首上人さまが御遷化の前に、私たちに最後の言葉として「命のある限り徳を重ねていきましょう」とおっしゃったとお聞きしました。

山首上人さまからご教化して頂いたことを思い起こせば、学生時代に次の就職、結婚、子どもや孫の胎教、父の葬儀、定年退職後の再就職、家の新築、病気の事等、いっぱい相談させて頂きました。そして今日の自分があります、本当に感謝

の念でいっぱいです。

明けて21日の葬儀・告別式には私はお参り出来ませんでした。話に聞きますととても立派なお葬儀で、5人の導師に6人の役僧により執り行なわれ、18か所での焼香でたくさんの方がお見えになったとお聞きしました。

今年は、果物が豊作の年のようでもあります。私の畑でも蜜柑がたくさん実りました。今から40年程前、山首上人さまが2人のお子様を連れて、蜜柑狩りに来て下さったことがありました。今の副山首上人と修徳上人です。お二人は、美味しそうに蜜柑を食べて下さいました。山首上人さまは蜜柑の木に「美味しくなるよう。たくさん実りますように」とお神通掛けをして下さいました。その後、甘酸っぱい美味しい蜜柑が毎年実るようになりました。今年もたくさん蜜柑が実りました。これも山首上人さまのお陰と感謝しています。

山首上人さまの御遷化は、本年最後の最大の出来事でありました。法華経・三徳の実行を強く心に誓い、相手を変えるのではなく自分を変えること、相手を喜

ばせること、因縁は変えることが出来る、
そして求めない、怒らない、愚痴を言わ
ないことを実行することなどなど、数々
のみ教えを実行してゆくことが、山首上

人さまへの御報恩謝徳となるのです。感
謝の気持ちを込め、心の底からご冥福を
お祈りさせて頂きました。

(通信員 坂井惟行)

ご法話を常に思い起こして参ります

西春支院

礼を申し上げました。

山首上人さま御遷化の報はあまりにも
突然で驚きました。講日での穏やかな優
しいお顔、奥座敷で明るくお話し下さっ
たことが頭をよぎり、二度とお声を耳に
することのない事に心が動揺しました。

12月20日午後7時からのお通夜も、各

方面からの弔問者で本堂内には座れない
と思つて参りましたが、「前へ順にお進
み下さい」との重なる誘導で、少しずつ
前へ前へと進み正座の場を頂きました。

広いご宝前は、いっぱいの花々で飾ら
れた立派な祭壇、その中央に安置の山首
上人さまのお写真は、法衣で正装の品格
溢れる温和なお顔でした。

通夜式の勤行は名古屋市内の日蓮宗門
各寺院の僧侶方によつて執り行なわれま
した。寿量品がゆつくりと読経される中、
私達も順次お焼香の列に加わり、唯々心
の中で「ありがとうございます」とお

特に印象深かったのは、副山首上人が
ご挨拶の中で伝えられた山首上人さま最
後のお言葉でした。「生きている内では
いと徳が積めないから、命ある限り徳を
積みましよう」。

私共に大切な指針をお教え下さいまし
た。

葬儀・告別式の21日も、冬日ながら風
もなく静かな好日に恵まれました。

当日は遠方からのバス団参者も多数と
聞いていましたので、入堂は無理と思つ
て来ましたが、座つての参列ができ、感
謝しました。椅子席も多数設けられ、関
係者の配慮と皆さん方の協力で本堂はぎ
つしりと大多数が入堂できました。

本堂の外回りは多くの花輪で囲まれて
いましたが、祭壇前の日蓮宗・身延山久
遠寺・内野日総法主猊下の花輪が目进行

きました。そして弔電も法主猊下始め次
々と読み上げられました。また、北側には
ご親族、各代表その他が着席し、南側
は清浄衣に身を正した法音寺僧侶の皆さ
ま方でした。祭壇よりの前列に副山首上
人様の凛々しいお顔が見られました。

読経は肅々と進み、堂内はしわぶき一
つない静寂の中、厳かな雰囲気に包まれ
ていました。各界の代表者が次々と弔辞
を述べられました。皆、一様に山首上
人さまの偉業、功績を讃えられ、温厚で
慈悲深く接して下さつたと、感謝のお言
葉でした。

長く並べられた焼香台に次々と歩を進
め、ゆつくりと香を手向けました。ここ
やかな優しい眼差し、温かいお言葉等が
頭に浮かび、胸に迫りつつ、心からの合
掌をさせて頂きました。そのあと私達は、
外で待ちわびていた参列者と交代すべく
席を立ちました。

階段ですれ違った中には、顔馴染みの
方も多くおられ、遠路いとわず告別式に
参列された信念深さに、自然に頭が下が
りました。

外にはたくさん椅子席が用意されて
おり、大きなストープ近くでモニターを

子どもはまだ小さいか

ら、何をしてもわからな

いだろう、と思っ

加減にしてはいけません。

子どもは、言葉の意味を

理解できなくても心は感

じるものです。本性を持

っているからです。

〔大白牛車(二)〕

見せて頂きました。

いよいよお別れが近づき、山内の若いお上人8名が棺の周りに寄り添って大階段からしずしずと歩を進まりました。目の前をお通りの時は涙が溢れ、深く頭を下げさせて頂きました。

「あたりまえの中にありがたい事がいつ

常に私達を大事にして下さいました

岐阜支院

ばいあります。幸せはその人の心の持ち方で、教えを聞いて心を広くし、いつもありがたいと喜ぶ心を持つことです」。このご法話のお言葉を常に思い起こし、出来ないながらも日々努めようと思っております。
(通信員 栗木良子)

山首上人さまの俄かの御遷化は、支院信徒に驚きと深い悲しみを与えました。知らせを受けた信徒の中には泣き伏して、

返答のできない人も多くいました。

山首上人さまには、大きな行事には必ず御来院を賜りました。慈悲深い笑顔で信徒に接して下さるお姿に誰しも自ずと手を合わせ、お題目を唱えるのが常でした。山首上人さまは信徒のために安全で快適な施設を提供しようと考えて下さり、そのために何度も増改築をして下さいました。お陰様で大きな駐車場が出来て、近隣にご迷惑をかけることなく安心してお参りできるようになりました。また、足腰の弱った人々のために、2階の本堂へ通じるエレベーターを設置して下

さいましたので、今まで本堂でお参りできなかった方も車椅子で本堂に上がれるようになりました。

山首上人さまがご自身のことより、信徒のことを如何に大事にお考えになっておられたかを示す出来事がありました。それは平成22年12月12日の三徳開教百年御報恩大法要が支院で厳修された時のことです。この法要は各支院が順番に行なうもので、当支院はたまたま最後に行なう事となり、この大役を果たすため信徒が一体となって準備に邁進しました。しかし心配なことが発生しました。山首上人さまが体調を崩されて法要にお出で願えないと通知があったからでした。準備中の信徒の中には心配と、御尊顔が拝せ

ない寂しさから力が抜けたようになって
者もおりましたが、思い直して山首上人
さまの一日も早い御快復を願ひ、ようや
く準備を整え、お客様をお迎えすること
が出来ました。

法要も半ばに差し掛かった時、突然、
山首上人さまが車椅子に乗られ、ボンベ
から酸素を補給されながら本堂に登場さ
れました。堂内に一瞬驚きの喚声が上が
り、やがて全員の拍手に変わりました。
居合わせた信徒の皆さんはどなたも涙を
流しながら合掌し、お題目を唱える声が
聞こえました。

山首上人さまは「信徒を落胆させたく
ない」という一念から当日、体調を熟慮
され、ご法話の間に合うぎりぎりの時間
に本山を出発されたということでした。

酸素のホースをお付けになってご法話
をして下さいました。この時の感動はい
つまでも忘れることが出来ません。

三徳開教百年の大事事も喜びのうちに
終えて、本山講日に役員でお礼に伺った
時の事でした。ご法話の中で支院から発
刊させて頂いた『篝火記念号』を手にし
てお話し下さったことがありました。こ
の時も私たちに無上の喜びを与えて下さ

いました。

山首上人さまは私達信徒を、我が子と
して愛するが故に厳しい修行もされ、法
音寺の名声を高めて下さいました。御前
様の御遺徳を継がれ、さらに発展させて
今日の法音寺にされました。

御開山上人伝の記述によりますと、
「寿量品に『衆生を度せんが為の故に、

和やかな笑顔と強い信念

大垣支院

(通信員 中村安子 代 竹村政孝)

平成24年12月18日、顕修院日達上人が
御遷化されました。ご入院されていたこ
とはお聞きしていましたが、そこまで容
態が悪いとは知らず、驚きを隠せません
でした。

通夜は本山にて同月20日午後7時より、
葬儀・告別式は21日午後1時より厳修さ
れました。

当支院も21日午前10時30分に集まり、
本山へと出発致しました。車内では「晴
れて良かったね」「やっぱりお徳のある
方は違うね」「ありがたいね」などの会
話が飛び交い、山首上人さまへの感謝の
気持ちがいっぱいありました。
師走という事もあり、多少の混雑はあ

方便して涅槃を現す」とある。修学の旅
立ちもこの理由にちがいない」と書いて
あります。恐らく山首上人さまも同様
だと思えます。そしてあのお慈悲に満ち
た笑顔で常に私たちを見守って下さるこ
とでしょう。

りましたが11時40分頃、本山に到着致し
ました。

本山はいつもの雰囲気と違い、外周は
供花が隙間なく並んでいました。平日だ
というのにすでに多くの人たちが見えて
いました。開山堂下で受付が行なわれて
おり、複数の受付がある事に気がしまし
た。私たち法音寺信者にとっては山首上
人さまであります。昭徳会・日本福祉
大学の方々にとっては、名誉理事長であ
り、学園長である事が伺え、山首上人さ
まの存在の大きさを痛感しました。

境内に入るとテントとイス、そして、
本堂の式を映すモニターが設置されてお
り、多くの方々にご葬儀に参列して頂け



るよう配慮されていました。そのまま本堂へ入ると、山首上人さまの大きなお写真が綺麗に配置された花で彩られています。そのお写真を見ると、まだまだ元気でおみえになるような錯覚を感じました。世寿83歳とのこと。つい去年在位50年を迎えられ、長い間私たちをお守り下さり、ご教化下さいました。もうご法話を頂けないかと思うと、とても悲しく思います。

午後1時30分より、日蓮宗宗務総長大導師の許、葬儀が奉行されました。葬儀が始まった時には、本堂は人で埋め尽くされ、境内にも人がいっぱいでした。途

中、お聞きする弔辞の内容から、山首上人さまの信頼の厚さ、お徳の高さが伺われました。その中でもよく山首上人さまは「和やかな笑顔」だったと言われています。私も幼少の頃に直接お会いする機会を頂いたのですが、その時も和やかな笑顔を向けて頂いた覚えがあります。和やかで、それでいて強い信念を感じさせる、そんなお方だったと思います。

お焼香をさせて頂き、ほどなくして出棺となりました。長い間、ご教化ご指導ありがとうございました。今はただ、心よりご冥福をお祈り致します。

(通信員 姫田拓男)

今にも話しかけて下さるようでした

関 支 院

12月18日、支院より山首上人さまの御遷化の訃報を受け、ビックリし、悲しみにくれました。

12月20日午後7時よりの通夜式に参列するため、マイクロバスで団参しました。本山の駐車場入口手前から多くの生花がお供えされました。境内は参列者のためにあちらこちらにテントが張られ、椅子が並べられ、暖房器具も置かれ、テ

レビも設置されていました。本堂に向かう大階段の下には焼香台が設けられていて、参列者でいっぱいでした。記帳を終えて堂内に入ると、清楚な菊の花などで飾られた祭壇の中央に、優しいお顔の山首上人さまのご尊影が祀られ、今にも話しかけて下さるよう感じられました。

午後7時よりしめやかに通夜式が営まれました。堂内と境内の参列者の焼香の

列が続きました。山首上人さまに心から感謝を込めて香を手向けさせて頂きました。

翌21日午後1時からの葬儀・告別式に参列するため、この日もマイクロボスで団参しました。本山には11時頃到着し、車中、支院で用意して下さったお弁当を頂き、記帳して本堂に入りました。

午後1時より日蓮宗宗務総長・渡邊照敏殿下大導師の許、式衆による笙の笛の音が静かに流れる中、葬儀式がしめやかに営まれました。

弔辞は名古屋宗務所長、葬儀委員長、日本福祉大学学長の3名の方が読まれ、皆さん、山首上人さまの偉大な功績を讃えられました。学長は「宗音先生、山首上人さま」と呼びかけられ、語りかけられ、感謝の言葉を述べられました。涙が、とめどもなく流れ落ちました。

焼香の時間となり、一斉に始まる大勢の参列者の列が延々と続きました。焼香を終えた方から堂内を出て、境内でお参りしていた方々と交替することとなり外に出てテレビモニターで手を合わせさせて頂きました。

副山首上人のご挨拶の中に、山首上人

さまの最後のお言葉が伝えられました。「生きている限り、お徳を積みましょう」と。

式が終わって出棺となりました。大勢の参列者が見送る中、麻で作られた清浄衣に身を包み、素足のお上人達に支えられたお棺が、本堂から参道を通り、靈柩車に載せられました。

参列された皆さんから、お題目と共に「山首上人さま、ありがとうございます」という思いがひしひしと感じられました。

お通夜、そして葬儀・告別式に参列させて頂き、在位50年の間、檀信徒のために多くの事績を残して下さった山首上人さまに心から感謝し、最後のお別れをしました。

これからは山首上人さまの最後の「生きていく限り、お徳を積みましょう」とのお言葉を心に刻んで、三徳の実行に励み、一人でも多くの方に尊いみ教えを伝えてゆくことをお誓いさせて頂きました。

○「山首上人さまの温厚なお顔の中に、50年もの長い間にたくさんのご事績を残されたことが感じられ、本当に頭が下が

りました」

○「『生きていく限り、お徳を積みましょう』のお言葉は、山首上人さまの最後のお言葉とお聞きし、とても心に残りました」

○「お上人方がお棺を支えられて参道を通られる姿に、これからこの方々が副山首上人さまに仕えて行って下さる人達と、頼もしく感じました」

○「大勢の信者さんに見送られ、靈柩車に乗られる時、在りし日の山首上人さまの優しいお言葉、柔和なお顔をもう二度と見るこの出来なくなつた今、悲しさと寂しさが一気に込み上げてきました。山首上人さまに心の中でお礼を言いました。三先師・山首上人さまの尊いみ教えを心に、これから一層、御恩に報いる行ないをしていくことをお誓いさせて頂きました」
(通信員 幅梅子)



親孝行は誰でもしても
らいたいに違いありません。しかし、自分が親孝
行をしていないのに、子
どもがしてくれるはずが
ありません。子どもは親
のすることをよく見てい
ます。親のすることを
見て子どもは覚えてゆく
です。

〔大白牛車(二)〕

短くても胸に響くお言葉

平賀支院

12月18日、山首上人さま御遷化の一報を頂き、思わず耳を疑いました。とうとうその時が来てしまいました。

人の寿命は無常なり。出づる気は入る気を待つ事なし……賢きもはかなきも老いたるも若きも定めなき習いなり……とお教え頂いていても、その日は永久に来なければよいのに……と。

山首上人さまに諸々のことをお願いして頼ってばかり、欲と怠け心ばかりの私でした。

法音寺におられた後藤上人より「今夜の法座をよろしく勤めて下さい」とのこと。法座の席で運営委員長さんから山首さま御遷化、通夜・葬儀の日程が発表されました。一同「えっ」と絶句。言葉がありませんでした。

20日午後4時、14名が本山に向かいました。本堂では祭壇前でお上人が読経されていました。合掌し、通夜式が始まるまで山首上人さまをお偲びしました。

21日の葬儀には35名が参らせて頂きました。

かつて名古屋市に住んでおられたAさんは、「法音寺へ御縁を結んで頂いた方と偶然、席が隣同士になりました」と言われました。30年ほど前にその方に講日に誘われた亡きご主人は、しぶしぶ参詣されましたが、山首上人さまのご法話を聞いて得心され、次からは進んで参詣されるようになりました。その後は、後藤先生と御縁ができて定年後、支院の近くに住まれ改宗までされました。懐かしい方とご一緒できたのも、山首上人さまがお引き合わせ下さったのかもしれない。

70代の一人暮らしの女性Bさんは「16日の支院の大掃除の後、疲れて眠ってしまいました。夕方、夢を見ました。山首さまが出て来られ、何かを直して欲しいと言われました。『今日は大掃除で疲れて無理です』と言いますと『来年はできないかもしれないから、今日を喜んで下さい』と言われました。愚痴を言わないようにと教えて頂きました。御遷化されたことを娘に話すと『私は山首上人さ

まのお陰で結婚できたのね」と言いまし
た。娘の結婚前、後藤先生と伺った時
『この娘はこの縁でないと結婚しないよ、
親を残して嫁ぐのは心残りかもしれない
が、幸せになれるよ』との山首上人さま
のお言葉で決心し、結婚しました。お陰
さまで三人の孫も社会人となり、幸せに
暮らしております。ありがたいことです」

50代のご夫婦は山首上人さまに「御
法に沿っていけば、何とかなりますよ」
と教えて頂き結婚できました」との奥さ
んのお言葉に「初耳です。今日まで後藤
先生が言われたと思ってきました。山首
さまにお聞きして頂いていたのですね」
と、感無量の面持ちでご主人と二人、お
見送りされました。

「25年前、大学の二次試験の日、本山で
お加持を受けて受験に行きました。『落
ち着いて受けなさいよ』と山首上人さま
に声を掛けて頂き合格できました」

40代男性

「おばあちゃんの代わりにお参りさせて
もらいます」。つい最近、祖母を亡くさ
れ、おばあちゃんの法縁を自分が引き継
がなければならぬと、仕事先から通夜
に参列、葬儀にもお参りされた方もおら

れます。

短くても胸に響く山首上人さまのお言
葉は、私共を本当の幸せに導いて下さい
ました。1年に数回、法音寺に参詣して
いた子育て真っ最中の頃、日々の憂いや
悩みも、山首上人さまのお顔を拝すると
胸がスーッとして、今日からまたがんば
ろうと気持ち晴れました。まだまだ
多くの方が直接・間接的に導いて頂かれ
たことでしょう。山首上人さまから頂い
た、皆さんの多くの喜びが集まって法音
寺の徳となるのですね。ですから「法音
寺にはお徳がいっぱいありますから、皆
さん持って帰って下さい」といつも言っ
て下さったのですね。

私達は、自分が器が無く徳を受けるこ
とができないと思ひ込みがちですが、器
に合わせたお徳は頂いているのですね。
最後の教えは「命あるかぎり、お徳を積
んでください」とお聞きしました。自ら
が実践されてこられたからこそのご教化
を決して忘れません。

「支院の旧本堂（研修棟）の建立の際、
建設中に見に来て頂きました。墓地の予
定地にも来て頂きました。檀信徒16軒が
建っている富加町長峰地区は、土地の祈
念をして頂きました。現在40人が住まわ
せて頂いております。山首上人さまのお
陰で当支院があります。私の得度もそう
です。未だに信じられません」。後藤上
人の言葉通り、多くの御徳・御恩を頂き
ました。

葬儀での日本福祉大学加藤学長の弔辞
に「柔和な笑みの中に、揺るぎない信念
を感じました。今までありがとうござい
ました。安らかにお休み下さい」とのお
言葉に、思わず涙が落ちました。

参道脇に立ち「少しでも山首上人さま
の真似ができるように精進します。顔は
柔らかく、心に強い信念を……」と心に
刻み、お誓いとお礼の合掌、お題目でお
見送りさせて頂きました。

山首上人さま、ありがとうございまし
た。
(通信員 加藤寧子)

どこまでも澄んだ慈悲深いお顔

郡上八幡支院

「山首上人さまが御遷化されました」と

のお知らせを受けました時は、一瞬、時



が止まったかのような気がしました。うつろで、浮わつたような気持ちのままに各方面に連絡を取り、支院へと車を走らせました。お上人から改めてその事をお聞きし、気の落ち着かぬままにご宝前にてお題目を唱えました。

12月20日午後4時30分に支院を出発。本山に到着すると既に大勢の弔問参列の方が見える中を受付へ。各自記帳を済ませ、御報恩謝徳をさせて頂きました。参列者のすべてが一様に神妙な面持ちを隠すことが出来ません。まさかこの様な形で本山に参詣をし、この様な気持ちで御報恩謝徳をさせて頂くことなど誰が想像したことでしょうか。目に見えぬ何かに促されるように焼香をし、大本堂へ。そこは普段の講日とは一変し、しめやかなお悔やみの場と化していました。

正面には山首上人さまのご尊影が掲げられています。そのどこまでも澄んだ慈悲深いお顔に、辛く哀しい御遷化の現実を改めて思い知らされることとなりました。すべての人のその思いは、通夜式の読経の響と共にどこまでも続いてゆきました。

○「まさか!」と思いました。未だに信じ

ることが出来ません」

○「御遷化の知らせを受けた時、溢れる涙を抑えることができませんでした。そんなにお目に掛かったわけではありませんが、あのお優しい眼差しは忘れられることができません」

○「手の届かない雲の上の人だと思っていました。但实际上にお傍に参らせて頂きますと、信じられないほどに気安く接して下さいました。それも叶わぬこととなりました。今は感謝の気持ちでいっぱいです」

○「法要中の副山首上人のお顔が忘れられません。とてもご心中をお察し申し上げます。上げられる立場ではありませんが……」

○「この様な場所、この様なことを申し上げることは大変失礼だと思えますが、山首上人さまはどこにお見えになっても、まるで足が無かったかのように、何の障害もなく自由自在に歩いておられました。ちようど、そよそよと吹く爽やかな風のように……。だから山首上人さまは生きておられます」

山首上人さまは多くの人に大きな安らぎと、多くの人に大きな喜びをお与えになり、今、旅立たれました。

謹んで感謝を申し上げます。

(通信員 八代哲雄)

教えに揺ぎないものを感じます

四日市支院

12月18日、夕方に掛かって来た電話は山首上人さまがお亡くなりになったというものでした。「えっ」と言っただけ、大変なことになったという思いだけで一瞬時が止まってしまったように何も考えられなくなり、連絡網で皆さんにお知らせする事項を間違えなくメモするのが一杯でした。お知らせした皆さんも同じように「えっ」と言われるのみでした。

19日は、皆さんからの問い合わせや追加の連絡事項などで一日電話の前にいる有様でした。

20日のお通夜に出席させて頂き、通夜式の始まる前に本堂の祭壇に手を合わせたいと入堂しましたら、広い祭壇いっばいに白い花で飾られた真ん中に大きな山首上人さまの、少し斜め左を向いたお写真が……。穏やかな慈愛に満ちたお顔は、とても亡くなられたとは信じられず、今にもご法話を聞かせて頂けるようでした。通夜式には法音寺のお上人は皆様、改良服に素足で、厳しいものを感じました。

通夜式が進んで行く中、副山首上人のご挨拶がありました。「最後はお庫裡様のお手を握り、息を引きとられた」とのこと。また、最後のお言葉は「生涯かけて功德を積むことに精進するように」とおっしゃられたとお聞きして、これは12月の『法音』のご講演にもお教え下さっている、家庭を極楽にすること、また、生涯の進むべき道を示して頂いたのだと感じました。

翌日の葬儀にはお上人方は白麻の清浄衣にやはり素足で、精進潔斎の威儀を感じました。

葬儀も終わり、出棺の時に本堂の前の長い階段を降りられる時が、どうしても私は見たくてじっとお待ちしました。皆様でお題目を唱える中を、副山首上人の許で今後の法音寺を担うお上人方の手でしっかりとお棺を抱えられ、一段一段と降りて来られる様を見せて頂き、法音寺の教えの揺ぎ無いものを感じました。山首上人さまもきつと心安らかに御遷化されたことと思いました。

たことと思いました。

山首上人さまのお言葉で一番感動したのは、お寺へ行き始めたばかりの頃に、「今日このお寺に来られたのはとても幸せでありがたいことなのです。来たくてもいろいろな事情で来られない人もあるのに」ということでした。本当に正しい教えにお導き頂き、ありがとうございます。

○「ご宝前のお写真の前に立たせて頂いた時、今にもお話をして下さるようで胸がいっぱいになりました。お加持の時に足が痛いと言いましたら、『そうかそうか』と言って神通を掛けて下さいました。その時のお優しいお顔を思い出しました。お見送りの時に淋しい気持ちになりましたが、皆さまとお見送りできました事に深く感謝致しました。ありがとうございます」

80代女性

○「山首上人さまのご葬儀に参列させて頂き、荘厳な内にも肅々と式が執り行なわれ、最後に弔辞が読まれました。その中で、三徳開教百年の祝賀行事が数年前に行なわれ、その百年の中の50年を山首上人さまが勤め上げられました、というお言葉があり、改めて山首上人さまのみ

子どもに教えたこと
があれば、まず自分が行
なわなければなりません。
部屋をきれいにしなさい
と言っても、親の部屋が
きれいでなければ、そう
じするわけがありません。
朝のあいさつも「子ども
が言わないから私も言
いません」などと言ってい
ては、永久にあいさつは
できないでしょう。

〔大白牛車(こ)〕

教えや、数々のご功績の偉大さが思い浮かび、涙を抑えることができずして。永きに亘り私達をお導き下さいました。ありがとうございます。70代男性
○「20年ほど前、夫の看病に日々過ごしていた頃、お盆のご法話と、その後で直接掛けて頂いたお言葉が私の心に響き、ずっと励まされて参りました。この度のご葬儀に参列させて頂き、ご出棺の折、私共の前をお上人方に抱かれお車へと進まれる山首上人さまに、心から感謝の気持ちを込めたお題目でお見送りさせて頂きました」
70代女性
○「ご葬儀は大勢の信者さんの見守る中、しめやかに営まれました。御霊前に立ち、在りし日の山首上人さまをお偲びし、法音寺の教えである三徳、慈悲・至誠・堪

お会いできたことが誇りです

上野支院

12月18日、山首上人さまが御遷化されました。当支院の信者共々、非常に残念なことで、一本の大きな柱を失った思いです。当支院からも、12月20日の通夜、12月21日の本葬に、役員の方々を始め、マイクロバスで法音寺に向かい、法要に

忍を今後一層精進していく事をお誓い申し上げます」
60代男性
○「温かく優しい眼差しが胸にひしひしと込み上げてきます。70歳を過ぎたこの頃まで、ずっと日々のご守護を頂き、ありがたく感謝の気持ちに堪えません。山首上人さまのみ教えを忘れないよう実行し、感謝を忘れません」
70代女性
○「今、自分が幸せでいられるのは、山首上人さまの大きなお徳をいつも頂いていたからなのだということを、告別式に参加させて頂きながら本当にありがたく感じました。山首上人さまに感謝しながら、自分に出来る事で徳を積む行ないをしてゆきます」
40代女性
(通信員 服部薫)

参列させて頂き、見送らせて頂きました。中央に山首上人さまの御尊影が祀られており、見返す度に慈悲深い穏やかな、少し笑みを浮かべられたお姿が印象的でした。ご生前 祝祷会・御開山会の団参の折、山首上人さまのご挨拶の中に必ず



「この法音寺には、先師の御遺徳が詰まっております。穴の開いた袋ではなく、大きな袋に一杯、この御遺徳を詰めて、お持ち帰り下さい」と言っておりました。ありがたい事です。

焼香の時にありますと、それはそれは大変なことでした。しかし、さすが法音寺の信者さんです。法音寺の教えの実行「思いやり」の姿が見受けられました。法要の途中で、副山首上人よりご挨拶があり、その中で、山首上人さまからの最後のご教化を披露して頂きました。

「生きている間しか、徳を積むことは出来ません。生きている間、出来る限り徳を積んで、罪障の消滅に努めましょう」とお教えになっておられました。山首上人さまのご法話は、我々に合わせて、いつも分かり易くお話し下さいました。法華経の実行はむづかしいと思っている我々に、「周りの人々に生かされている事に、まずありがたいと思ひ、身・口・意を持って、今日一日、三毒は止めて、三徳のどれか一つでも実行されることをお願い致します。周りの人が喜ぶ姿を見て、自分の喜びとしましょう。その瞬間が仏界であり、即身成仏であります」と、お

聴かせ頂きました。

我々は、山首上人さまに支院を通じていろいろな相談をさせて頂きました。その度に、お徳と的確なお言葉頂きまして、必ずその中に、心の実行が入っております。本当にありがたいと思ひました。

「一人から始まる。今日一日から始まる」という山首上人さまのみ教えは、肉体はなくなっても魂が続く限り、永遠に続くと思ひます。立派なお師匠さまにお会いできた事を誇りに思ひます。

○「娘の事で、大きな罪障が出てきた時に、橋本法尼から山首上人さまにお願いして頂きました。夜遅くにもかかわらず『すぐにお徳を送りますよ』と言って頂き、間もなく解決させて頂いた時には、家族中で喜び、感謝させて頂きました。

山首上人さまの優しいお心いつも柔和なお顔は忘れる事は出来ません。私もそのような人になれる様に精進させて頂きたいと思ひます」

○「毎月の『法音』で、山首上人さまのお優しいお顔にお会いでき、私はとても心が落ち着きました。ご講演では、いつも易しく説いて下さり『いつも自分の出

来ることで徳を積んでいけばいいんですよ。身近な人を安心させること、いつも心で口で、ありがたいを言うように、諸法実相と言って、世界中で私という人間はたった一人で、それぞれが使命をもつてこの世に生れて来ているのですよ。だから人と比べなくてもいいんですよ」とお説き頂き、私はとても嬉しく思いました。他にも、いっぱいいっぱいご教示頂きました。改めて、三徳実行をお誓いして御恩に報いたいと思います。山首上人さまありがとうございます」

○「支院に御親修された山首上人さまに、特別加持を受けました。母に『どこか悪いところはありますか?』とお尋ね下さいました。その時、私の母が、軽い認知症だったので『ちょっと頭が……』とお答えました。山首上人さまは『ちょっと位は大丈夫』とおっしゃって下さったのですが、私は『大丈夫』とのお言葉を受け入れられませんでした。その後、母の認知症がより悪くなりました。軽く受けさせて頂いていることを喜ばなくてはいけないのに、不足・不満を感じていたことを懺悔しました。次回特別加持を受けた時、『どこか悪いところはありますか?』とお尋ね下さいましたので、

んか?』とお尋ね下さいましたので、『92歳になりますが、どこも悪いところはありません』とお答えしました。山首上人さまは『そうか、そうか。92歳になっても、どこも悪くないかね』と喜んで下さいました。その時の笑顔は忘れられません。その後、母の認知症はよくなり、元気に過ごさせて頂きました。山首上人さまのお見送りの時『心新たに精進していきます』とお誓いしました」

○「顕修院日達上人の御遷化の報に接し、心臓が止まる思いでなかなか受け入れることが出来ませんでした。これまで数え切れないほどの数多くのお徳を送って頂き、ありがとうございます。いつもの優しい笑顔が眼に焼きついています。出棺のとき、『ありがとうございます』とお礼を言い、涙が止まりませんでした。『命ある限り、徳を積みましよう』のお言葉を忘れずに、あたりまえを喜び、自分の出来ることで人に喜んでもらえるよう三徳の実行に努力して参ります」

○「祭壇に飾られたご尊影は、いつもお目にかかっていたときと同じように慈悲深く、大きなお心でお迎え頂いたように優しく微笑んでおみえのようでした。主

管者を通して、何度となく大きなお徳を授けて頂きましたが、定年退職して間もなく、尿道結石、網膜剝離、帯状疱疹と立て続けに、今までかかったことのない病気に罹りました。特に網膜剝離は、小さい頃から目は悪かったのですが、初めて診てもらった地元の眼科で『手術を急がないと』と言われました。山首上人さまにお尋ねして頂いて、翌日休診日だったので、大きな病院で手術をして頂きました。今も、月に一度程度地元の眼科へ通院していますが、『手遅れになると失明していたかも知れない』と言われました。出棺の時にも『ありがとうございます』と、お別れを言いましたが、涙が止まりませんでした。御遷化されたことを現実のこととして受け入れるには時間がかかります。『命ある限り、徳積み励んで下さい』のお言葉を忘れずに精進していきます。ありがとうございます」

○「山首上人さま、ありがとうございます。毎年、新年祝袴会、御開山会には、いつもお出ましになります。今年はどうもお話をさせて頂いたのか、いつも楽しみにしております。また、支院へも足

「をお運び下さり、その時は『ありがたい』の心でいっぱいでした。」

『12月18日ご遷化』の知らせを受け、大変驚きました。葬儀の日、全国からの大勢の信者のお見送りにびっくりしました。が、それもこれも山首上人さまの御遺徳の表われと感じました。本葬も終わり、午後三時の出棺の時に、私の目の前をお棺が通過しました。『ああ、山首上人さまは三先師のいらっしやる無上道へ行かれたのだ』という実感が湧いてきました。そして『50年余りの永きに亘りご指導頂き、ありがとうございます』との思いが込み上げ、同時に感謝の涙が溢れてきて、暫く止まりませんでした。その日より、御報恩感謝の気持ちを含めて、お題目とお自我偈一卷をお唱えしております。また、たくさん教えて頂きましたことを、もう一度勉強して、今度こそは身に行っていくきたいと思います」

○「育成道場で山首上人さまより『私達は皆、世界でたった一つの貴重な存在です。皆、他とは比べられない、100点満点です。良くても100点。悪くても100点。0点でも30点でも100点満点です』と教えて頂き、とても勇気付け

られました」

○「山首上人さまの柔和で高貴なお姿を思い起こし、感謝の気持ちでいっぱいです。どんな時でも、諸天善神・山首上人さまにお徳をお願いして、助けて頂きました。受けた御恩は計り知れません。御恩返しは、法音寺のみ教え、山首上人さまのみ教えを正しく守り、人様に伝え、支院を守っていくことだと思います。自分の都合は考えず、人様の助けになるよう精進していきたいと思います」

○「私は、12月18日早朝に夢を見ました。その夢は次のようなものです。支院の方々が喪服姿で足早に何台かのバスに乗っています。信教師代議員の北田さんと、私と二人が作業服で、軽トラックには真っ白の棺と青竹や穴を掘るスコップ等が積まれてあります。橋本法尼が忙しそうに本山へ持って行く生花等、いろいろの支度をされています。」

この様な夢を見せて頂いた事は、何かの知らせではないかと思ひ、早速悪夢の消滅をさせて頂きました。その日の午後、支院から『山首上人さまが御遷化されました』との連絡を頂きました。その瞬間、早朝の夢と重なり、心の痛みを覚えなが

ら、法音寺の方へ向って一心にお自我偈をお唱えさせて頂きました。

お通夜にお参りさせて頂き、祭壇の山首上人さまのお姿を拝見しました。今日まで数える事が出来ない程のお徳とご教化を頂きましたことは、何事にも変えられないありがたい事です。この世の中には、信仰する所はたくさんありますが、先祖供養の出来る事はもとより、罪障の消滅が出来る所は法音寺しかありません。告別式に参列させて頂き、山首上人さまと最後のお別れの際に、『三徳の実行と広宣流布に精進させて頂きます』とお誓い申し上げます」

○「今までいろいろなご法話でご教化頂きましたが、その中で一番印象に残っているのが、『今あることに、喜びを見つけてみましょう。日頃、あたりまえと思つて振り返りもしないことの中に、ありがたいことを見つけて喜びに変えてゆきましょう』とお聞かせ頂いたことです。まさに今の自分は、今あることをあたりまえと思ひ、感謝や喜びが足りなかったと反省させて頂きました。支院を通じてご祈祷やお伺い、み教えのご法話など、いろいろと教化やご指導を頂きましたが、自

いい所を探して、たく

さんほめてください。それがほめ殺すということ。家庭もうまく納まっています。お嫁さんもお姑さんも、両方が喜んでほめ殺し合っています。うまくゆくに違いありません。

〔大白牛車(二)〕

分は何もその御恩返しができていると感ぜさせて頂きました。未熟な私ですが、慈悲・至誠・堪忍の三徳を守り、この御法の広宣流布に努めることが御恩返しになると思ひ、精進させて頂きたいと思ひます」

○「事ある毎に山首上人さまにお尋ねをし、良い方向へ導いて頂きました。長年に亘り、私たち信者の為にご尽力頂き、今までに限らない功德を頂戴したと思ひます。もうこれから柔和なお顔を拝見する事ができませんが、授戒を頂いた時のお言葉を胸に刻み、ご教化下さった事を少しでも実行出来るよう精進して参ります」

○「ある信者さんが、山首上人さまに『今年一年、何も無かったので良かった』と申し上げると『それはいけませんね。何も無かったということですか』とおっしゃったという話をお聞きました。誰にでもこうおっしゃるわけではなく、この信者さんだからこそのお言葉だったと思ひます。私の息子が大学を卒業し、大学院に進みたいと言った時、親の都合で就職して欲しいと言うと、就職しなければいけな

いのなら、ある病院にするといいました。どうしてかと聞くと、自分が進みたい部門の科があるからだと言いました。私としては息子の将来を考えて、こちらが望む就職先が2か所ありましたので、それでは山首上人さまに伺って頂こうと橋本法尼にお話ししました。法尼は私と息子のお話を理解して下さい、このことを山首上人さまにお話し下さいました。すると、山首上人さまは、『大学院なら6年だね。〇〇はいいことだね。次にここ。その次ここ』とおっしゃって下さいましたよ、というお話でした。〇〇は、息子が就職ならばと考えているところです。結局息子は〇〇へ就職しました。就職すると、やはり、山首上人さまがおっしゃっていた通りで、職場の環境に合わず、1年ではじき出されました。

退職後、どうしても大学院に行きたいというので、勉強をしながら1年アルバイトをしました。私は折れました。息子は現在、大学院に在学しています。それから、5年経ちました。研究もそれなりにうまくやっています。前を振り返って思うことは、山首上人さまにお伺いをした時『大学院なら6年だね』とい

うお言葉に留意すべきだったということ
です。2年遠回りさせました。息子にこ
ういうことを話すと『山首上人さまとい
うお方は、何故そのようなことが分かる
の?』と言いました。普通の人の心では
分らないことです。普通の人で終わら
ないよう精進します」

○「ご生前にお目にかかる事が出来まし
たのは、毎年の新年祝禱会、御開山会、
ほうろく加持、大黒・鬼子母神祭等の団
参時、後は支院での大きな法要位でした
が、いつも山首上人さまのご守護にて、
日々安穩に暮らさせて頂いておりました
こと、本当にありがたく思っています。

この度の御遷化、本当に残念で未だ信
じられません。本山に行かせて頂いたら、
今も本堂であの柔和な、本当にお優しい
笑顔でお出まし頂けるような、そんな気
がしてなりません。平成23年5月5日に
山首上人さまより信教師の寺令を頂き、
以来、身の引き締まる思いで精進させて
頂いております。失敗の日々ではありま
すが、その都度懺悔をして誓い直す『自
分の出来る事で、無理せず精進して下さ
い』との山首上人さまのお言葉を改めて
噛み締めています。これからもずっと私

達未熟な者をお見守り下さい。御報恩謝
徳になるよう、今後も日々精進をお誓い
致します」

お徳の高さを改めて感じました 京都支院

平成24年12月18日早朝、私たちの心の
支えである山首上人さまが御遷化なさ
いました。

翌日急ぎよ、信教師が招集され、安藤
上人から山首上人さまのお知らせがあり
ました。あまりにも突然な出来事で、驚
きと悲しみでいっぱいでした。

20日午後7時より通夜があり、翌21日
午後1時から葬儀・告別式が行なわれる
という事でしたが、20日は支院の講日の
ため法要が終わり次第、安藤上人、安藤
順法上人とお庫裡さまは京都を発たれ、
名古屋へ向かわれました。私たち檀信徒
は、山首上人さま在位50周年のDVDを
観せて頂き、それぞれに山首上人さまを
偲んでおりました。

12月21日の葬儀・告別式は、安藤上人
のお計らいで大型バスをチャーターして
頂き、若お庫裡さま引率で35名の信者が
参列させて頂けることになりました。

檀信徒一丸となって、法音寺三徳のみ
教えを伝え、実行して参ります。

(通信員 前沢史朗)

21日は曇り空。バスの中は普段の団参
とは違い静かな空気が流れ、時折、雲の
隙間から射す太陽の光が窓越しに入って
心地よい温かな気持ちになり、まるで山
首上人さまに導かれるかのように正午、
本山に到着しました。

法音寺の周りには供花がぎっしり並べ
られ、全国から山首上人さまを慕って来
られた檀信徒の皆さんの人数の多さに驚
くと共に、山首上人さまのお徳の高さを
改めて感じさせて頂きました。境内には
数台のモニターとストロボ、そしてたく
さんの椅子が並べられており、お陰様で
戸惑うこともありませんでした。

午後1時より、日蓮宗宗務総長・渡邊
照敏殿下大導師の許、厳肅に執り行なわ
れ、名古屋宗務所長・山川潮暎上人始め、
日本福祉大学学長・加藤幸雄様、葬儀委
員長・寺田正義様の3名の心温まる弔辞
がありました。



最後に喪主である副山首上人が、「11月3日の御法推進全国大会で私たち檀信徒に下さったお言葉、生きている間にか徳は積みません。生きている間にしっかりと徳を積んで下さい」が最後のお言葉になってしまいました。そのお言葉に従って私たちは三徳布教に邁進致します」とご挨拶があり、私たちもその想いを胸に刻みました。

読経の流れる中、お焼香をさせて頂き、最後のお見送りもさせて頂けたことに感謝致しました。

私たち檀信徒は、山首上人さまのご意思を継ぎ、お徳積みにも励み、三徳の実行、広宣流布と、副山首上人を柱としてお上人さま方と共に、力を合わせ精進して参る所存でございます。どうぞご安心下さい。

最後に、悲しいことではありますが、山首上人さまの葬儀・告別式に参列させて頂けたことは本当にありがたいことだと感謝致します。また、葬儀スタッフの皆様さま、ありがとうございました。

(通信員 野村いく子 代 牧野伸江)

万感の思いを込めて、ありがとうございました

大阪支院

「山首上人さま、ご入院されているのですか?」「今は帰っておられるそうですよ」「良かったですね」とある方と会話を交わした3日後の12月18日、御遷化の一報を受け、言葉を失いました。いろいろな思いが頭をよぎります。しかし、心うち震えながらも古山上人始め、皆で手分けして支院檀信徒の皆さんに連絡し、交通手段の手はずも整えられました。

「エーッ」と二様に驚きの声。中には「山首上人さまは亡くならない方だと思

っていたのに……」と、若い方の声もありました。

支院からは20日の通夜式に30名の方が参列。21日の本葬には70名余りで参列させて頂きました。「私は行けないから、納経をさせて頂きます」「私はその日、ずっとお題目をあげさせて頂きます」と、それぞれの立場で御報恩感謝の気持ちを表わされました。

大型バス・マイクロバスで正午過ぎに本山に到着しました。まず、ブラツと並

んだ供花の数に目を見張りながら山門をくぐると、本堂の階段にも人が溢れ、境内のテントの中もいっぱいです。

ご葬儀は、開山堂に設置されたモニターの前でお参りさせて頂きました。祭壇に飾られたお写真の山首上人さまは、優しさと厳しさの目で私達を見守って下さる仏さまのお顔でした。

日蓮宗宗務総長・渡邊照敏猥下大導師の許、この上なく荘厳に、肅々と進められてゆきました。副山首上人、鈴木修徳上人がお焼香されるお姿が写し出されると、あちらこちらからすすり泣きが洩れ、ハンカチで顔を覆っている人も。やがてお焼香の案内を受け本堂に入らせて頂くと、幸いにも副山首上人のご挨拶を間近にお聞きする事ができました。その中で「生きているうちにしか罪障を取ることが出来ないから、とにかく命ある限り一生懸命徳を積んでいきなさい」との山首上人さまが最後に残されたお言葉をお聞きし、心にしっかりと刻み込みながら、香を手向けさせて頂きました。

いよいよご出棺の時がやってきました。清浄衣に身を包んだ山内のお上人方の手によって、本堂の階段を下り、ゆっくり

と境内を進まれます。お題目を唱え、後に続かれる副山首上人、修徳上人の力強い澄みきったお声が耳に残っています。両側で見つめる檀信徒の皆さんも万感の思いを込めて手を合わせ、ありがとございまして」と御礼の言葉でお見送りされておられました。

法音寺の素晴らしさ、三先師と共に山

静かに教えて下さいました

和泉支院

首上人さまの偉大さを改めて思わせて頂きました。
明日からの日々、山首上人さまのお言葉を思い起こしながら、自分の居場所、周りの人に喜んで頂けるような徳をコツコツと積み重ねていきたいと思えます。
(通信員 坂井信子)

お通夜の席で心を込めて唱題させて頂き、本堂正面中央に掲げられた山首上人さまの御尊影を見つめていた時、昔の記憶が蘇ってきました。

ちょうど30年前のこと、支院行事に山首上人さまが御親修下さり、その時33歳だった私は第4子を授かり、大きなお腹を抱えていました。お腹の子は既に胎教をして頂いていましたが、上田上人より「よい機会だからお神通を掛けて頂きたい」と言ってお願ひして下さいました。山首上人さまは「青い炎が見える」とおっしゃいました。そのお言葉の意味はすぐに理解できたのですが、当時の私は思わず「忙しいからです」と言ってしまう

ました。それを聞かれ静かに「忙しいという字の意味を考えてごらん『心を忘れる』と書くでしょう」と教えて下さったのです。私は「申し訳ありません。ありがとうございます」と申し上げるのが精一杯で、その場を早々に退席したのですが、台所に帰ってから深く反省したことを今でもはつきりと覚えています。

「青い炎」とは愚痴不足の心。そんな気持ちを抱いての徳積みなど、まして胎教中のことなのにもつての外の心遣いでした。

30年経ち、その子がこの夏に副山首上人に胎教して頂き、御遷化の5日前に第1子を授かりました。本当にありがたい

突然病気になって……

とよく言われます。しか

し、突然起こるようなこ

とは何もありません。毎

日毎日の行ないが突っ

そうなるのです。

〔大白牛車(こ)〕

ことで、読経中、改めて山首上人さまへの感謝の気持ちでいっぱいになりました。

副山首上人より「皆さん、生きている間に少しでも徳積みに励んで下さい」と山首上人さまのお言葉を伝えて頂きました。小さくとも日々の徳積みを重ねていくことが、やがて次世代に法灯を繋ぐことになっていくのだと心に留め、より一層の精進をお誓いしました。

ご病気で入院されているとお聞きしていましたが、お元氣になられてまた私達

ご遺言を心に刻み生きていきます

神戸支院

12月18日午後、田中上人から電話があり、山首上人さまが御遷化されたことを伺いました。まさかという思いと、突然のことなのでとても信じられませんでした。

通夜、葬儀・告別式の日程がお寺から直接、或いは地区班長さんから護持会員に知らされました。電話を受けた方は何をしたらいいか分からず、まず支院に電話をして、御報恩謝徳をさせて頂きました。通夜、葬儀・告別式には、自家用車または公共交通機関を利用して参列させ

にご法話をして頂けるものと思っていましたので、突然の訃報に際し、ただ驚くばかりでした。

ご葬儀に参列し、いろいろお話を聞かせて頂く中で、その功績の素晴らしさを今更ながら感嘆しました。

「命ある限り徳積みに励むよう」のお言葉をしっかりと胸に刻み、生きているうちに罪障消滅、徳積みに努力しなければと思いました。
(通信員 庄司清子)

て頂くことになりました。

通夜には、葬儀・告別式に参列することが出来ない方が仕事を終えてから行かれました。本山に参るのは初めての方がカーナビが付いてない車で地図で調べて車を走らせ、夜間にもかかわらず迷わず無事に本山に辿り着いたということです。渋滞に遭い、時間には間に合わなかったのですが、お焼香をさせて頂けてありがたかったと聞きました。

葬儀・告別式に参列する方は誘い合せて、新幹線を利用して本山に向かわれま

した。車中では、子どもが命に関わる一大事の時、山首上人さまのご教化を親が受け、お徳を送って頂き、命が助かったこと等の話を聞きました。いろいろな事を振り返りながら、大きなお徳を頂いたことを改めて痛感し、感謝致しました。地下鉄の川名駅で下車すると、不思議な事に支院の方々に出会い、不安な中にも少し安堵しました。

午後0時15分頃本山に着きましたが、本堂内はすでに多くの人で満員でした。境内に設けられたテント内の椅子席に座らせて頂きました。またここでも支院の方と出会い、お互いに出会えてよかったと安心致しました。前方の本堂内を写す大きなモニターで葬儀の始めから終わりまで写して頂き、本堂に入れない人の為のご配慮に感謝致しました。また、堂内の方と入れ替わりで本堂に上がり、焼香をさせて頂き、身に余ることと震えました。宗門関係、学校関係、福祉関係の方々、厳かで立派なこのような葬儀は終生お目にかかることはないであろうと思われました。

法音寺檀信徒を代表して内局委員・寺田正義氏の弔辞があり、今更ながら偉大

な仕事をなさったのだと思ひ、法音寺、始祖から三代で50年、山首上人さま御一代で50年とお聞きすると涙が溢れました。最後に喪主の副山首上人から山首上人さまのご遺言を賜りました。

「命ある限り、徳を重ねていきなさい」お釈迦さまが最後の説法でのご遺言を残されたように、仏さまのご遺言と思ひ、反省と懺悔の思いが込み上げました。

ご出棺の時、棺を担がれているお上人方の悲痛なお顔は、檀信徒一同の心も表わされているように感じました。

温かい親のように思っていました

淡路支院

12月18日、山首上人さまが御遷化されたという連絡が役員の方からあり、驚きました。83歳で御遷化されました。本堂に驚きました。

通夜・告別式の日程をお聞きして、名古屋の本山へ参列させて頂こうと支院の方々と相談致しました。7人の方々と本山に向かいました。本山に到着すると、各地の檀信徒の方々や法音寺の関係する大勢の方々が弔問に駆け付けておられ、深い悲しみの中、葬儀式が始まりました。

新幹線で帰る車中「困った時にお徳を送って頂き、御恩を受けるばかりで、御報恩ができていなかったね」と話し合いました。

神戸に着くと、傘が必要なほどの雨が降っていました。葬儀に雨が降ることなく、風もなく、山首上人さまの大きなお徳に感謝致しました。

山首上人さまのご遺言を心に刻み、生きていこうとお誓い致しました。

(通信員 井上和子)

本堂は人がいっぱい、出来る限り多くの方が入れるように「詰めてお座り下さい」と案内がありました。大勢の説教の音が響く中、お焼香が始まると、たくさんの方々が大きな流れになって動きました。

山首上人さまは、私たちの法音寺の中心であったばかりでなく、温かい親のようにお世話して下さいました。本当に感謝しております。50年間に亘り私たちに導いて下さりありがとうございます。



ありがたい御法に出会えたことを感謝し、これからも命の続く限り日々努力し、

精進して参ります。(通信員 川西広子)

お姿を追い求めてゆきます

岡山支院

梅田上人より「今朝、山首上人さまが御遷化されました」との知らせがありました。支院役員の葬儀参列が決まり、21日早朝出発し、予定通り午前11時に本山に到着しました。

早速、係の方に本堂へ案内して頂きました。ご宝前はいっぱい菊で飾られた祭壇が設けられていました。

山首上人さまのお棺の前に設けられた焼香台で御尊影を拝し、暫時、山首上人さまの在りし日を思い出しつつ「ありがとうございますございました」とお礼を申し上げ、広宣流布のために尽くすことをお誓い致しました。

○「いつかお別れの時が来ると思っていましたね。もともととお話がお聞きしたかったです。50年もの長き年月、私たちをお導き頂き、ありがとうございます。いつもおっしゃっておられました「自分の出来ることで周りの人を喜ばせること

が第一。まず家庭を極楽にし、笑いが絶えない家庭を作る。そうすれば自然と周りも染まってゆく」という山首上人さまのお言葉を『法音』でいつも読むことが出来たので、いつも安心できました。これからは三先師・山首上人さまのみ教えを守り、より一層努力し、三徳の実行をして参ります」

○「山首上人さまに感謝の一日でした。ご葬儀が始まり、山首上人さまのご功績を拝聴し、昭和37年、法音寺山首となられて学校法人や社会福祉法人を発展させられた山首上人さまの姿を改めて知り、感動致しました。ご葬儀も終わり、開山堂の下で山首上人さまに感謝し、最後のお見送りをさせて頂きました」

○「若輩の私が山首上人さまのご葬儀に参列させて頂けるとは……。慈愛に満ちたお顔、優しいお声、もう二度とお姿を拝することができないと思うと、涙・涙・涙です。たくさんのご教化、ありが

とうございました。天を仰ぎ、山首上人さまのお姿を追いかけてゆきます」

○「生前中は多くの人に慕われ、信者さんにお徳を差し上げられたことと思われます。教えを頂いたことを思い出し、益々三徳の実行に邁進することが私たちの報恩の道と考えております」

○「私は祖母の代より法音寺に縁がありました。その祖母は亡くなりましたが、

支院を大切に、努力致します

福山支院

12月18日午後、山首上人さまが御遷化されたとの報が支院檀信徒に伝えられました。一同大きな衝撃でしたが、私達は今まで、山首上人さまよりご法話や書籍を通して教えて頂いた事柄を心に深く留め、実行して行く事を誓い、感謝でいっぱいになりました。

特に当支院は「合併問題」で少々問題があり、辛い経験をしたことがあります。山首上人さまは私達檀信徒の事を思って支院を新たに建立して下さいました。その支院を大切に、一人でも多くの方に参詣して頂けるよう、一丸となって努力して参ることをお誓いいたします。

私の母、私、子、孫と、4代に亘りお寺にお参りさせて頂いております。支院の役員になり、山首上人さまにご挨拶をさせて頂いた折りの、温和でニコニコされていたあの優しい笑顔が偲ばれ、残念でなりません。あまりにも早い御遷化でした。増圓妙道をお祈り申し上げます」

(通信員 下村芳恵 代 木村彰保)

12月21日葬儀の日、朝4時30分支院に集合し、バス組28名は出発しました。車内ではお互いに山首上人さまの思い出を語り合いながら11時前に本山に到着。開山堂で少し休憩をしている内に新幹線組6名が到着しました。全員で本堂に入ら

「親切」の実行で教えを体現します

三原支院

お通夜、ご葬儀に参列された方々の感想を掲載させて頂きます。

〔感想1〕

いつもは威容を誇る本山の大屋根も、今日は心なしか少し肩をすぼめて佇んで

せて頂くと、正面に菊の花で埋めつくされた中に山首上人さまのお写真が掲げられ、日蓮宗宗務総長・渡邊照敏下大導師による荘厳なご法要があり、一同心より手を合わせて頂きました。ご焼香に入り、本堂から駐車場まで多くの方が、山首上人さまとのお別れを偲んでおられました。

信者さんの中に12月19日朝、夢に、透き通るような白い肌をされた、口には言い表わせられないほど美しいお姿の山首上人さまが現われて「山首上人さま」と呼びかけたら目が覚めた、と話されていた方がおられました。

私達は、山首上人さまからの最後の言葉「生きている限り徳を積み重ねて下さい」を心に深く刻み込んで生きていきます。

(通信員 小原正)

いるように思われました。

本堂に入ると、豪華ですが華美でなく、清楚な祭壇には山首上人さまの御尊影が、いつものこやかなお姿でおられました。葬儀は日蓮宗宗務総長大導師の許、しめ

「あの人は法華経の話を
するけど、行ないは反対
だ」とか、「いつもお題
目を唱えているのに、全
くひどい人だ」と言われ
たのでは何にもなりません。
法華経を唱え、お題
目を唱える以上、それに
ふさわしい生活を送りた
いものであります。

〔大白牛車(二)〕

やかに執り行なわれ、向かって左側に副
山首上人を始め法音寺のお上人方が白い
衣装で整列して座られ、右側には親族の
方々の席が用意されていました。広い本
堂も信者さんで埋め尽くされ、焼香の時
はどうなるかと心配するほどでしたが、
前列から順次整然と終えられ、本堂前の
石畳の通路に出て出棺を見送る準備に入
りました。思えば『法音10月号』頃から、
これだけは伝えておかなければという思
いがありました。12月号は特にそれを感じました。山首上人さ
まのご臨終のお言葉が、お庫裡様に「あ
りがとう」というお言葉だったと聴いた
時、山首上人さまは身を持って、生き様
死に様を教えて下さったと思いました。
本堂に凄いい方ですね。南無妙法蓮華経。

〔感想2〕

法音寺の拙劣な信徒である私でありま
すが、本山参拝等で山首上人さまの宗教
家、求道者、あるいは文学者を合わせら
れたかのような、言葉では表現できない
ようなお姿を拝する度に改心の気持ち、
安心感、明日への勇気を頂いております。
今回、葬送の儀に参列させて頂き、慈
ご尊影を拝させて頂いておりますと、慈

悲、慈愛と云うのでしょいか、万物を慈
しむといわれる仏教の本質を再度教えて
頂いているような気持ちがありました。
それと同時に、凡夫である私には人に慈
しみを感じさせるどころか逆に「お節介
な変なおじさん」と思われるでしょうが
「親切」を実践することで、山首上人さ
まのみ教えを体現する決意を新たにさせ
て頂きました。

〔感想3〕

本堂に入ると、開始までまだ時間があ
るのに読経が絶え間なく転読されている
のが聞こえていました。本堂での参列は
無理と諦め、せめて外でテレビの画面越
しに参拝でもと思っていた折、本堂内に
列席させて頂けることになり、信じられ
ませんでした。大導師による法要は心の
こもったもので、清浄衣に素足、きれい
に剃髪された副山首上人を始め、各支院
のお上人方のお姿から、師と弟子の深い
絆と悲しみが胸に迫り、大変素晴らしい
法要に感動致しました。

〔感想4〕

葬儀は日蓮宗宗務総長、名古屋地区5
か寺の僧侶によって莊嚴に執り行なわれ
ました。こんなに大勢の参列者の葬儀に

は初めて参加させて頂きました。山首上人さまが如何に皆さまに慕われておられたかと思わせて頂きました。

御開山会・新年祝禱会の時には、お近くでお話を伺わせて頂く機会がありました。貴重な掛け軸の説明等をして頂いたことが、ついこの間の事のようにです。

山首上人さま在位50年の祝宴ではお元氣そうで、大変喜んでおられました。この様に早くご遷化されるとは思いませんでした。副山首上人が「眠るように安らかに逝かれました」とおっしゃっておられました。山首上人さま在位50年の時に「命ある限り、三徳を伝えて下さい」とお話し下さいました。私も精進していきたいと思います。

〔感想5〕

昨年の週刊仏教タイムスに載りました『菩薩行・三徳宣布・社会福祉事業・教育事業推進、鈴木宗音山首在位50年を祝う』の記事を読み、にこやかに皆さんを包み込まれるようなお姿の写真に、こんなに偉大な方なのに御遷化されたなど信じられないまま、葬儀に参列させて頂きました。外のテントの中でじわじわと足元より冷えてくる寒さが気になってい

ましたが、テレビに向かって読経している内に、それも忘れて、ただただ今までの感謝の気持ち「ありがとうございます」を合います。ありがとうございます」と手を合わせていました。副山首上人を先頭に、剃髪され、白い衣に素足に草履を履かれた数人の僧侶の方が、お棺を担がれ参道を行かれます。周囲のたくさんの方々と一緒に私もお題目で見送らせて頂きました。顕修院日達上人の御報恩謝徳のお写経をさせて頂き、三徳のみ教えを実行して行きます。

〔感想6〕

本堂で山首上人さまのご遺影を拝している、在りし日が走馬灯のように思い出されました。荒行成満の時、今の安芸津支院に行かれる途中、僅かな時間でも私達を喜ばせてあげようとされたのでしよう、在家の森野宅に夜お出で下さることになりました。信者は喜びに湧き、当時高校生の森野上人を先頭に提灯の行列、団扇太鼓、御成満大旗の後に信者が続き、私は長男の手を引き、長女を負ぶってお迎えました。寒い中、麻の衣にお髭の山首上人さまは、まるでお釈迦さまが成道されて下山されるお姿と重なって、あ

りがたさに感動して涙がポロポロ出て、心の中で「一人でも多くの方を御法にお誘います」と叫ぶように言った事を思い出しました。まだ実行の途中ですが、『法音12月号』の「山首上人さまご講演・極楽と仏」は私への遺言と受け止めさせて頂きました。12頁の「目の前の家族がお互いに助け合い、皆がニコニコできるように心がけているところが極楽となり、そこに住む皆が仏様になれるのです」という、この心掛けを忘れないように、一人でも多くの方と一緒に精進して行く事をお誓いしました。

〔感想7〕

山首上人さまの御遷化の連絡を受け、一瞬茫然とし、今何をなすべきか考え付きませんでした。少し冷静になるにつれ、落慶でお目にかかった時の凜とした優しいお顔、安芸津支院や当支院でのご法話の時の優しい眼差しが思い起こされ、山首上人さまより多くのお徳を授かった事を思い起こすと、感謝の涙が湧いてくるのを止める事が出来ませんでした。

落着きを取り戻し、主人に話したところ「告別式に行かせて頂きなさい」と言ってもらえ、その心配りに心から感謝し



本山に行かせて頂きました。本山の周りには何百もの生花が飾られ、改めて山首上人さまの偉大さに感激しました。本堂に入らせて頂き、荘厳かつ気品溢れる祭壇に感激しました。また山首上人さまのお写真を拝し、今にも笑顔で話し掛けて下さるような感じを受け「ありがたい、ありがたい」と報恩の念が溢れました。若いお上人から「本堂に座わられていいですよ」「足の悪い方は椅子席にどうぞ」と声を掛けて頂き、お心遣いに胸を熱くしました。私にとっては一生に一度の厳爾、壮大な告別式に参列させて頂き、山首上人さまのみ教えを周りの縁ある方々に伝えるべく一層の精進を心に誓いました。日蓮宗声明師による笙・箏のしらべにのって、幻想的かつ厳かに儀式は進みました。臉を離れないのは、山首上人さまの慈悲心に満ちた穏やかな笑顔です。長年にわたり私達檀信徒をお見守り下さ

山より高く、海より深いお導き

安芸津支院

り「ありがとうございました」と、感謝の涙が泉のごとく湧き出し、ハンカチを目元に持ってゆくことも度々でした。本堂に座らせて頂いていること自体が夢のようで、法音寺総代、日蓮宗名古屋事務所長、日本福祉大学学長の弔辞に、50年の長きに亘り、法灯をお守り下さり、日本福祉大学を発展させて下さった山首上人さまへの感謝の気持ちがひしひしと伝わりました。「大変お待たせしました」との司会者の挨拶で木鉦の流れる中、焼香をさせて頂きました。出棺をすぐ目の前で送らせて頂き、お庫裡さまが深々と頭を下げて下さる姿が今も臉に焼きついて離れません。山首上人さま、長い間本当にありがとうございました。教わった事を心の支えとして、家庭を極楽に、縁ある方々を幸せに、と願って精進したいと思えます。

(通信員 平田真弓)

山首上人さまの訃報に接し、余りの驚きにご遷化が信じられませんでした。どうしても感謝の気持ちを申し上げたいと

思い、ご葬儀に参列させて頂きました。法音寺に続く歩道に生花がびっしりと並ぶ有様を見て、山首上人さまの崇高さ

を物語っているように見受けられました。ご葬儀は、莊嚴という言葉しか思い当たらないくらい重厚で、格式高く行なわれました。前列におられる黒い法衣をお召しのお上人方の背中に金粉が舞っているのを目の当たりにし、山首上人さまが「私はいつでもこうして皆さんの傍にいますよ」と言ってお見送りするように思えました。

私達がこの世に生かさせて頂いているのは、三先師・山首上人さまのお陰です。ありがとうございます」という思いで合掌し、お題目でお見送りさせて頂きました。これからも三徳の実行に励んでまいります。

《至高の場に臨席させて頂いた感懐》
「山首上人さまは最後に『命ある限り徳積みに励んで下さい』とご教示下さいました」と、副山首上人がご挨拶でお話し下さいました。今日一日が大切な日であることを新たに肝に銘じました。

司会の方が「大変な読書家であられ、映画もお好きだった。コーヒーが大好きだった」と山首上人さまの人物像をご披露下さいました。その大好きなコーヒーを私たちに喜捨下さいました。好きな物を

大切な物を施し、人様を喜ばす心遣いに感銘を受けました。

こんな思い出があります。御法推進全国大会のビンゴゲームでアシスト自転車が当たりました。その事を覚えて下さっていたのです。ある時「自転車は役に立っていますか」とお声を掛けて下さったのです。すごい。びっくりするやら、嬉しいやら。「家内が、行動範囲が広くなったと喜んで使わせてもらっています」

いつも暖かく迎えて下さいました

坂支院

と主人が答えてくれましたが、私の方から先にお礼を申し上げなければならなかった」と気付き、小さな声でしかお答えできませんでした。
雅楽の演奏で声明師が吹く笙の音色は心の深奥に響き、悲しさ寂しさはひときわ増幅されます。山より高く、海より深いお導きに衷心より感謝して、別離のお題目を一心にお唱えしました。

(通信員 岸本輝子)

あと僅かで今年も暮れようとしていた矢先、突然、山首上人さま御遷化の知らせが入りました。ここ最近ご体調がすぐれないとお聞きしていましたが、ご回復されることと願っておりましたので、この度のご訃報に愕然と致しました。

通夜そして葬儀・告別式に参列させて頂きました。本堂の中に入りますと、ご宝前全体にたくさんのお花が飾られて、中心には優しいお顔の山首上人さまのご尊影が安置されてありました。お顔を見ていますと、お亡くなりになられたことが嘘のように思われて、受け入れることが

なかなかできませんでした。

堂内は凜として静粛に、式は厳かに執り行なわれて、無上道へと旅立たれて行かれたのだと確信いたしました。

御開山会には参詣者の私達をいつも暖かく迎えて下さる山首上人さまのお姿が、もう見られないということがとても残念です。

昭和37年、法灯を継承せられて在位50年という歴史の中に、社会福祉・教育事業など幅広く偉大な功績を残されて、今の私達の幸せがあります。

三徳開教100年慶讃大法要も大成功

この世の中、感謝する

種はいくらでもあります。

春になれば花が咲きます。

秋には紅葉が彩ります。

「ああ美しいな」という

思いは、それがまるで私

を喜ばせるために咲いて

くれている、とさえ思え

てきます。

こういう人の毎日の生

活は、さぞ楽しいものだ

とっています。自然に人々

が集まって来るに違いあ

りません。「大白牛車(ご)

裡に終わり、山首上人さまのお喜びはひとしおに、満面の笑顔は生涯忘れる事はないでしょう。

山首上人さまが最後に残されたお言葉は「命ある限りお徳を積みましょう」。ご法話の中に「良い結果を得るには、周りの人に喜んで頂くという心がけと行ないが必要です。行なつてゆくことで相手の心を開き、教えを伝えることができます」とありました。この教えを守り、

永遠不滅の法華経と三徳の道に精進して、次の世代の人達に繋いでいかなければと思ひます。

山首上人さま、長い間ありがとうございました。どうぞしばらく、安らかにお休み下さい。そしていつの日か、再び私共を導くためお出ましになられることを心待ち致します。

(通信員 笹原真由美)

代 荒部谷妙子)

法音寺の信者でよかつた

福岡支院

山首上人さまご遷化の知らせは、支院檀信徒に一瞬のうちに大きな驚きと深い悲しみをもたらしました。

山首上人さまのご容態が思わしくないことは、大庭持念上人からお聞きしていたものの、にわかには信じられないというのが正直な気持ちでした。

支院を代表してご葬儀に参列された皆さんの声をお聞きし、檀信徒の追悼の心を伝え、御報恩謝徳の誠を捧げます。

○岩田治郎(運営委員長)

山首上人さまの最後のご教化「命ある限り、徳を積み重ねて下さい」。この言

葉を心に刻み、縁ある人に法縁を結ぶ働きをお誓いさせて頂きました。

○岩田精子(檀徒)

莊厳なご葬儀に参列させて頂き、間近でお題目を唱えさせて頂けたことを、ありがたく思います。最後のご教化「命ある限り、徳を積み重ねて下さい」のお言葉は胸に染み渡りました。早速、寝たきりのお年寄りに伝えましたところ「寝ていてもお題目はできますから、唱えさせて頂きます」と言っただけだったので、これからも山首上人さまのお心と、法華経三徳の実行を伝え、広めるお手伝いをさせて



頂きます。

○蒲池鈴子（筑後布教所・信教師）

毎月『法音』に掲載される山首上人さまのご講演を拝読させて頂き、慰めて頂いたり、反省したり、感動したり、たくさんの事をお教え頂き、感謝しております。山首上人さまの偉大さを改めて思い、「法音寺の信者でよかった」と、深く深く思いました。布教所に帰って信者の皆さんにこの思いをお伝えするとともに、教えを実行してゆきたいと思いました。

○三好敏博（壱岐布教所・信教師）

たくさんの参列の方々を見て、山首上人さまのお徳の高さを改めて感じました。山首上人さまは『法音』にて常々「自分の立場で徳を積む」ことを教えられ、最後の教化では「命ある限り、徳を積み重ねてください」とお教え下さいました。自分の足元をしっかりと見つけ、地道に徳を積んでゆくことをお誓い致しました。

○吉屋かおる（天草布教所・信教師）

授戒会の折、頂いた授戒名について山首上人さまから「自分が正しいと信じたことを伝えて行きなさい。花の香が風に乘ってどこまでも漂ってゆくように、教えが広まります」とのお言葉を頂きました。

た。以来、このお言葉を心の宝としてまいりました。これからの三徳の広宣流布をご尊影にお誓い致しました。

○浅田剛生（福岡）

山首上人さまのご遷化に接して、父母が御法の縁を得て、私に伝わり、妻・子どもへと引き継がれている幸せに、改めて感謝致しました。周りの人にこの幸せを伝えるため、今まで以上に三徳の実行に励み、大恩に報いるよう精進致します。

○池上智佳子（筑後布教所・信徒）

あまりに突然のことで、心の整理もつかないままご葬儀に参列致しました。山首上人さまの最後のご教化「命ある限り、徳を積み重ねて下さい」のお言葉に、一時も無駄にはできないことを感じました。山首上人さまのように大きなことを成すことはできませんが、最期の時に後悔のないよう、ささやかでも誰かのお役に立つよう生きてまいります。

通夜・葬儀に参列できなかった檀信徒は支院に於て、山首上人さまの御恩に感謝し、一人ひとりが三徳を行ない、その喜びを、家族に、周りの人々に伝える誓いのお経、お題目を捧げました。

（通信員 大庭幸雄）

あの時この時、ありがとうございますございました

田川支院

12月18日、山首上人さま御遷化の報に接し、お留守にされた泰山院日進上人の後をお守りになられました山首上人さま、永い間ありがとうございますと、感謝の言葉を述べさせて頂きました。

私には宝物として胸に秘めている事があります。随分前、初井妙沢法尼もお元氣な頃でした。御開山会の前日、黄昏時、本山に着き、寺務所玄関に一番近い門から入ると丁度、山首上人さまとお庫裡さまがお二人で角塔婆の側にお立ちになって、和やかにお話しをしておられる所に行き合わせたのです。お話の中味はもちろん伺い知れることもできませんが、想像も出来ないご多忙な毎日をお過ごしのことと推察致しますお方が、何をお話しなんでしょう……と、嬉しくて、その時のお姿が忘れられません。私の宝です。

11月14日、副山首上人より授戒法名をお手渡し頂きましたばかりの私ですが、手嶋上人に、出来る事でしたらご葬儀に行かせて頂きたい、とお願いして出席させて頂きました。

20日お通夜、少し早目に本山に着くと、扉に沿って生花が整然と並べられていました。受付を済ませて本堂に入らせて頂くと、内陣いっぱい白い菊の花で飾られた中央にお写真が飾られ、清楚で凛としたものを感じました。ありがたいことにそのまま本堂に座らせて頂き、お焼香をさせて頂きます時「両親の時、あの時、この時、本堂にありがとうございます。これからも何卒よろしくお願い申し上げます」とお願いをいたしました。

21日本葬儀、この日も早目に着き、本堂に座らせて頂きました。この本堂にどれだけの方が入られていたか分かりませんが、一つになった誂経が大きな広がり

心が洗い流されました

亀岡布教所

(通信員 海野和子)

山首上人さまがご遷化されました。信者一同悲しい思いでいっぱいですが、山首上人さまの大慈悲はいつも私達の上に降り注がれ、一人一人が慈悲・至誠・堪忍を実行して大切な御法を広宣流布させ

になり、これが正しく法音寺なのだと感じました。弔辞はどなたも、山首上人さまを尊敬され、慕われておられていた事が言葉の端々に滲み出ていて、私の心と重なり込み上げてきました。そして、祭壇に負けない凛としたお姿でお焼香に行かれるお庫裡さま、若お庫裡さま、お孫様方を誇りに思いました。私もお焼香をさせて頂き、そのまま外に出て設置されている大きなテレビで見せて頂きました。最後のお見送りをさせて頂きふと本堂を見上げると、開かれた中央の扉の前に、合掌されて立たれたお上人方がお見送りされているお姿が見られ、何とも言えぬ美しき、清々しきを感じ、心に迫るものがありました。山首上人さま、ありがとうございました。

て頂けるようにご守護して下さいと、信じてやみません。心の底から感謝申し上げます。

12月20日の通夜に参列された方は「清らかで静寂な空間と時の中で、山首上人

さまの大慈悲心に包まれているような大安心の心を頂戴致しました」とおっしゃられました。

12月21日の葬儀・告別式に参列された方は「静かゆつたりとしたお葬儀に、心が洗い流された思いでした。亡くなられた後も我々にこんな心をお与え下さるのだと、胸に手を当てる心から感謝致しました」とおっしゃって見えました。

開山堂でモニターを見ながら参列された若い人は「私が山首上人さまから受けた御恩は言葉には言い表わすことができません。万分の一にも達しませんが、モニターを見せて頂きながら、ただただ感謝のお題目を心から上げてさせて頂きました。心より写経を一杯書かせて頂きます」と感謝の念を述べられました。

長い間ご苦勞なされて御法一筋に御身を捧げられた山首上人さまの御遺徳に心より感謝致します。

これからは檀信徒一同、山首上人さまのお優しい、心豊かな思いやりと、皆平等に接して下さいました温かい笑顔を追慕しながら、どんな事も喜びに変え、三徳実行により一層精進する事をお誓いし、

御遺徳を讃嘆し、心より謹んで御礼を申

上げます。

(通信員 花崎寿美)

〃心配ない、大丈夫〃

佐屋支院

十二月二十一日、山首上人さまのご葬儀・告別式が営まれました。名古屋ではこの冬一番の寒さとなり、時折、雪もちらつき、まるで私たち信徒の哀しみを表わすようなお天気となりました。

山首上人さまの御遷化をお悼みし、本堂はもちろん境内にも大勢の方のお姿がありました。

境内には何台かのモニターが設置され、本堂でのご法要の様子を拝見することができました。私たちを包み込んでくださるような笑顔の御尊影からは、「何も心配ない。大丈夫だわ」と、普段どおりのお優しいお言葉がお聞きできるような感じました。

このような日が来ることは想像できずにいきました。ずっとずっとご存命で、私たち信徒をお見守り頂けるものと望んでおりました。しかし今、私たちは山首上人さまの御徳の傘下に甘んずることなく、御遺訓の実行に励み、精進していくこと

を、きちんと自覚しなくてはいいけません。そして、それが何よりもの御恩返しになるのだと思います。

お通夜の日もご葬儀の日も、あれ程の厳寒の中、たくさんの方々がご奉仕されているお姿があり、ここにもやはり山首上人さまのみ教えが深く根付いていることを痛感いたしました。多くの方々が誰に依頼されたわけでもなく、ただいても立つてもいられず「何か私にできることはありませんか」「何かさせて頂きたい」と駆けつけられたとお聞きしました。中には、あまりの冷たさに手足がつってしまった方や、口が強張り、案内の台詞が上手く言えない方もいらっしゃいました。ありがとうございました。山首上人さまの「心配ない、大丈夫」のお言葉を、今一度、確信できたように思いました。

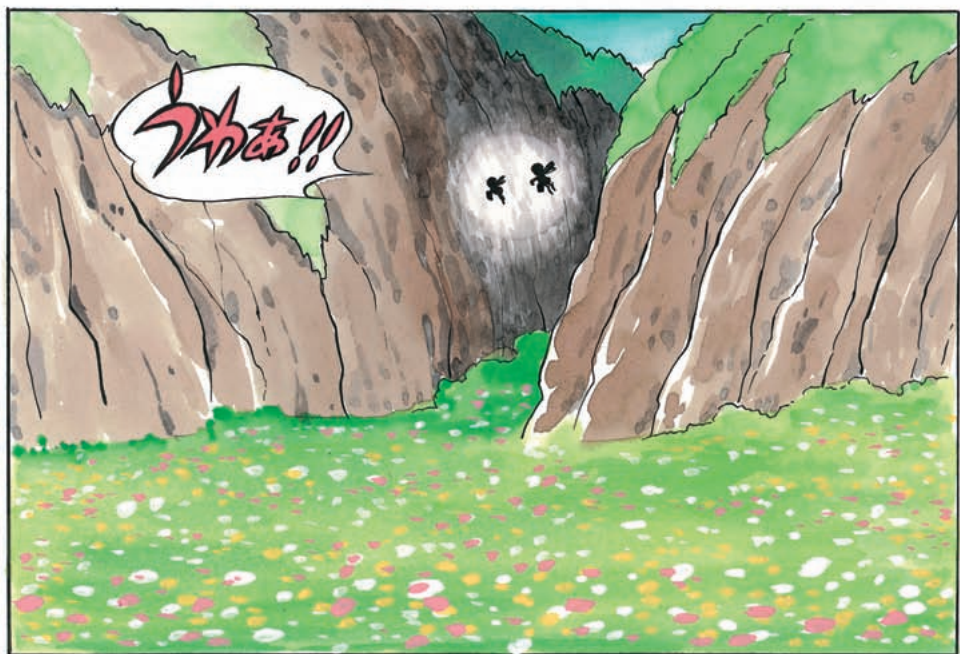
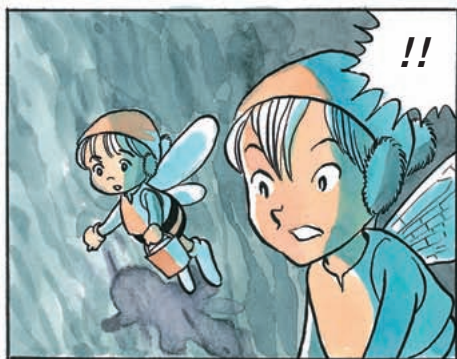
(通信員 成田栄 代 村上美奈子)

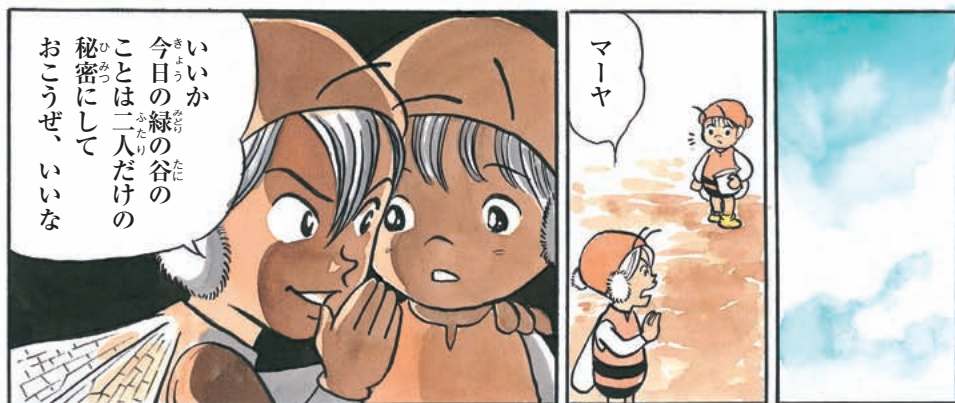
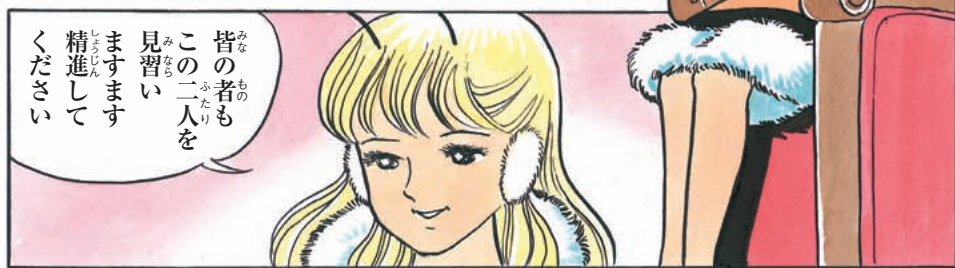
マーヤのぼうけん

竹中 淳











おまえ、また
毎日残業
したいのか!?



バカか!
そんなことしたら
自分のぶんが
少なくなつて
しまうだろ!?

今度はみんなで
緑の谷へ行つて
収穫すれば
たくさんのお蜜が
取れるよ



マーヤ
スーラ
おめでどう
女王様に
ほめて
いただいて
よかったね

あの蜜は
どこで
取つたの?

うん?
え…

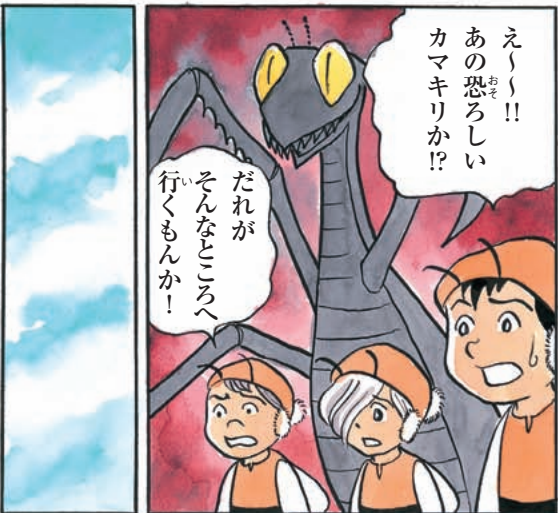


どこ?
ここからは
遠いのかい?
緑の谷の
方かい?

み、緑の
谷!?

ち、違うよ
あそこには
強暴な
虫喰い
カマキリが
いるから!

絶対
行かない方が
いいよ!



えい!!
あの恐ろしい
カマキリか!?

だれが
そんなところへ
行くもんか!







合点 がっせん
だ!!

よし
みんな
行くぞ!



スーラが
ク、クモに!!

マーヤ
どうした?



違ちがうよ
みんなを
呼よんでくる!



一匹ひきなら
いいが、こおう
大勢おほぜいで
来られちゃ
かなわん!!

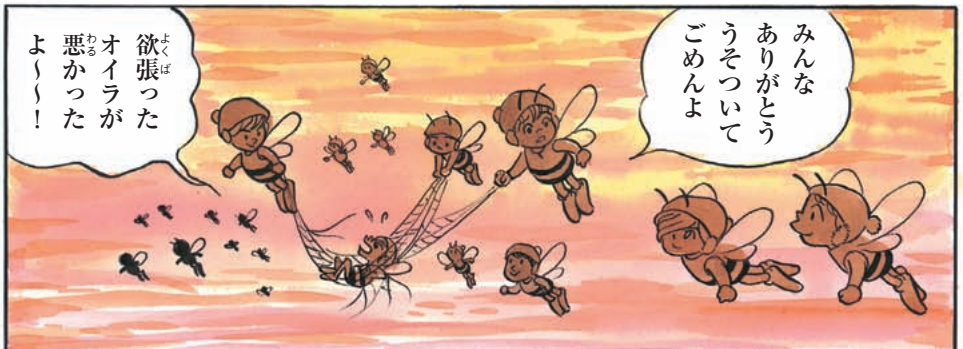


スーラ!
助けたすけに
来きたぞ!



クモの
糸いとが
からままつて...

スーラ
飛とべる??



みんな
ありがとう
うそついで
ごめんよ

欲張よくばった
オイラが
悪わるかった
よ〜!

おしまい

法音・平成25年2月号・No.520・平成25年2月1日発行
発行所・日蓮宗法音寺／制作・法音寺広報委員会
〒466-0832 名古屋市昭和区駒方町3-3 TEL 052-831-7135
非売品／印刷・(株)一誠社

